

解題

柳橋詩話

二卷

加藤良白著

加藤良白、善庵と號す、又た草軒、富春と號す、姫路藩の醫員にして學を好みて文藻あり、江戸に到りて、太田錦城の門に入る、人と爲り、滑稽洒脱、好んで談笑して人の頤を解かしむといふ。

此書は隨園詩話の體に倣ひたるものにして、其意強いて門戸を立て、唐宋の優劣を争はず、多く我邦の古代の詩に關する逸話を收め、且同時の名家の作をも録せり、又以て一時の興會を想見するに足らん。(富春館藏版)

溫公盛德萬世師，史筆汪洋續宣尼。緒餘又見詩話撰，往往戲謔令人嗤。此書體裁雅固然，卮言衍蔓非瑕疵。金甌不缺二百載，奎星光芒射東維。錦心繡口家家有，禹步舜趨爭路馳。收拾全憑副墨功，半言隻字足見奇。老夫近來賜骸骨，宿習未除文字嬉。郵寄落手新著書，一宵快讀欲眠遲。山禽驚起緣底事，半窓梅影月晴時。

十。天保丙申孟春之下澣，河合寸翁題于播州仁壽山之水樓。時年七

小西思順書

題柳橋詩話首

余之於草軒，非有紙鳶土城之契，而芸窓同席，情好篤摯，乃酒香燈影，相隨逐殆乎四十年矣。中間雖以陳馬颺帆，相違離也，相觀則相暱，必以所業切劘。草軒藥匕餘暇，其學屢變矣。時而佛典道藏，時而蟲經魚譜，猶蒙莊之莫不窺焉。其不可測者，洽博之所詣，終始不渝。更惟詩文雜著是也。頃者出詩話數頁，就余商量，將上梓，蓋編摩體裁，摹仿袁簡齋吳澹川，別見新意。彼洽博之緒，未遽抽披，攬之可以供臥遊旁，可以資聞識矣。乃其無脛走千里，可無疑也。今夫講學家兀兀乎，朱陸同異是攻，或窮經自任，則閱閱焉，耗神於尙書之今古。考据雖詳，研鑽雖至，不肖亦不欲踵其後塵矣。伯陽氏所謂我獨頑且鄙耶。柳河東自稱趨起於筆研文墨淺事，余則勇乎踏此轍，不復高標榜也。若詩若文，不務投時尚，爲憂憂難者，歐肝剜骨，亦不敢趨。

述者之迹也。草軒與余乃頽齡遲暮，余髮種種不自知，而嘆其齒牙之動搖，向者酒香燈影，居近而日踈，讀唐棣之詩，爲之三嘆，噫嘻真耄矣。在昔歐陽文忠晚年自理草稿，竄文字，夫人在側曰：君今者宿有何先生，可怕，公笑答：不怕先生，畏後生，有旨哉。吾儕著錄纂綴，今日惟慎晚進之士之可畏焉而已。漫書以充草軒詩話之緒言爾。

天保丙申蒲節前一日，它山公愷識于穉松街之北窓，時宿雨方晴，風日清妍。

大橋知良書

柳橋詩話卷之上

姫路監員

善庵 加藤良白 撰

李白贈韋南陵冰云、君且爲我槌破黃鶴樓、我亦爲君倒卻鸚鵡洲、按此首本意、便在於進酒進酒之要、又在解其心之繫縛也、黃鶴樓乃費緯上仙之地、太白歆豔之意、夢寐不能釋、然當獻酬交錯酣暢耳熱之時、平生希仙之意、渙然冰釋、遂歸于無何有之鄉、所謂費緯仙蹤、又何在哉、君且爲我槌破黃鶴樓、即是鸚鵡洲乃黃祖殺禰衡之地、凡文人才子、左遷流離、經過于此、不慘然流涕者、殆少、韋氏亦即其人、故白勸酒以寬其意、我亦爲

柳橋詩話卷之上

李白、韋南陵冰に贈るに云ふ、君且我が爲に黃鶴樓を槌破せよ、我も亦君の爲に鸚鵡洲を倒卻せんと、按するに此首本意は、便ち酒を進むるに在り、酒を進むるの要は、又其心の繫縛を解くに在り、黃鶴樓は乃費緯上仙の地、太白歆豔の意、夢寐にも釋つる能はず、然れども、獻酬交錯酣暢耳熱するの時に當り、平生仙を希ふの意、渙然として冰釋し、遂に無何有の郷に歸す、謂はゆる、費緯の仙蹤又何くに在るや、君且我が爲に黃鶴樓を槌破せよ、即是れなり、鸚鵡洲は、乃、黃祖、禰衡を殺すの地、凡文人才子、左遷流離、此に經過するに、慘然流涕せざる者は、殆少なり、韋氏亦即其人なり、故に白、酒を勧め以て其意を寬くし、我も亦君が爲に鸚鵡洲を倒卻せんと、即此れなり、要するに是れ白の仙を希ふ、韋氏の懷を傷ると、彼れ此れ妄念のみ妄念を破るの策は、醉郷に遊ぶに非ずして何く

君倒卻鸚鵡洲、即此也、要是白之希仙、與韋氏之傷懷、彼此妄念耳、破妄念之策、非遊醉鄉、而何往哉、故首云、愁來飲酒二千石、尾亦繼之云、且須歌舞寬離憂、首尾參見、則白之本意、熾然如觀火也、白又有句云、願掃鸚鵡洲、與君醉千場、滋可證矣、大凡謫仙之詞、禪家所謂殺佛殺祖之意、讀者爲實相解、則認矣、劉卻君山好、平鋪湘水流、又云、乘興嫌太白、槌破黃鶴樓、蓋由崔顥詩而發也、然則韋氏欲倒卻鸚鵡洲、豈亦與彌衡有宿冤邪、

再按、李太白廬山詩云、手持綠玉板、朝別黃鶴樓、五岳尋仙不辭遠、云云、又云、遙見仙人彩雲裡、手把芙蓉朝玉京、先期汗漫

に往かんや、故に首に云ふ、愁來酒を飲む二千石、尾も亦之れに繼で云ふ、且須らく歌舞して離憂々寛くすべし、と首尾參見すれば、則ち白の本意熾然として火を觀るが如し、白又句あり云ふ、願くは鸚鵡洲を掃ふて君と酔ふ千場せんと滋證すべし、大凡、謫仙の詞は、禪家の謂はゆる佛を殺し祖を殺すの意、讀者實相の解を爲せば、則ち釋れり、君山の好を劉卻し、湘水の流れを平鋪せん、又云ふ、興に乗する太過きを嫌ふ、子猷の舟を焚卻せんと、咸な是の類のみ、崔宗吉詩話に云ふ、李白、黃鶴樓を槌破するは、蓋崔顥の詩に由りて發するなりと、然らば則ち韋氏、鸚鵡洲を倒卻せんと欲する、豈んと亦彌衡と宿冤ありや、

再び按するに、李太白の廬山の詩に云、手に綠玉板を持ち、仙に黃鶴樓に別る、五嶽仙を尋ねて遠きを辭せず、云云、と、又云、遙に見る仙人彩雲の裡、手に芙蓉を把つて玉京に朝す、先づ期す汗漫九坂の上、願くば盧

九垓上、願接、盧敖遊、太清、集中此類極多、
今乃舉其一矣、蓋謫仙、未始不厭人間之

垢汙也。

楊升菴云、楮破黃鶴樓、賜鸚鵡洲、卽出于
禪僧之偈、太白未始有此句、宋初有人僞撰
太白詩云云、蓋升菴亦誤解此二句、故有此
回護之說耳、殊不知仙才之妙、反在于是也、

閉閣只聽朝暮鼓、上樓空望往來船、是樂天
汭江之一聯、而在忠州之作也、弘仁之際、始
傳長慶集一部、帝嗜之、日夜披玩、禁衛之味、
省臣不染指、一日幸河陽館、乃舉是一聯、以
爲卽事、唯空字作遙耳、小野篁跪奏曰、聖作
玄淵、非臣等可議、然遙字似未妥、若改空字、
奈何、其言輒與原本吻合、帝大驚、遂以實告、

敖に接して太清に遊ばんと、集中に此の類極めて多
し、今乃ち其一を舉ぐ、蓋謫仙未だ始めより人間の垢
汙を厭はずんばあらざるなり。

楊升菴云ふ、黃鶴樓を楮破し、鸚鵡洲を賜鸚、卽禪僧の
偈に出づ、太白未だ始より此句あらず、宋初人あり、太白
の詩を僞撰して云云すと、蓋升菴も亦此二句を誤解す、
故に此の回護の説あるのみ、殊に知らず仙才の妙、反て
是に在るを。

「閣を閉て只聽く朝暮の鼓、樓に上りて空く望む往來の
船、是れ樂天春江の一聯にして、而して忠州に在るの作
なり、弘仁の際始めて長慶集一部を傳ふ、帝之れを嗜み、
日夜披玩す、禁衛の味、省臣指を染めず、一日河陽館に幸
す、乃是の一聯を擧げて、以て卽事と爲す、唯空の字を遙
と作すのみ、小野篁跪奏して曰、聖作玄淵、臣等の議す
べきに非ず、然も遙の字未だ妥ならざるに似たり、若し
空の字に改めは奈何と、其言輒原本と吻合す、帝大に驚
き、遂に實を以て告ぐと、詳に大東世語文苑に載す、余竊
に謂らく、是の事訛傳、何ぞ以て信するに足らん、若果し

詳載大東世語文苑矣。余竊謂是事訛傳。何足以信。若果然。可謂君臣俱失矣。何則。樂天忠州之貶。侘僚無聊。無復洛陽宴會之歡。當是時。登臨之興。乃出於不得已。而眼前舟船之往還。但爲傷懷之資耳。故以空望二字。描其羈滯失意之狀。乃下得爲當矣。杜甫云。奉使虛隨八月槎。陳午亭注之曰。今繫舟不能至京華。故曰虛隨。八月槎。蓋樂天空望。杜甫虛隨。其意一也。帝豈然乎哉。萬幾之暇。行幸出入。唯意所欲。陸則鸞輿。水則錦首。莫不咄嗟卽辨。偶有望氛之興。八珍九醞。在于前。昭容昭儀侍于後。以是觀之。夫賈帆漁舟。往來倏忽。便足以驗萬民逸樂之氣象。而山容水態。適作聖情怡悅之具。當是之時。藻思勃勃。

て然らば君臣俱に失ふと謂ふべし。何なれば則樂天忠州の貶。侘僚無聊。復洛陽宴會の歡なし。是の時に當り。登臨の興。乃已むを得ざるに出づ。而して眼前舟船の往還。但懷を傷るの資となるのみ。故に空望二字を以て。其羈滯失意の狀を描す。乃下し得て當と爲す。杜甫云ふ。使を奉じ。虛しく隨ふ八月の槎と。陳午亭之れに注して曰。今舟を繫いで京華に至る能はず。故に曰。虛しく隨ふ八月の槎と。蓋樂天の空望。杜甫の虛隨。其意は一なり。帝豈然らんや。萬幾の暇。行幸出入。唯意の欲する所のまゝなり。陸には則鸞輿。水には則錦首。咄嗟卽辨せざるはなし。偶。望氛の興あり。八珍九醞前に在り。昭容昭儀後に侍る。是を以て之れを觀れば。夫の賈帆漁舟往來倏忽。便ち以て萬民逸樂の氣象を驗するに足る。而して山容水態。適。聖情怡悅の具と作る。是の時に當り。藻思勃々。宸翰揮灑。下す所の字面。遙に望み遠く望む等。俱に擇ぶ所あるなし。唯一の空の字。絶えて不可と爲す。是れ唯に貴賤崇卑の天淵なるのみならず。其苦樂の異。殆氷炭と爲る。若果して空の字を置かば。乃帝病なくして呻吟するなり。豈も亦神仙を賣むるに奴隷の役を以するなり。其顛倒。蹊の甚しき。風を病み心を喪ふに非ずんば。殆是に。至らず。要す

宸翰揮灑所下字面遙望遠望等俱莫有所

釋唯一空字絕爲不可是不唯貴賤崇卑之

天淵其苦樂之異殆爲冰炭若果置空字乃

帝無病而呻吟也篋亦賣神仙以奴隸之役

也其顛倒膠錯之甚非病風喪心殆不至于

是要是溫樹之語人間謬傳不獨此而已。

石志居士中時遺稿一卷需者冠山老侯賜序

梓行石志又有得意一聯云薪水扶勞纒一

力筆瓢存樂已多年。

山谷四休居士序云三平二滿過即休其義

未詳乃質諸吉田淨菴法眼法眼曰歷日有

建除滿平定執非破危成收開閉一月之中或

爲三平二滿或爲二平三滿蓋其事詳見明

物初禪師語錄按淮南子天文謂曰寅爲建卯

御橋詩話卷之上

るに是れ溫樹の語人間に謬傳す獨此れのみならず

石志居士中時遺稿一卷需者冠山老侯賜序梓行せり石志又得意の一聯あり云と薪水勞を扶く纒に一力筆瓢樂を存す已に多年。

山谷四休居士の序に云ふ三平二滿過れば即休すと其義未だ詳ならず乃諸を吉田淨菴法眼に質す法眼曰曆日に建除滿平定執破危成收開閉あり一月の中或は三平二滿と爲り或は二平三滿となる蓋其事詳に明物初禪師語錄に見へたりと按するに淮南子天文謂に曰寅を建と爲し卯を除と爲し辰を滿と爲し巳を平と爲し生を主る午を定と爲し未を執と爲し申を破と爲し酉を主る酉を危と爲し戌を成

按

定、未爲執、主陷、申爲、破主、衡、酉爲、危、主約、戌爲、成、主、小、德、亥爲、收、主、大、德、子爲、閉、主、太、歲、丑爲、閉、主、太、陰、董詩家、亦有、建除體、故件、及之。

萬曆野獲編云、新安黃黃生作五禽言詩、
 譏切京官之苦、有三平兩滿隨分度之句、
 亦原山谷。

文衡山、石翁墨妙四字、乃係中野石翁公之
 寶貯、其石翁之稱、不謀而合、殆如天地祕藏、
 以俟公者、但恨衡山所謂石翁未詳所斥、一
 日公有疾、淨菴法眼飛輿而往、偶舉、是以問
 焉、法眼曰、彼石翁卽沈石田其人也、庚子消
 夏記云、畫冊十六幅、皆倣宋元大家、無不奪
 眞、爲石翁最得意之筆、是可以證矣、公、敏德
 以謝云。

石翁公別業、在葛陂白鬚祠之側、入門、則宛

と爲し小德を主る、亥を收と爲し、大德を主る、子を閉と爲し、太
 歳を主る、丑を閉と爲し、太陰を主る、董詩家亦建除體あり、故に
 之れに併
 せ及ぶ。

萬曆野獲編に云ふ、新安黃々生五禽言の詩を作り、京
 官の苦を譏切す、三平兩滿分に隨つて度るの句あり、
 亦山谷に原づく。

文衡山石翁墨妙の四字、乃中野石翁公の寶貯に係る、其
 石翁の稱は謀らずして合す、殆天地祕藏し以て公を俟つ
 者の如し、但恨む衡山謂はゆる石翁未だ斥す所を詳にせ
 ず、一日公疾あり、淨庵法眼輿を飛して往く、偶、是れを舉
 げ以て問ふ、法眼曰、彼の石翁は卽沈石田其人なり、庚子
 消夏記に云ふ、畫冊十六幅、皆倣宋元大家に倣ひ、眞を奪は
 ざるなし、石翁最得意の筆たりと、是れ以て證すべしと、
 公襟を飲め以て謝すと云ふ。

石翁公の別業、葛陂白鬚祠の側に在り、門に入れば則宛

然縁野輻川、出門、則墨水控引其下、芙蓉筑波成爲、几案之物、公幅巾方袍、從容其中、遠望如神仙、園中一座大石、乃刊、今祭酒林公之高製、予就綱紀、僕而懇求其搨本、未果得也。

陣陣水風吹不散、池塘搖曳紫雲英、是祭酒林公春晚之作也、錦城子在日、喜而誦之、所以久而不忘也。

冷齋夜話云、山谷以集句爲「百家衣」、百家衣、小兒文襟也、本邦保嬰之家、亦製此衣、則知風俗之相似也、范石湖云、菜畦麥隴百家衣、老嫗點頭、不獨白詩而已、王少伯詩、手巾花髻、香枝稻畦成、王右丞詩、乞食從香積、殺衣學水田、稻畦被水田衣、一零邊也、內典、袈裟字作迦薩、蓋西域以毛毳之、一名迦薩服、又名無麻衣、見焦氏筆乘、廣集、以此觀之、則石湖百家衣之句、亦倣稻畦水田衣也。

柳橋詩話卷之上

然縁野輻川なり、門を出づれば、則墨水其下に控引し、芙蓉筑波成几案の物たり、公幅巾方袍、其中に從容し、遠望するに神仙の如し、園中一座の大石には乃ち今の祭酒林公の高製を刊す、予綱紀の僕に就き、而して其搨本を懇求すれども、未だ得るを果さざるなり。

「陣々の水風吹けども散せず、池塘揺曳す紫雲英、是れ祭酒林公春晚の作なり、錦城子在日、喜んで之れを誦す、久ふして忘れざる所以なり。」

冷齋夜話に云ふ、山谷、句を以て「百家衣」と爲す、百家衣は小兒の文襟なり、本邦保嬰の家、亦此衣を製すれば、則知る風俗の相似たるを、范石湖云ふ、菜畦麥隴百家衣と、老嫗點頭す、獨白詩のみならず、王少伯の詩、手巾花髻、香枝稻畦成、王右丞の詩、乞食從香積、殺衣學水田、稻畦被水田衣、一零邊也、內典、袈裟の字、迦薩に作る、蓋西域を以て之れを作る、一名迦薩服、又名無麻衣と云づく、焦氏筆乘、廣集、以此觀之、則石湖百家衣の句、亦倣稻畦水田衣に倣ふ。

唐宣宗云童子解吟長恨歌、胡兒能唱琵琶篇、是白詩之定論也、冷齋夜話謂、樂天每賦一詩、質諸老嫗、洪覺範不持妄語戒、何邪、

拈花集一卷、凡五律百三十餘、咸係唐賢集句、乃篁園野村先生所撰也、冊首繫以清商江芸閣朱柳橋之二序、江文以長不錄、朱序云、夫吟詠一道、作固不易、而集古爲尤難、蓋非讀破萬卷、棄粕取精、兼取衆長、再加以剪裁者、不能茲靜宜先生以集古一冊見示、性耽翰墨、更隱成名、志在詩書、文壇著望、以繪虎雕龍之手、爲裁雲鑲月之篇、集腋成裘、聲同金石、釀花作蜜、宇吐珠璣、羅卷軸於胸中、詞源三峽、運化工於腕底、筆挽千鈞、僕誦陽春、未免窺管之誚、謬加月旦、良深附驥之私、

唐の宣宗云ふ、童子吟するを解す長恨歌、胡兒能く唱ふ琵琶の篇、此れ白詩の定論なり、冷齋夜話に謂ふ、樂天一詩を賦する毎に、諸を老嫗に質すと、洪覺範、妄語戒を持せざるは何ぞや。

拈花集一卷、凡五律百三十餘、咸唐賢の集句に係る、乃篁園野村先生選する所なり、冊首繫るに清商江芸閣朱柳橋の二序を以てす、江の文は長きを以て録せず、朱の序に云ふ、夫れ吟詠の一道、作固に易からず、而して古を集るを尤難しと爲す、蓋萬卷を讀破し粕を棄て精を取り、衆長を兼取し、再び加ふるに剪裁を以てする者に非ずんば能はず、茲に靜宜先生、古集一冊を以て示さる、性、翰墨に耽り、更隱、名を成し、志、詩書に在り、文壇望を著す、繪虎彫龍の手を以て、雲を裁し、月に鑲むの篇を爲し、腋を集め裘を成し、聲、金石に同じ、花を釀して蜜と作し、字、珠璣を吐き、卷軸を胸中に羅す、詞三峽に源せり、化工を腕底に運らす、筆、千鈞を挽く、僕、陽春を誦す、未だ管を窺ふの誚を免れず、謬りて月旦を加ふ、良に附驥の私を深くす、是れを序と爲す、道光四年、仲春月上旬、當潮朱柳橋と。

是爲序道光四年仲春月上旬當湖朱柳橋

千峯出浪險說一徑入雲斜有地唯栽

竹無村不是花重猿圍淺井可宿鷺起

圓沙前此景吟難盡西樓倚暮霞李商○

越嶺千重合宋之問湘流一孤通包蟬鳴秋樹

瘦李成鳥宿夜山空許范蠡舟偏小市陶潛

屋不豐白居易江天詩景好移入畫屏中

右拈花集中題畫之詩僅舉其二讀者朶頤

當是恨一櫛之吝

評者謂五山先生本邦之袁子才也是說但

見其杜德機耳蓋其似者三不似者三舉世

推爲詩伯其似一詩話聞傳紙價爲貴其似

二聲色之好老而不廢其似三矣子才氏園

池之勝棟宇之麗歌于是哭于是而先生祝

柳橋詩話卷之上

「千峯浪を出で、險なり、一徑雲に入りて斜なり、地あり唯竹を栽う、無村とて是れ花ならざるはなし、

重猿淺井を圍む、可宿鷺圍沙に起つ、前此景吟して盡し難

し、谷西樓暮霞に倚る、李商○越嶺千重合し、宋之問

湘流一孤通す、包蟬鳴き秋樹瘦せ、李成鳥宿して夜山空し、許范

蠡舟偏に小なり、市陶潛屋豊ならず、白居易江天詩景好し、

移して畫屏中に入る、右拈花集中、題畫の詩僅に其

二を舉ぐ、讀者頤を朶る、當に是れ一櫛の吝なるを恨む

べし。

評者謂ふ、五山先生は、本邦の袁子才なりと、是の說但其

杜徳の機を見るのみ、蓋其似たる者三、似ざる者三、世を

擧げて推して詩伯と爲す、其似たる一、詩話聞傳紙價爲

に貴し、其似たる二、聲色之好、老いて廢せず、其似たる三、

子才氏、園池の勝、棟宇の麗、是に歌ひ是に哭す、而して先

生は、祝融屢災し、居を移して定らず、其似ざる一、子才氏

の著書、關難、世に問はざるなし、而して先生一點の心血、

融屢災、移居不定、其不似一、子才氏之著書、莫不開雕問世、而先生一點心血、又爲火所、蕪、其不似二、子才氏以穹碑鉅制、爲世所譏、而先生之文、莫有白璧之微瑕、其不似三也、其自述云、楞櫟能全、只任天、華顛又是及、華年、世途踰躑、當時夢、老境汗漫、今日綠竹院、尋僧林下、屐洞簫伴、客月中、船青雲、自信吾無分、卻愧詩名到處傳、蓋子才集中、似是綺麗之作、恐不多觀也。

一田舍漢、攜書畫冊子來、使予寓目、恣態橫生、鸞舞蛇驚、傑出於諸家者、米菴先生之真蹟、莫有疑者矣、因心口相語曰、蠢然褐夫、修何功德、以獲至寶邪、所書亦係其得意之六言、可謂二絕矣、急喚兒輩、使錄其詩、云、漫作

又火に蕪かる、其似ざる二、子才氏穹碑の鉅制を以て、世に譏らる、而して先生の文、白璧の微瑕あるなし、其似ざる三なり、其自述に云ふ、楞櫟能く全し、只天に任ず、華顛又是れ華年に及ぶ、世途踰躑當時の夢、老境汗漫今日の綠、竹院僧を尋ぬ林下の屐、洞簫客を伴ふ月中の船、青雲自ら信ず、吾が分なきを、卻て愧づ、詩名の到る處に傳はるを、蓋子才集中是に似たる綺麗の作、恐くは多く觀ざるなり。

一田舍漢、書畫冊子を携へ來り、予をして目を寓せしむ、恣態橫生、鸞舞蛇驚、諸家に傑出する者は、米菴先生の真蹟、飛ぶ者あることなし、因て心口相語りて曰、蠢然たる褐夫、何の功德を修め、以て至寶を獲たるかと、書する所亦其得意の六言に係る、二絶と謂ふべし、急に兒輩を喚び其詩を録せしむ、云ふ、漫作應酬、實を羨ぎ、澄心刻意、意違あらず、何ぞ妨げん、賢筆の世に銷かるゝを、亦幾人をし

應酬寒賁、澄心刻意不違、何妨價筆銷世、亦使幾人潤、藪、心閒意適誰合、心遽手忙我乖、自愧鐵門不限、飛毫一日千回。

湘東一目誠甘死、天下中分尙可持、可謂警策、溆南詩話曰、以湘東目爲碁眼、不愜甚矣、按桓譚新論云、使野中死、碁皆生、集韻云、博局方目、謂之野、推是則湘東一目與碁眼對比、何妨、王若虛蓋吹毛之論耳。

詩佛先生、輸碁云、勝負只從運、休嗤一著非、七十二黑子、未免白登圍、是不唯前人未道破、亦能隱碁理、蓋先牛諱碁故也、碁博士安井俊哲謂、夫碁猶兵焉、凶器之戒、最爲喫緊、漢祖自鴻溝一賭以來、赤縣神州、遂入囊橐、譬猶弈家乘勝之時、至白登之圍、七日不食、

て勝を潤さしむ、心閒に意適すれば誰にも合ふ、心遽に手忙しければ我に乖く、自ら愧づ鐵門限らず、飛毫一日千回なるを。」

「湘東一目誠に死を甘んず、天下中分尙持すべし」と警策と謂ふべし、溆南詩話に曰、湘東目を以て碁眼と爲す、愜はざる甚しと、按するに桓譚新論に云ふ、野中の死碁をして皆生せしむと、集韻に云ふ、博局方目、之れを野と謂ふ、是れを推せば則湘東の一目、碁眼と對比す、何ぞ妨げん、王若虛は、蓋、毛を吹くの論のみ。

詩佛先生の輸碁に云ふ、勝負只運に従す、嗤ふを休めよ一著の非、七十二の黒子も、未だ白登の圍を免れず、是れ唯に前人の未だ道破せざるのみならず、亦能く棋理を曉る、蓋先生碁を善くする、故なり、碁博士安井俊哲謂ふ、夫れ碁は猶、兵のごとし、凶器の戒、最喫緊と爲す、漢祖鴻溝一賭より以來、赤縣神州遂に囊橐に入る、譬へば猶、奕家勝に乗するの時のごとし、白登の圍に至り、七日不食はす、陳平の一著子微りせば、則全局殆覆る、譬へば猶、奕家

微陳平之一著子、則全局殆覆、譬猶奕家桑榆之敗、公羊傳云、王者不治夷狄、蓋不治之中、有治者存焉、是奕家持滿之道也、持滿之道、非國手不能、譬猶王者坐廟堂之上、不動一戈、不勞一卒、而運蠻夷控馭之策也、難哉、是技也、唐太宗之於高麗、宋太祖之於契丹、猶恃強以取、敗衄、卽白登之覆轍耳、苟使王侯通曉某理、則天下國家、其庶幾乎治焉。

六如上人、關原詩落句、用賭乾坤三字、余服其警策、後讀韓文公鴻溝云、誰勸君王回馬首、真成此役賭乾坤、是上人所本也、說者謂大坂城中之士、視秀賴爲孤注矣、近人緝成一詩云、乾坤一賭全輸了、孤注猶持十六年、天平十一年、大伴宿禰子蟲祈殺中臣宮處

桑榆の敗のごとし、公羊傳に云ふ、王者は夷狄を治めず、と、蓋、治めざるの中、治むる者ありて存す、是れ奕家持滿の道なり、持滿の道は、國手に非ざれば能はず、譬へば猶王者、廟堂の上に坐し、一戈を動かさず、一卒を勞せず、而して蠻夷控馭の策を運らすのごとし、難いかな、是技や、唐の太宗の高麗に於ける、宋の太祖の契丹に於ける、猶強を恃み以て敗衄を取れり、卽白登の覆轍のみ、苟王侯をして、某理に通曉せしめしは、則天下國家、其れ治まるに庶幾からん。

六如上人關原の詩の落句、乾坤を賭すの三字を用ふ、余其警策に服す、後、韓文公の鴻溝を讀みしに云ふ、誰か君王に勸めて馬首を回す、真成に此役乾坤を賭すと、是れ上人の本づく所なり、說者謂ふ、大坂城中之士、秀賴を視て孤注と爲す、近人緝めて一詩を成して云ふ、乾坤一賭全く輸了す、孤注猶持す十六年。

天平十一年、大伴宿禰子蟲、中臣宮處連東人を祈殺す、其

連東人其忿爭之端發於圍碁詳載續日本紀是圍碁見于史之權輿也大和物語云橘良利精於奕削髮號寬連宇多帝睿賞之餘遂錫碁聖大德四字之美稱焉延喜十三年五月奉詔作碁式獻之矣正治年間有玄尊者撰圍碁口傳一卷卽節錄碁式之要云距今六百年口傳現存抑亦奇矣口傳載碁局之制長一尺四寸八分廣一尺四寸高一尺四寸大抵與今之楸枰略約相合則知寬連之遺制仍不泯矣世俗亦傳一說云眞備公爲聘唐使彼土圍碁乃與杜陽雜編日本王子來朝對奕之說殆相符矣然我則稱眞備大勝彼則謂王子大敗要是彼此誇誕各衒其技耳曷可信乎故無取焉按源氏物語亦

忿爭の端圍碁に發せり詳に續日本紀に載す是れ圍碁の史に見はるゝの權輿なり大和物語に云ふ橘の良利突に精し後髮を削りて寬連と號す宇多帝睿賞の餘遂に碁聖大德四字の美稱を錫ふ延喜十三年五月詔を奉し碁式を作り之れを獻す正治年間玄尊と云ふ者あり圍碁口傳一卷を撰す卽碁式の要を節錄すと云ふ今を距る六百年口傳現に存す抑亦奇なり口傳に碁局の制を載す長さ一尺四寸八分廣さ一尺四寸高さ一尺四寸大抵今の楸枰と略約相合す則知る寬連の遺制仍不泯びざるを世俗亦一説を傳へて云ふ眞備公聘唐使と爲り彼の土にして棋を圍みたりと乃杜陽雜編に日本王子來朝し對奕するの說と殆相符す然れども我は則稱す眞備大に勝つと彼は則謂ふ王子大に敗ると要是是れ彼此誇誕して各其技をふ衒ふのみ曷ぞ信すべけんや故に取る無し按ずるに源氏物語にも亦空蟬圍碁の事を載す併へ擧げて以て一證に備ふ

載空蟬圍碁之事、併舉以備一證。

菅家文章載、觀王度圍碁、獻主人云、一死一生爭、道類、手談厭卻口談人、殷勤不愧相嘲、誦說當家有積薪、自注云、世有大唐王積薪碁經一卷云云、又云、去冬過平右軍池亭對奕、乃賭以雙圭新賦云云。

我藩抱一公子、春秋六十八、捐館於文政戊子之歲矣、公子少壯謝事、優游翰墨、後逃于佛、圓頂方袍、居然方外人也、性有異稟、凡百技藝、莫所不綜、最巧於繪事、既而求者麇至、遂不能拒、侍者往往代盤礴之勞、猶商賈筆殆遍天下矣、予所錫絹本白描櫻花、上題二句云、風簾勿輕展、片片化將飛、蓋其自負之意、殆與顧虎頭之一絕相合、宜天稟之賢才、

菅家文章に載す、王度の圍碁を觀、主人に獻するに云ふ、一死一生道を争ふこと類なり、手談厭卻す口談の人、殷勤愧ぢ相嘲誦す、誦に説く當家積薪ありと、自注に云ふ、世に大唐王積薪碁經一卷あり云々、又云ふ、去冬平右軍の池亭を過ぎり、奕に對し、乃賭るに雙圭新賦を以てすと云云。

我藩の抱一公子、春秋六十八、文政戊子の歲に捐館す、公子は少壯にして事を謝し、翰墨に優遊し、後、佛に逃れ、圓頂方袍、居然たる方外の人なり、性異稟あり、凡百の技藝綜べざる所なく、最、繪事に巧なり、既にして求者麇至す、遂に拒む能はず、侍者往々盤礴の勞に代る、猶商賈筆、殆天下に遍し、予が錫はりし所の絹本は、白描の櫻花、上に二句を題して云ふ、風簾に輕しく展する勿れ、片々化して將に飛ばんとす、蓋其自負の意、殆顧虎頭の一絶と相合す、宜なり、天稟の賢才、便ち末技に掩はるなり。

便爲末技所掩也。

抱一公子嘗謂古人能書畫而號玉潤者有三焉、宋僧瑩玉潤其一、宋僧若芬亦又號玉潤、其二、金孟季生亦號玉潤、其三也、鑒賞家動輒以玉潤藉口誇耀、安知不類於元史之十五脫脫邪、其談吐風流、一言發矇、大抵是類已。

宋若芬字仲石、元孟珍字季生、俱號玉潤、見書畫譜焉、明朱程圻字崇甫號玉潤、王昇字廷禮、號玉潤生、俱載明詩綜焉、唯瑩玉潤未詳其傳記也。

狩野素川所摸、本朝尙齒會橫卷、首有鵬齋先生題辭、云、唐白香山九老會、宋文潞公耆英會、當時以爲盛事、後世圖畫而傳之矣、本

抱一公子嘗て謂ふ、古人書畫を能くして、玉潤と號せし者、三あり、宋の僧瑩玉潤其一なり、宋の僧若芬も亦又玉潤と號す、其二なり、金の孟季生も、亦玉潤と號す、其三なり、鑒賞家動もすれば輒玉潤を以て口に掛きて誇耀す、安ぞ元史の十五脱々に類せざるを知らんやと、其談吐風流、一言矇を發く、大抵是の類のみ。

宋若芬、字は仲石、元孟珍、字は季生、俱に玉潤と號す、書畫譜に見ゆ、明の朱程圻字は崇甫、玉潤と號す、王昇字は廷禮、玉潤生と號す、俱に明詩綜に載す、唯瑩玉潤、未だ其傳記を詳にせざるなり。

狩野素川摸する所の、本朝尙齒會の横卷、首に鵬齋先生の題辭あり、云ふ、唐白香山の九老會、宋文潞公の耆英會、當時以て盛事と爲す、後世圖畫して之れを傳ふ、本邦保元平治擾亂の後、朝廷無事、士民小康、是の時に當り、上は

邦保元平治擾亂之後、朝廷無事、士民小康、當是之時、上自親王大臣、下至百執事、各以文雅詞藻、而實承平、詞花集成於其前、千載集成於其後、一世之文明、不問而可知矣、承安二年、大宮大進藤原清輔等、設筵于寶莊嚴寺、爲尙齒會、胡考七人、吟哦嘯詠、衍然相樂、其兄弟子孫、及當時縉紳、端居堂廡、奉頌禱之歌、都人士女、觀者如堵、實一時之盛事也、其後爲之畫圖、稱其事、而相傳焉、平子德所藏、毘陀野素川畫尙齒會合三頁、精緻巧麗、極有趣焉、今披是圖、覽之、一時羣老風流餘韻、藹然乎赫蹏之上、此會雖景慕香山潞公之遺蹤而效之、千載之後、亦足以觀時世之文明、人物之雅尙矣、時文化癸酉夏

親王大臣より、下は百執事に至るまで、各、文雅詞藻を以て、承平を賣る、詞花集は其前に成り、千載集は其後に成る、一世の文明問はずして知るべし、承安二年大宮の大進藤原の清輔等、筵を寶莊嚴寺に設け、尙齒會を爲す、胡考七人、吟哦嘯詠、衍然相樂しむ、其兄弟子孫、及び當時の縉紳、堂廡に端居し、頌禱の歌を奉ず、都人士女、觀る者堵牆の如し、實に一時の盛事なり、其後之れが畫圖を爲り、其事を稱して、而して相傳ふ、平子德藏する所、畫院狩野素川の畫、尙齒會、合て三頁、精緻巧麗、極めて趣あり、今是の圖を披き之れを覽るに、一時の群老、風流餘韻、赫蹏の上に藹然たり、此會、香山潞公の遺蹤を景慕して之れに效ふと雖、千載の後、亦以て時世の文明、人物の雅尙を觀るに足る、時に文化癸酉夏六月中浣、尙齒會凡七人、素川八、政六十九、清輔六十九、輝光六十三、群に古今著聞集に見ゆ。顯廣王七十一、顯

六月、中浚。尙齒會凡七人、殺虜八十四、顯廣王七十一、顯政六十九、清輔六十九、顯

光六十三、詳見古今著聞集。

按、古者王室隆盛之際、宰輔之臣、不嗜文、蓋少矣、故每設尙齒會、若詩若文、績采絢爛、令後人追慕、本朝文粹、蒼家文藻、可徵矣、貞觀中、南亞相公始設、是會于小野山莊、安和、藤亞相公於粟田山莊、天承中、藤權亞相公而文章道衰、僅僅止於國歌已。

承安二年、賴政年六十九、乃列尙齒會七人之中矣、治承四年、稱兵討平氏、敗績自盡、是時年七十八、噫夫、鬢鏢老翁、杖戈殉國難、可謂烈丈夫也、西門蘭溪咏之曰、潛臣跋扈奈國何、上皇恰似投火蛾、憤慍不堪高倉王、火

按ずるに古者王室隆盛の際、宰輔の臣に、文を嗜まざるは蓋し、故に毎に尙齒會を設け、若くは詩若くは文、績采絢爛、後人をして追慕せしむ、本朝文粹、蒼家文藻、徵すべし、貞觀中、南亞相公始めて、是の會を小野の山莊に設く、安和中、藤亞相公粟田の山莊に於てし、天承中、藤權亞相公、白河の山莊に於てせし者、或是れなり、承安二年、清輔等に至り、而して文章の道衰ふ、僅々國歌に止まるのみ。

承安二年、賴政年六十九、乃列尙齒會七人の中に列す、治承四年、兵を稱げ平氏を討つて、敗績して自盡す、是時年七十八、噫夫の鬢鏢たる老翁、杖を杖て國難に殉す、烈丈夫と謂ふべきなり、西門蘭溪之れを咏じて曰、潛臣跋扈、國を奈何、上皇恰も火に投ずる蛾に似たり、憤慍堪へず、高倉王、火急制を下して干戈を動かす、巨石卵を壓す、孰か知らざらん、慷慨義を踏み他を計らず、一戰支へず、鳥合

急下制動干戈、巨石壓卵孰不知、慷慨蹈義、不計他、一戰不支烏合兵、高王已似落風坡、臣節已盡有死耳、絕筆從容裁國歌、異日諸源忽濺起、平族悉殄西海波、菟道依然舊山水、孤墳一片不銷磨。

纏頭布施、江戸土人、概稱之花歌妓幫間、以花紅柳綠隱語、月旦遊客之豐膏、亦可笑也、花藥夫人宮詞云、月頭支給買花錢、滿殿宮人近數千、遇著唱名多不語、含羞走過御牀前、汴梁宮人宮詞云、人間多棗栗、不到九重天、長吏黃衫吏、花攤月賜錢、所謂買花錢、又云花攤月賜錢、蓋咸隱諱之辭耳、清嘉錄載、簾下有、人新出浴、玉尖親數一花錢、又引李翹俗呼小錄云、俗數錢、以五文爲一花、可見

の兵、高王已に落風坡に似たり、臣節已に盡く死あるのみ、絕筆從容國歌を裁す、異日諸源忽濺起す、平族悉く殄く、西海の波、菟道依然たり舊山水、孤墳一片銷磨せず。

纏頭布施、江戸の人、概して之れを花と稱す、歌妓幫間、花紅柳綠の隱語を以て遊客の豐膏を月旦す、亦笑ふべし、花藥夫人の宮詞に云ふ、月頭支給す花を買ふ錢、滿殿の宮人數千に近し、名を唱ふるに遇著して多く語らず、羞を含んで走り過ぐ御牀の前と、汴梁の宮人の宮詞に云ふ、人間棗栗多し、九重の天に到らず、長吏黃衫吏、花は攤す、月賜の錢と、贈はゆる買花の錢、又云ふ、花は攤す、月賜の錢と、蓋咸な隱諱の辭のみ、清嘉錄に載す、簾下人あり、新に浴を出づ、玉尖親しく數ふ一花の錢と、又李翹の俗呼小錄を引きて云、俗に錢を數へ五文を以て一花と爲す、人情相遠からざるを見るべし、而して口に阿堵を言はざる者は、唯に晉の王衍のみにあらざるなり、按ずる亦是の義、清朝錄に云ふ、男女操處、嬉遊花叢と。

人情不相遠、而口不言阿堵者、不唯晉之王

衍也。按、花兒亦是義、清朝律云、男女嫁處、陪送花費。

高麗人參贊、載宋人詩話、李瀕湖綱目所引、卽是已、近時官時人參培、養滋殖、廣被天下、惠民之澤、度越前古、然製法不精、識者憾焉、石坂竽齋法眼、曾得東醫之秘訣、因奉旨以董製造之事、於是尹孚之質始發、粹然之德大備、天下之行尸走肉、莫不霍然而蘇、翕然而起矣、醫人咸踊躍曰、自今以往、朝鮮之貢殆爲遼東之豕矣、昔者孫思邈著千金方、藥劑之中、多用蟲族、遂獲殺生之譴、云、法眼之舉、乃反於是、其所仰以奉者、至仁至惠之德意也、所俯以養者、至困至賤之病民也、以是較之、則上天墮命、而享白日飛昇之福、孰敢

高麗人參の贊、宋人の詩話に載るは李瀕湖の綱目に引く所卽是れのみ、近時官時の人參培養滋殖し、廣く天下に被り、惠民の澤、前古に度越す、然も製法精ならず、識者憾む、石坂竽齋法眼、曾て東醫の秘訣を得、因て旨を奉し、以て製造の事を董す、是に於て尹孚の質、始めて發し、粹然の徳大に備はる、天下の行尸走肉、霍然として蘇し、翕然として起たざるはなし、醫人咸踊躍して曰、今より以往、朝鮮の貢、殆遼東の豕と爲ると、昔者孫思邈、千金方を著し、藥劑の中、多く蟲族を用ひて、遂に殺生の譴を獲ると云ふ、法眼の舉は、乃是れに反す、其仰で奉する所の者は、至仁至惠の徳意なり、俯して以て養ふ所の者は、至困至賤の病民なり、是を以て之れを較せば、則上天墮りみ命じて、而して白日飛昇の福を享けん、孰れか敢て不可と謂はんや、法眼吟詩を喜び、語、警拔多し、其偶成に云ふ、
「架書千萬卷、中に有名の人を列す、呼取して閑寂を消す、其談日、新奇なり、按ずるに人參の贊、最古きは李時珍引く所據る、蓋細檢を缺く、亦尙宏贊の説なり、茲には漁隱叢話に因るのみ。」

謂不可哉、法眼喜吟詠、語多警拔、其偶成云、

架書千萬卷、中列有名人、呼取消閑寂、其談

日新奇、按、人參贊、最古矣、李時珍所引亦陶宏景之說也、茲據西隱叢話、蓋因于然細

耳、

清貧二字、君子之標榜也、吾儕小人、終日營

營、爲阿堵所役、而以清貧藉口、可謂僭矣、唯

濁貧二字、卽愜當矣、濁貧之尤者、未有山田

栢園若者、而栢園不唯不恤、眉宇間照熙然、

殆如享牢饌、登春榭、比鄰有一醫、家道大盛、

高堂邃宇、婢妾綺羅者數十人、栢園則幕

門蓬戶、一婢一僕、執爨炊而已、然彼人終以

賄殞命、栢園則范叔一寒、依然然而無恙矣、較

此理、則濁貧猶可、至濁富、則人譴鬼責、莫不

叢集、吁可畏哉、栢園罹甲午災、僑寓墨水、漫

清貧の二字は、君子の標榜なり、吾儕小人、終日營々として、阿堵に役せらる、而して清貧を以て口に藉く、僭、謂ふべし、唯濁貧の二字、卽愜當ならんのみ、濁貧の尤なる者は、未だ山田栢園に若く者有らず、而して栢園唯恤へ

ざるのみならず、眉宇の間、熙々然として、殆ど牢饌を享け春榭に登るが如し、比鄰に一醫あり、家道大に盛んに、高堂邃宇、婢妾綺羅を曳く者數十人、栢園は則ち幕門蓬戶、一婢一僕、爨炊を執るのみ、然も彼の人は、終に賄を以て命を殞し、に、栢園は則ち范叔一寒、依然として恙なし、此理を較れば、則ち濁貧猶可なり、濁富に至りては、則ち人譴鬼責、叢集せざるなし、吁、畏るべきかな、栢園、甲午の災に罹り、墨水に僑寓す、漫興に云ふ、多謝す祝融氏、吾れを驅りて此間に住せしむ、四鄰、只花木、一夢、或は青山、墨水靈府を洗ひ、丹霞醉顔に上る、機心、灰滅久し、須く白鷗の間に伴ふ

清貧の二字は、君子の標榜なり、吾儕小人、終日營々として、阿堵に役せらる、而して清貧を以て口に藉く、僭、謂ふべし、唯濁貧の二字、卽愜當ならんのみ、濁貧の尤なる者は、未だ山田栢園に若く者有らず、而して栢園唯恤へざるのみならず、眉宇の間、熙々然として、殆ど牢饌を享け春榭に登るが如し、比鄰に一醫あり、家道大に盛んに、高堂邃宇、婢妾綺羅を曳く者數十人、栢園は則ち幕門蓬戶、一婢一僕、爨炊を執るのみ、然も彼の人は、終に賄を以て命を殞し、に、栢園は則ち范叔一寒、依然として恙なし、此理を較れば、則ち濁貧猶可なり、濁富に至りては、則ち人譴鬼責、叢集せざるなし、吁、畏るべきかな、栢園、甲午の災に罹り、墨水に僑寓す、漫興に云ふ、多謝す祝融氏、吾れを驅りて此間に住せしむ、四鄰、只花木、一夢、或は青山、墨水靈府を洗ひ、丹霞醉顔に上る、機心、灰滅久し、須く白鷗の間に伴ふ

興云多謝祝融氏、驅吾住此間、四鄰只花木、一夢成青山、墨水洗靈府、丹霞上醉顏、機心灰滅久、須伴白鷗閒、其門生攜詩來謂曰、先生之貧、清淨如此、子之言誤矣、栢園名安貞、相書鼻爲山根、山根有疾、恐非佳兆矣、然東晉謝安北宋劉貢父俱有是疾、一則德望蓋世、一則博識該覽、居一代諸賢之右、予友吳士寧精于賞鑑、人咸謂今之貢父也、每吟詩則使諸友雌黃、咸嘆曰、擁鼻之吟、何可容喙、曉看海棠云、睡眠揩摩破曉天、三盃卯酒占人先、耽梅一病今將癒、又爲海棠重欲顛、秋日偶成云、秋風渺渺雁南翔、蘭秀菊芳霜氣高、忽有故人分薄俸、呼妻先擬購綈袍、秋江獨釣云、雨養烟笠冷、秋潭獨繭綸、輕向夕嵐

べし、と其門生詩を攜へ來り謂て曰、先生の貧、清淨此の如し、子の言誤ると、栢園名は安貞。

相書に鼻を山根と爲す、山根疾ある、恐くは佳兆に非ず、然も東晉の謝安、北宋の劉貢父、俱に是の疾あり、一は則德望世を蓋ひ、一は則博識該覽、一代諸賢の右に居る、予か友吳士寧は賞鑑に精し、人咸な謂ふ今の貢父なりと、詩を吟する毎に、則諸友をして雌黃せしむ、咸な嘆して曰、擁鼻の吟、何ぞ喙を容るべけんやと、曉に海棠を看るに云ふ、睡眠揩摩す破曉の天、三盃卯酒人先に占む、梅に耽る一病今將に癒へんとし、又海棠の爲に重ねて顛せんと欲すと、秋日偶成に云ふ、秋風渺々雁南に翔り、蘭秀で菊芳しく霜氣高し、忽、故人の薄俸を分つあり、妻を呼んで先づ綈袍を購はんと擬すと、秋江獨釣に云ふ、雨養烟笠秋潭冷に、獨繭綸輕く夕嵐に向ふ、細繭歸來蘆荻の寒沙禽飛ひ上る小魚籃。

細逕歸來蘆荻暮沙禽飛上小魚籃。

寺田蜀龍、錄一齋佐藤先生詩見似云、東軒朝讀易、讀罷一吟呻、雪砌冰初渙、煙庭草發屯、齡今丁既濟、歡舊對同人、世遷須頤養、乾坤不盡春、又樓上望嶽云、一箇艇洲膝亦安、曾經嶽降著儒冠、何時去踞芙蓉頂、濯足東溟百尺瀾、予聞佛身長六千、恆河沙俱低那由多由旬、嘻嶽降之英靈、寧無其理哉。

寺田蜀龍、謾題芻防人云、能引也勇、不發也仁、仁且勇矣、而未見其智焉、蓋君子引而不發、躍如也、安知其不知道邪。

寺田蜀龍、一齋佐藤先生の詩を録して似しさる云ふ、東軒朝に易を讀む、讀み罷んで一たび吟呻す、雪砌氷始めて渙け、烟庭草屯を發す、齡は今既濟に丁り、歡は舊同人に對す、世遷須く頤養すべし、乾坤不盡の春と、又樓上に嶽を望むに云ふ、一箇の艇洲膝亦安して、會て嶽降を経て儒冠を著く、何れの時か去りて芙蓉の頂に踞し、足を濯はん東溟百尺の瀾に、と予聞く佛身長け六千、恆河沙俱低、那由多、由旬と、嘻嶽降の英靈、寧ぞ其理なからんや。

寺田蜀龍、謾題芻防人に題して云ふ、能く引くや勇、發せざるや仁、仁且勇なり、未だ其智を見ず、と、蓋君子は引いて發せず、躍如たり、安んぞ其道を知らざるを知らんや。

洋器時辰表、蓋極小僅に二三分の者を以て貴と爲す、初めは一二百金に非れば購ふ能はず、近時本邦の匠人、稍稍製を曉る、殆眞と相亂る、大さ一寸許の者に至りては、價亦廉、十金以下にて乃辨すへし、故に執紵子弟荷包に

金以下乃可辨矣。故執紉子弟。收入荷包。以繫腰焉。頃刻不去。稱人廣衆。必彼此對查。便覈牛毛繭絲之羸縮。以此爲娛樂。爲誇耀矣。一日客至。談及此器。客曰。吾儕寒士。安貯是物。予答以購藏弗一。其人錯愕。即求寓目。予探篋出二本。因謂曰。一則清人沈成大所製。一則本邦佐藤一齋所造。俱極刻鏤之妙。洋製視之。蔑如也。沈成大、西洋調時儀記、見學福齋雜著。

謹按。陽成帝筑波根之睿製。意當是絕妙好辭。然非王言之體。定家何意措之百人一首之中矣。史云。釣殿御子者。帝從叔母也。國色無雙。帝屢欲恣。固拒不肯。帝心緒擾亂。輾轉反側之餘。遂有筑波根之挑詞焉。釣殿一睹心動。終不能自持。後及花落色衰。帝意他遷。

收入して以て腰に繫け、頃刻も去らず、稱人廣衆、必彼此對查し、他ち牛毛繭絲の羸縮を覈め、此を以て娛樂と爲し、誇耀と爲す、一日客至り、談じて此器に及ぶ、客曰、吾儕寒士安ぞ是物を貯へん、予答ふるに購藏一にあらざるを以てす、其人錯愕し、即寓目を求む、予篋を探り、二本を出す、因て謂つて曰、一は則清人沈成大の製する所、一は則本邦佐藤一齋の造る所、俱に刻鏤の妙を極む、洋製に之れに視ぶるに蔑如たり。沈大の西洋調時儀の記、學福齋雜著に見えたり。

謹んで按ずるに陽成帝筑波根の睿製は、意ふに當に是絶妙好辭なるべし、然も王言の體にあらす、定家何の意ぞ、之れを百人一首の中に措くや、史に云ふ、釣殿の御子は帝の從叔母なり、國色無雙、帝屢恣せんと欲す、固く拒んで肯んぜず、帝心緒擾亂し、輾轉反側之餘、遂に筑波根の挑詞あり、釣殿一たび睹て心動き、終に自持する能はず、後花落ち色衰ふるに及び、帝意他に遷る、因りて憤恚し、疾を成し、竟に殞す、帝尋いで狂易の疾を發す、乃、其厲

因憤悲成疾、竟殞。帝尋發狂易疾、乃爲其厲鬼所祟云。因是觀之、悉姪穢行之源、發自此三十一字、而人臣之分、痛哭流涕、長大息、亦可矣。定家不唯不隱諱、顯然表襮、舉以爲國歌之雋逸、又如何哉。或曰、驪姬夜半之泣、丘明國語、拳拳載錄焉。玄宗楊妃月下之盟樂天之詩、寫其隱私、國歌之道、依倣是意、凡詞藻美則采錄矣、秉彝之德、固所不論也。蓋其然歟。鈴木昌則、悉誦筑波根聖藻云、愛河一挽、筑波水、遂使狂瀾漲九重。其措意、與定家異矣。

定家子曰、爲家、爲家有二子、曰爲氏、曰爲持、乃異腹兄弟也。爲持之母、曰某氏、後雜髮號阿佛、世又稱越部禪司、蓋以世襲采邑、在播

鬼に祟らると云ふ、是れに因りて之れを觀れば、悉姪穢行之源は、此三十一字より發す、而して人臣の分、痛哭流涕、長大息するも、亦可なり。定家唯隱諱せざるのみならず、顯然表襮、舉げて以て國歌の雋逸と爲す、又如何ぞや、或ひと曰く、驪姬夜半の泣、丘明國語に拳々載録す、玄宗楊妃月下の盟樂天の詩、其隱私を寫す、國歌の道、是意に依倣す、凡詞藻美なれば、則采録す、秉彝の德、固より論せざる所なりと、蓋其れ然るか、鈴木昌則、悉しく筑波根の聖藻を誦するに云ふ、愛河一たび挽く、筑波の水、遂に狂瀾をして九重に漲らしむ、と其意を措く、定家と異なり。

定家の子を爲家と曰ふ、爲家、二子あり、曰爲氏、曰爲持、乃異腹の兄弟なり、爲持の母を某氏と曰ふ、後、雜髮して阿佛と號す、世、又越部の禪司と稱す、蓋世襲の采邑、播州越部の莊に在るを以てなり、始め爲家、後、兄弟牆に闘ぎ、

州越部莊也、始爲家沒後、兄弟鬩牆、爭論不已、遂訴諸鎌倉幕府、禪尼重跡東行、乃辯其曲直、是時撰十六夜日記、可謂女丈夫而能文者矣、予味於國書、故其事實不甚明晰、一日讀寸翁老主長篇、始悉禪師之爲人、可謂詩史矣、其詩云、山村麥方熟、桑樹鳩呼雨、濟水乃龍野、沿溪入越部、峽路路偏滑、晚步步增苦、花垣弔佳人、石佛獨占古、早辭宮嬪榮、署名依乃父、新勅撰成日、慷慨不肯取、三帝後鳥羽、土御門、崇徳三上皇、遠西狩、一言足報主、肉食恥、紅顏滿朝須、愧死、朗月兼紅淚、永既染肺腑、蓬麻訟身冤、歌詠幕府、野水清如舊、願影傾簪組、那捨京華春、甘爲山下姥、文物異昔時、玉闕非樂土、松老停風聲、草叢留蝶舞、流

柳橋詩話卷之上

爭論已ます、遂に諸れを鎌倉幕府に訴ふ、禪尼重跡東行し、乃其曲直を辯ず、是時十六夜日記を撰す、女丈夫にして而して文を能くする者と謂ふべし、予國書に味し、故に其事實甚明晰ならず、一日寸翁老主の長篇を讀み、始めて禪師の人となりを悉す、詩史と謂ふべし、其詩に云ふ、山村麥方に熟し、桑樹鳩雨を呼ぶ、水を濟れば乃龍野、溪に沿ふて越部に入る、峽路路偏に滑かに、晚步步増苦し、花垣佳人を弔ふ、石佛獨古を占む、早く宮嬪の榮を辭し、名を署して乃父に依る、新勅撰成るの日、慷慨肯て取らず、三帝後鳥羽、土御門、崇徳三上皇、遠く西に狩し、一言主に報するに足る、肉食紅顏に恥づ、滿朝須く愧死すべし、朗月と紅淚と、永く既に肺腑を染む、蓬麻身の冤を訟へ、歌詠幕府を驚かす、野水清きこと舊の如く、影を願みれば簪組傾く、那ぞ京華の春を捨てて、甘して山下の姥となる、文物昔時に異り、玉闕樂土に非ず、松老いて風聲を停め、草叢ふて蝶舞を留む、流鶯我を引き去り、落日林鳩に鳴く、時の中麻典故、十六夜日記に詳なり、朗月蓬等の語、亦皆禪尼國歌の詞なり。

鶯引我去、落日輝林埒。詩中典故共詳于十六夜日記、朔月葦麻等之

語、亦皆碑尼、國歌之詞也。

姫路詩人、高橋倉山、準頭、溼丹、性酷嗜酒、故也、爲人、駢弛、不能檢束、愛者少、而憎者多、見愛何也、以其天真爛漫、見憎何也、乃以不、細鼠拱羊屈之苛禮也、然鼠拱羊屈之徒、車載斗量、未嘗見其奇也、而倉山之詩、讀者莫不擊節也、溪閣園基圖云、雲木映掩一溪碧、伊誰架閣與世隔、不知亦自有心機、成敗時關一局棋、子聲丁丁午更靜、嵐翠波光上鬢眉、墨水探春云、短策長隄、踏軟莎、春風無處不紛譁、檣聲截水來、藏柳、騎影飛塵去、入花、茶店簾帷遮落日、酒家樓閣鎖殘霞、狂遊未必輸年少、惟愧漣漪照鬢華。

姫路の詩人、高橋倉山、準頭、溼丹の如く、性酷だ酒を嗜む故なり、人となり駢弛、檢束する能はず、愛する者少し、而して憎む者多し、愛せらるは何ぞや、其天真爛漫を以て憎まるゝは何ぞや、乃鼠拱羊屈の苛禮に細はざるを以てなり、然れども鼠拱羊屈の徒は、車載斗量なるに、未だ嘗て其奇を見ざるなり、而るに倉山の詩は、讀者節を擊たざるはなし、溪閣茶を圍む圖に云ふ、雲木映掩一溪碧、伊れ誰か閣を架して世と隔つる、知らず亦自ら心機あり、成敗時に關す一局の棋、子聲丁々午更に靜なり、嵐翠波光鬢眉に上ると、墨水に春を探るに云ふ、短策長隄、踏軟莎を踏み、春風處として紛譁ならざるはなし、檣聲水を載りて來りて柳に藏れ、騎影塵を飛ばして去りて花に入る、茶店の簾帷落日を遮ぎり、酒家の樓閣殘霞に鎖さる狂遊未だ必しも年少に輸せず、惟愧漣漪の鬢華を照らすを」と。

燒堂在姫路城北一里餘、蓋鹽冶高貞夫人死節之所、當時堂燬、故有此名焉、後人因其址建僧旁一區、老衲奉香火、偶有人至者、欣然迎接、絮絮說事蹟、酬以數錢去、但近時所建碑石、高丈餘、屹立中庭、洵爲偉觀、撰文是村田繼儒、筆札則糟谷墨舟、可謂雙美矣、予遊燒堂、見壁上二詩、云、洞房賢媛見人挑、自誓蘭摧與蕙凋、芳烈須歸鹽冶氏、繆侯孔父共窳窳、一片碑文故故鏤、丈餘巨石架龜趺、冤魂當是無遺恨、金谷何人弔綠珠、二首俱佳、惜說不記姓名、按禮記云、陽侯殺繆侯、而竊其夫人、此典與孔父嘉竝叙於鹽冶氏之事、可謂切當矣、

精里古賀先生、七騎冢碑文云、鹽冶高貞被

燒堂は姫路城北一里餘に在り、蓋鹽冶高貞夫人死節の所なり、當時堂燬く、故に此名あり、後人其址に因りて僧房一區を建つ、老衲香火を奉するのみ、偶、人至る者あれば、欣然として迎接し、絮々事蹟を説く、酬ゆるに數錢を以てして去る、但近時建つる所の碑石、高さ丈餘、中庭に屹立し、洵に偉觀たり、撰文は是れ村田繼儒、筆札は則糟谷墨舟、雙美と謂ふべし、予燒堂に遊び、壁上の二詩を見るに云ふ、洞房の賢媛人に挑まる、自ら誓ふ蘭摧と蕙凋と、芳烈須く鹽冶氏に歸すべし、繆侯孔父共に窳々、一片の碑文故々に鏤す、丈餘の巨石龜趺に架す、冤魂當に是れ遺恨無かるべし、金谷には何人か綠珠を弔せん、二首共に佳なり、惜いかな姓名を記せず、按するに禮記に云ふ、陽侯、繆侯を殺し、而して其夫人を竊むと、此典、孔父嘉と竝べ叙す、鹽冶氏の事に於て、切當なりと謂ふべし、

精里古賀先生、七騎冢の碑文に云ふ、鹽冶高貞讎せられ

讒濟奔私邑於出雲也。第四郎告發之，是以
 爲追兵所及。第六郎從至播州加古川驛，見
 勢急，與親從六人反鬪而死。高貞是以獲達
 出雲，遂自殺。時人瘞六郎等屍於驛傍，號曰
 七騎冢。今年癸酉，邑人山田政敬謀亂，財立
 石以標識之，問文於予。按紀載，方後醍醐帝
 之反正，高貞歸順出於不得已，帝輟宮人賜
 之，蓋欲收其心也。然不旋踵而叛降，足利氏
 忽以宮人故，遭奇禍致滅亡。若有天道焉，獨
 六郎爲兄義從，爲主捍禦殞身，與高貞及四
 郎所爲相爲薰蕕，有足悲者。事距今五百年
 許，而冢猶可認，因成斯舉，良有以也。文化十
 年正月。

本藩儒醫村田繼儒號農水，□年前壽八十

潛に私邑に出雲に奔るや、第四郎之れを告發す、是を以
 て追兵に及ばる、弟六郎從ひ播州加古川驛に至り、勢の
 急なるを見、親從六人と、反り鬪ひて死す、高貞是を以て
 出雲に還するを獲、遂に自殺す、時人六郎等の屍を驛傍
 に瘞め、號して七騎冢と曰ふ、今年癸酉、邑人山田政敬、財
 を糾め石を立て、以て之れを標識せんと謀り、文を予に
 問ふ、紀載を按ずるに、後醍醐帝の反正に方り、高貞の歸
 順は已むを得ざるに出づ、帝、宮人を輟めて之れを賜ふ、
 蓋其心を收めんと欲してなり、然るに踵を旋らますして
 叛し、足利氏に降る、忽宮人の故を以て、奇禍に遭ひ、滅亡
 を致す、天道あるが若し、獨六郎は、兄の爲に義從し、主の
 爲めに捍禦して身を殞す、高貞及四郎の爲す所と薰蕕を
 相爲す、悲むに足る者あり、事は今を距る五百年許、而し
 て冢猶認むべし、因りて斯舉を成す、良に以へあるなり、
 文化十年正月。

本藩の儒醫村田繼儒は農水と號す、□年前壽八十にし

而卒、閉戸讀書、元々五六十年、清俸有餘、而事務極閑、可謂上界神仙之福矣、天保庚寅暮秋、送予東歸、云、湖中佳節、黃華酒、山下夕陽、黃葉詩、可謂佳句矣、農水即皆川洪園之高足也、性過恭謹、故奉師說、殆如孔穎達之視鄭玄也、予嘗戲之曰、文辭之道、助語爲要、然昔人不敢說破、周與嗣云、語助云者焉哉乎也、柳宗元曰、焉矣也、決辭也、邪乎哉、疑辭也、僅僅是類已、及洪園先生出、其所撰著、史記助字法、左傳助字法、詩經助字法、不一而足、古人助語之秘鑰、發揮無復遺蘊、可謂偉功矣、農水喜見眉字、曰、我師、真助字之聖也、未始悟其戲謔也。

先哲云、六朝翻譯法華、不用一助語、音響節

て卒す、戸を閉ぢて書を読み、元々五六十年、清俸餘りあり、而して事務極めて閑なり、上界神仙の福と謂ふべし、天保庚寅暮秋、予の東歸を送るに云ふ、湖中の佳節、黃華の酒、山下の夕陽、黃葉の詩と、佳句と謂ふべし、農水は皆川洪園の高足なり、性恭謹に過ぐ、故に師說を奉する、殆く孔穎達の鄭玄を視るが如し、予嘗て之れに戯れて曰、文辭の道は、助語を要と爲す、然るに昔人敢て說破せず、周與嗣云ふ、語助と云ふ者は、焉哉乎也と、柳宗元曰、焉矣也、は決辭なり、邪乎哉は疑辭なりと、僅僅是類のみ、洪園先生出づるに及び、其撰著する所の史記の助字法、左傳の助字法、詩經の助字法、一にして足らず、古人助語の秘鑰、發揮して復遺蘊なし、偉功と謂ふべし、農水喜び眉字に見はれて曰、我師は、真に助字の聖なりと、未だ始めより其戲謔を悟らざるなり。

先哲云ふ、六朝法華を翻譯して一の助語を用ひず、音響

奏莫不和諧喜說助字者可以自反也。

古德語錄多以響字爲助語盧允武助語辭

乃注者字曰或有俗語響宜夜切本字意又

注也字曰也字間亦有響字意響乃里切音

予讀書三十年唯此響字始得助語注解之

力。

李石續博物志云二廣俗好於門畫虎頭書

響字謂陰司鬼名也讀漢舊史雖逐疫鬼又

立桃人葦索滄耳虎等響爲蓋滄耳是亦一

義不可不知也後略它山曰是既見段柯古雜

蓋作合是李石宋人救戰西陽偶說。

播州室鼻在於管內去城一日程而弱海岸

斗絕之下別開小洞天即鼻也海面隆起處

上有明神祠蓋千年古廟是爲鼻口自此透

節奏和諧せざるなし喜んで助字を説く者以て自ら反すべきなり。

古德の語録多く響の字を以て助語と爲す盧允武の助語辭に乃ち者の字を注して曰或俗語の響宜夜切本字

の意ありと又也の字を注して曰也の字間亦響の字の意ありと響乃里の切予書を讀む三十年唯此響字始

めて助語注解の力を得たり。

李石續博物志に云ふ二廣の俗好んで門に虎頭を畫き響字を書す謂ふ陰司鬼の名なりと漢舊史を讀むに疫鬼を儼逐し又桃人葦索滄耳虎等を立つと響は滄耳を蓋ふと爲す是亦一義知らざるべからず後它山に略す曰

祖、既誤簡に見ゆ漢舊史葦索に作るを當と爲す蓋を合に作る是なり李石は宋人西陽を救戰して偶、誤る。

播州の室鼻は管内に在りて城を去る一日程にして弱

し海岸斗絶の下別に小洞天を開く即鼻なり海面隆起

の處上に明神の祠あり蓋千年の古廟なり是れを鼻口

と爲す此より透迤して入る則鼻腹に至る海船是に於

て

遊而入、則至鼻腹、泊於是下、猶可保無虞、故水路諸侯從、此上下焉、貿易之人、莫不娼集、娼樓妓館、備比鱗次、絃歌之聲、達旦而不休、商賈視爲樂土、亦宜也、本藩某大夫、嘗巡視此地、有詩云、器宇方須師鼻腹、吐吞日本國中船、其人果不凡矣。

室麁詩人野本圓次、予三十年前、與之邂逅、似所業云、壽永繁華渾一夢、唯留羅襪向人誇、讀之茫然詰其故、輒曰、凡天下娼妓、天寒不著襪、唯此地獨否、何則昔者平氏之敗、于一谷也、諸平倉皇擁幼主、泛海、不暇他顧、是時宮人逃散、彷徨海岸、及其溝壑之瘠已逼、便挾琵琶、以博商舟之歡、亦勢之不得已也、故告朔之羊、迄今相沿不忘耳、則知行一萬

て、猫を下し、無虞を保すべし、故に水路諸侯此れより上下す、貿易の人娼集せざるなし、娼樓妓館、備比鱗次、絃歌の聲、且に達して休まず、商賈視て樂土と爲す、亦宜なり、本藩の某大夫、嘗て此地を巡視し、詩あり云ふ、器宇方に須く鼻腹を師とすべし、吐吞す日本國中の船と、其人果して凡ならず。

室麁の詩人野本圓次は、予三十年前、之れと邂逅せしに、所業を似して云ふ、壽永の繁華渾て一夢、唯羅襪を留め人に向つて誇ると、之れを讀み茫然として其故を詰れば、輒曰、凡天下の娼妓は、天寒けれども襪を著けず、唯此地は獨否らず、何となれば昔者平氏の一谷に敗るゝや、諸平倉皇幼主を擁し海に泛び、他を顧るに暇あらず、是時宮人逃散、海岸に彷徨し、其溝壑の瘠已に逼るに及び、便ち琵琶を挾み、以て商舟の歡を博す、亦勢の不得已を得ざるなり、故に告朔の羊は、今に追ひ、相沿ひ、忘れざるのみ、則知る一萬里を行くは、獨り杜詩を注するのみならずなし。

里、不獨注杜詩而已。

室鼻之人、唱一種詞曲、名曰棹歌、亦平氏之遺聲云、原田鎮平云、坐上衆賓齊按節、行雲爲過棹歌中、是也、李白云、滄浪吾有曲、寄入棹歌中、其名同、而其寔異也。

古者、上自秦晉齊楚之大國、下及曹鄴之微、莫不措行人、而其職必待賢以授焉、當時諸侯、都邸所措、稱留守居者、是類已、要是官府奉承之務、不論細大、統管其事、而四方專對、亦悉總攬、故職事勞午、戴星出入、莫有門籥之禁、少暇、則章臺之花、庾樓之月、劇場角力、同盟徵逐焉、莫不輻輳、而舟舫湊也、譬猶宜僚于羽之術、行乎弄丸甘寢之中也、故各藩以是爲精選、苟非誦詩三百、通風土物情、

室鼻の人、一種の詞曲を唱ふ、名けて棹歌ふねうたと曰ふ、亦平氏の遺聲と云ふ、原田鎮平云ふ、坐上の衆賓齊しく節を按し、行雲爲に過る棹歌の中と、是れなり、李白云ふ、滄浪吾に曲あり、寄せて入る棹歌の中と、其名は同じ、而れども其寔は異なり。

古者、上、秦晉齊楚の大國より、下曹鄴の微に及ぶまで、行人を措かざるなし、而して其職は必賢を待ち以て授く、當時諸侯、都邸の措く所留守居と稱する者は、是の類のみ、要は是れ官府奉承の務め、細大を論ぜず、其事を統管す、而して四方の專對も亦悉と總攬す、故に職事勞午、星ぞ載きて出入し、門籥の禁あることなし、少しく暇あれば、則章臺の花、庾樓の月、劇場角力、同盟徵逐、輻輳んで而して舟舫湊せざるはなし、譬へば猶ほ宜僚于羽の術を弄丸甘寢の中に行ふがごとし、故に各藩是を以て精選と爲す、苟詩三百を誦し、風土物情に通ずる者に非ざれば、曷ぞ能く其職に副んや、莊野淡齋、本藩の留守居なり、朝霞を詠じて云、水を籠め山を籠め紗よりも薄く、春妍更に此中に向つて加ふ朝霞映出す般々の色、綠處は

者、爲能副其職哉、莊野淡齋本藩之留守居也、咏朝霞云、籠水籠山薄似紗、春妍更向此中加、朝暎映出般般色、綠處垂楊白處花、淡齋爲人、白皙面長、昂昂乎有野鶴之風度、且善和歌、筆札亦佳、頃者蓬爾傾逝、人咸謂爲酒所禍、予謂不然、蓋佳木易枯已。

加藤九如號恆齋、閑居雜咏云、劍書琴鶴一船歸、築屋江邨掩竹扉、笠澤高人貧亦樂、柴桑處士事皆非、長隄雪暗柳無力、淺渚潮鳴風有感、從此半生計好、烟波深處著蓑衣、又木曾道中之作、多可摘之句、鳥呼碎雨零烟暮、人散村祠野市秋、水合一溪風雨急、山連四面畫圖開、旭將軍營餘古樹、泉才女塚臥荒邱、古關人少無雞唱、道旁有下不破關遺址漁叟仙

柳橋詩話卷之上

垂楊白處は花、淡齋人と爲り、白皙にして長く、昂々乎として、野鶴の風度あり、且和歌を善くし、筆札も亦佳、頃日蓬爾として傾き逝く、人咸謂ふ酒に禍せらるると、予は謂ふ、必しも然らず、蓋佳木は枯れ易きのみと。

加藤九如、恆齋と號す、閑居雜咏に云ふ、劍書琴鶴一船にして歸り、屋を江邨に築き、竹扉を掩ふ、笠澤の高人は貧亦樂み、柴桑の處士は事皆非なり、長隄雪暗くして柳に力なく、淺渚潮鳴りて風に感あり、此れより半生計好し、烟波深處に蓑衣を著けん、と、又木曾道中の作に、摘すべきの句多し、鳥は呼ぶ碎雨零烟の暮人は散す、村祠野市の秋、水合して一溪風雨急に、山連りて四面畫圖開く、旭將軍の營は古樹を餘し、泉才女の塚は荒邱に臥す、古關人少に雞唱なく、道旁に不破の關の遺址あり、漁叟仙成りて鶴の歸るあり、皆誦すべし。

成有鶴婦皆可誦。

少陵云、引杯見劍長、恆齋亦有是癖矣、嘗著劍說一部、乃發前人所未發、舉其要云、本邦刀劍之精良、居世界萬國之首、其由蓋有五焉、東方屬木、又屬蒼龍、刀劍卽蒼龍之精、是一也、開國神聖、以十握劍、爰刈凶氛、而歷世授受之時、草薙之劍、亦居大寶之一焉、是其二、後鳥羽帝、以萬乘之尊、留心于此、名匠數十、輪直待詔、或至御手試鍛、焯之法、是其三、考工記云、吳粵之劍、遷乎其地、而弗能良、地氣使然也、本邦當東維之極、其清淑英靈之氣、磅礴而不得泄者、悉發之于蓮花秋水之間、豈唯地氣使然而已、是其四、于將莫邪以下、吳粵良工、僅僅屈指耳、本邦之良匠、不唯

少陵云、杯を引き劍を見る長しと、恆齋亦是癖あり、嘗て劍說一部を著す、乃前人の未だ發せざる所を發す、其要を舉ぐ、云ふ、本邦刀劍の精良なるは、世界萬國の首に居る、其由は蓋五あり、東方は木に屬す、又蒼龍に屬す、刀劍卽蒼龍の精は一なり、開國の神聖、十握劍を以て、凶氛を爰刈す、而して歷世授受の時に草薙の劍、亦大寶の一に居る、是れ其二、後鳥羽帝萬乘の尊を以て、心を此に留む、名匠數十、輪直待詔、或は御手鍛焯の法を試むるに至る、是れ其三、考工記に云ふ、吳粵の劍は、其地より遷れば、而ち良なる能はずと地氣然らしむるなり、本邦は東維の極に當り、其清淑英靈の氣、磅礴して泄るゝことを得ざる者、悉く之れを蓮花秋水の間に發す、豈唯地氣の然らしむるのみならんや、是れ其四、于將莫邪以下、吳粵の良工、僅僅指を屈するのみ、本邦の良匠、唯百倍のみならず、天其人を生じ、將に其用を致さんとす、上古より以來、威武外國を震懼するは、其效豈んど是に在るか、是れ其五、又云ふ、本土の劍、西土に傳ふる、亦尙し、安倍仲麻呂命を銜み、本國に使ひするに云ふ、平生一寶劍、留めて一故人に贈

按今唐詩
留胎句、
使作、
交人、
結

百倍、天生其人、將致其用、自上古以來、威武震懼外國、其效豈在於是耶、是其五矣、又云、本土之劍、傳西土亦尙矣、安倍仲磨、衝命使、本國云、平生一寶劍、留胎一故人、可徵矣、歐陽日本刀歌、後之殆三百年矣、

屈大均廣東新語曰、粵多番刀、有曰日本刀者、聞其國無論會王、鬼子始生、即以鑄鐵百斤、淬之溪中、歲凡十數煉、比及丁年、僅成三刀、其修短以人為度、長者五六尺、爲上庫刀、中者腰刀、短小者解腕刀、初治時殺牛馬、以享刀師、刀師卜日、乃治以毒藥入之、刀成埋諸地中、月以馬血澆祭、於是刀往往有神、其氣色陰晴不定、每值風雨、躍躍欲出、有聲匣中鏗然、其刀惟刻上庫字者、不出境、刻漢字、

ると、徵すべし、歐陽が日本の刀の歌は、之れに後るゝ殆三百年なり。

屈大均の廣東新語に曰、粵に番刀多し、日本刀と曰ふ者あり、聞く其國は會王に論なく、鬼子始めて生るれば、即鑄鐵百斤を以て、之れを溪中に淬し、歳に凡十數煉、丁年に及ぶ比、僅に三刀を成す、其修短は人を以て度と爲す、長きは五六尺、上庫刀と爲す、中は腰刀、短小なる者は解腕刀、初めて治する時、牛馬を殺し、以て刀師を享す、刀師日を卜し、乃治するに毒藥を以てして、之れに入る、刀成れば諸を地中に埋め、月、馬血を以て澆祭す、是に於て刀往々神あり、其氣色陰晴定らず、風雨に値ふ毎に、躍々出でんと欲し、聲ありて、匣中に鏗然たり、其刀、惟上庫の字を刻する者のみは、境を出さず、漢字、或は八幡大菩薩と刻する、單槽雙槽の者は、澳門に多く、之れあり、梅花鋼、馬身鋼を以て、以と爲す、刀盤に紫銅を用ふる者あり、金銀

或八幡大菩薩、單槽雙槽者、澳門多有之、以梅花鋼馬身鋼爲貴、刀盤有用紫銅者、鑲金銀者、燒黑金者、皆作梵書花草、有小七、在刀室中、謂之刀奴、其水土既良、錘煅復久、以故光芒炫目、犀利逼人、切玉如泥、吹芒斷毛、髮入若□、不折不缺、其人率橫行疾聞、飄忽如風、常以單刀陷陣、五兵莫禦、其用刀也、長以度形、短以趨越、蹲以爲步、退以爲代、臂以承腕、挑以藏敵、豕突蟹奔、萬人辟易、真島中之絕技也、云云、良白按、本邦刀劍之制、室首承鐔處、鑿開一小室、安小刀、名曰小柄、頗有利、亦耐割裁、亦開一室、與之相對、更斂小七形者、喚爲筭、純銅製造、不用鋼鐵也、屈翁山所謂刀奴、想必此二者也、然所謂小七、焉

を鑲鑲する者あり、燒黑金なる者あり、皆梵書花草を作
る、小七あり、刀室中に在り、之れを刀奴しちかと謂ふ、其水土既
に良し、錘煅復久し、故を以て光芒目を炫し、犀利人に逼
り、玉を切る泥の如く、芒を吹き毛髮を斷ち、入りて、闕研
の若く、折れず、缺けず、其人率ね橫行疾聞、飄忽、風の如く、
常に單刀を以て陣を陥れ、五兵も禦ぐなし、其用刀や、長
以て形を度り、短以て趨越し、蹲以て歩を爲し、退以て代
を爲し、臂以て腕を承け、挑以て敵を藏し、豕突蟹奔、萬人
辟易す、真に島中の絕技なり、云云、良白按するに、本邦刀
劍の制、室首鐔を承くる處、一小室を鑿開し、小刀を安く、
名けて小柄と曰ふ、頗、輕利、亦割裁に耐ふ、亦一室を開き、
之れと相對し、更に小七形の者を斂め、喚んで筭と爲す、
純銅にて製造し、鋼鐵を用ひざるなり、屈翁山の謂はゆ
る刀奴に、想必に必此の二者ならん、然も謂ふ所の小七
焉んぞ、七目の例に非ざるを知らんや、然らば、則其指斥す
る所は、蓋小柄なるか、

知非七首之例乎、然則其所指斥、蓋小柄歟。
 加藤恆夫、石本龜齡、前後相繼、而除留守居
 之職焉、恆夫嘗嘆曰、龜齡亦陰酒肉地獄矣、
 其新除之苦態、可察也、龜齡嘗謂、外史之目
 出、周禮春官、蓋視內史、唯崇卑之別耳、後
 世布衣文墨之流、猥以外史自居、可謂僭矣、
 按唐賀知章隱居鑑湖、自號秘書外監、乃以
 頭銜爲戲、諺已、後人遂祖其意、而外史之稱
 亦遂假而不反也。

山陽詩集刊於生前、山陽外史刻于沒後、爰
 舍之人、莫不踴躍、蓋山陽屢遊仁壽山矣、所
 謂與山有宿緣也。

唐它山漫筆云、癸丑五月、西上、十三日、途入
 伊勢、過藤納言遺蹤、得詩云、手捧諫疏、期紫

加藤恆夫、石本龜齡、前後相繼、以留守居の職に除せら
 る、恆夫嘗て嘆じて曰、龜齡亦酒肉地獄に墮つと、其新除
 の苦態、察すべきなり、龜齡嘗て謂ふ、外史の目、周禮春官
 に出づ、蓋内史に視ぶれば、唯崇卑の別あるのみ、後世布
 衣文墨の流、猥に外史を以て自ら居る、僭と謂ふべしと、
 按ずるに唐の賀知章鑑湖に隱居し、自ら秘書外監と號
 す、乃頭銜を以て戲諺を爲すのみ、後人遂に其意を祖と
 し、而して外史の稱、遂に假りて反さるるなり。

山陽詩集は、生前に刊し、山陽外史は、沒後に刻せり、爰舍
 の人踴躍せざるなし、蓋山陽屢に遊べり、謂はゆる
 山と宿縁あるなり。

唐它山漫筆に云ふ、癸丑五月、西上、十三日、途伊勢に入
 り、藤納言の遺蹤を過り、詩を得たり、云ふ、手に諫疏を捧
 げて紫微に朝し、豈妻愛惑事方に非なり、區々たる一章

微、豔妻焚惑事方非、區區一章和三木不及藤公早見機、路上倉卒日、寓興已、余與頼子成未、誓和識、折入京通、介相見、一見如舊、因問近製、即出視之、山陽擊節再三、亦見似藤公埋髮冢作云、黑頭非是不勝、響、確削誰知此意深、王土終歸、姦賊手、空埋曲局、戴天心。

一説云、藤房挂冠嘉遁之後、遂參關山國師、鑽研有年、終嗣大法、妙心二世授翁宗弼、即其人也、元政上人著扶桑隱逸傳、乃載其事、元政釋子之麟鳳、豈妄言者邪、蓋必有據也。

尾崎正風云、判香家、乃製羊角方寸許、點香其上、火勢不猛、漸漸而熱、名曰銀葉、陸放翁云、銀葉無煙靜炷香、即是也、召溪漁隱亦云、

と三木と、及ばず藤公の早く機を見るに、路上倉卒且く興を寓するのみ、余、頼子成と未だ嘗て相識らず、折れて京に入り、介を通じ相見えしに、一見舊の如し、因て近製を問はる、即出して之れを視す、山陽節を撃つ再三、亦藤公埋髮冢の作を似さる、云ふ、黒頭是れ替に勝へざるにあらず、確削誰か知らん、此意の深きを、王土終に姦賊の手に歸し、空しく埋む曲局天を戴くの心と。

一説に云ふ、藤房、挂冠嘉遁の後、遂に關山國師に參し、鑽研あり、終に大法を嗣ぐ、妙心二世授翁宗弼とは即其人なりと、元政上人、扶桑隱逸傳を著し、乃其事を載す、元政は釋子の麟鳳、豈妄言する者ならんや、蓋、必據あらん。

尾崎正風云、判香家、乃、羊角方寸許のものを製し、香を其上に點す、火勢猛ならず、漸々にして熱く、名けて銀葉と曰ふ、陸放翁云、銀葉無煙、靜に香を炷すと、即是れなり、召溪漁隱亦云、小院春深、くして寂寥に閉し、杏花

小院春深閉寂寥、杏花枝上雨瀟瀟、午窓歸
夢無人叫、銀葉龍涎香漸銷。

海老澤霞漁觀煙火云、水國趁涼煙火飄、畫
船如織界、長橋光衝天狗妖星墜、聲駭馮夷
爆竹響、十二燈毬擊貝闕、一雙龍燄降雲霄、
昇平無復邊烽警、買醉紅樓度幾宵、巢父飯
牛圖云、美譽芳聲賦若油、肯容涓滴汚吾牛、
箕山清節高千古、卻被先生出一頭。

芹田靜所詠落花云、偶來林底覓殘紅、春事
匆匆彈指中、芳信霎時難避雨、香魂一縷不
堪風、空樓玉碎情何切、奔月丹成跡已空、解
脫塵緣仍色相、後身應在藥珠宮。

宋景文筆記云、蜀人見物驚異、輒曰噫嘻、李
太白作蜀道難、因用之、若溪胡仔曰、蘇子瞻

枝上雨瀟瀟、午窓の歸夢人の叫ぶなく、銀葉の龍涎香漸く銷すと。

海老澤霞漁、煙火を觀るに云ふ、水國涼を趁ふて煙火飄り、畫船織るが如く長橋を界す、光は天狗を衝いて妖星墜ち、聲は馮夷を駭かして爆竹響し、十二の燈毬貝闕に擊げ、一雙の龍燄雲霄より降る、昇平復邊烽の警なし、醉を紅樓に買ひて幾宵を度る、巢父飯牛の圖に云ふ、美譽芳聲賦油の如く、肯て容れんや涓滴の吾牛を汚すを、箕山の清節千古に高きも、卻て先生に一頭を出さる。

芹田靜所、落花を詠じて云ふ、偶、林底に來り殘紅を覓む、春事匆匆、彈指の中、芳信霎時雨を避け難く、香魂一縷風に堪へず、樓より墜ちて玉碎す情何ぞ切なる月に奔りて丹成る跡已に空し、塵縁を解脱するも仍色相、後身は應に藥珠宮に在るべし。

宋景文筆記に云ふ、蜀人、物を見て驚異すれば、輒ち噫嘻と曰ふ、李太白、蜀道難を作り、因て之を用ふ、若溪の胡仔曰、蘇子瞻は蜀の人なり、後亦壁賦を作りて云ふ、噫呼嘻、

蜀人也、作後赤壁賦云、嗚呼噫嘻我知之矣、

洞庭春色賦云、嗚呼噫嘻我言夸矣、永原葵

軒件嘗謂周頌噫嘻云、噫嘻成王、意是詩亦

成於蜀人之手耶、予爲噴飯、文人趁筆之際、

往往不經意致是失勦、不可不戒也、李華弔

古戰場文亦云、嗚呼噫嘻時耶、命耶、韓詩外傳、周公

曰、於戲嗟嗟、非且之力、乃文王之德、四字疊用、是爲古矣。

志水酒齋嘗謂、儒者視利休千氏、不但寇讐

何也、蓋以其有盛名、爲所忌耳、不然、休一韻

士也、何足挂齒牙乎、唯鳩巢先生駿臺雜話、

頗稱利休之爲人矣、近人所撰梅花仙史云、

初休有一女、頗姣豔、已嫁、豐太閤聞其美、強

休使進之掖庭、休不肯奉制、未幾誣以罪、遂

賜自殺、以是觀之、休亦有氣節者、豈脂韋泚

噫、我れ之を知るこ、洞庭春色の賦に云ふ、嗚呼噫嘻我が言夸なり、と、永原葵軒件嘗て謂ふ、周頌に噫嘻と云ふ噫嘻成王と、意ふに是詩亦蜀人の手に成るかと、予爲に噴飯せり、文人筆を趁らすの際、往々意を經ず、是の失勦を致す、戒めざるべからざるなり、李華古戰場を弔ふ文に亦云ふ、嗚呼噫嘻時なるか命なるかと、韓詩外傳に曰、於戲嗟嗟、且用するは、是れを古しと爲す。

志水酒齋嘗て謂ふ、儒者利休千氏を視る、但に寇讐のみならずは何ぞや、蓋其盛名あるを以て、爲に忌まるのみ、然らずんば、休は一韻士なり、何ぞ齒牙に挂るに足らんや、唯、鳩巢先生の駿臺雜話に、頗利休の人と爲りを稱せり、近人撰する所の梅花仙史に云ふ、初、休、一女あり、頗姣豔、已に嫁せり、豐太閤其美を聞き、休に強ひて之を掖庭に進めしむ、休肯て制を奉ぜず、未だ幾くならず、て認ふるに罪を以てし、遂に自殺を賜ふと、是を以て之を觀れば、休亦氣節ある者、豈脂韋泚の士ならんや、京師の賴子成利休を詠じて云、杯棹評を經ば、卽百城、憐む

忍之士哉、京師賴子成詠、利休云、杯椀經評、
 卽百城、可憐菹髓先、韓彭卻勝、猴郎鬼長、餒、
 松風傳得一家聲、東都太田喬松云、韻士誤、
 身体恨他、轆牛穀、餒奈君何、惺惺茶味、卻成、
 累不及醉、鄉明哲多、其議論雖異、俱可喜也、
 久留米茶博士川上宗壽云、屬鍊夢中夢、清、
 茶燈外燈、十字括盡、亦妙矣。

小説載、利休之靈、時出爲祟、他人不見、唯太、
 閔觀之、近人大阪懷古云、金殿玉樓春寂寂、
 冤魂依舊點茶來、蓋太閔一時戡定天下、然、
 其殺無辜、亦不可勝數、冤氣蘊塞、宮中多怪、
 亡國之兆、令人悚然。

本藩茶博士橋本抱鶴茗宴云、警款一聲、寶、
 入戶、主人恭進小龍團、釋子驚浦茶匙云、一

し菹髓韓彭に先だちしを、卻て勝る猴郎の鬼長く餓る
 に、松風傳へ得たり一家の聲と、東都の太田喬松云ふ、韻
 士身を誤まる他を恨むを休めよ、轆牛穀餒君を奈何、惺
 ヲたる茶味卻て累を成す及び酔醒明哲の多きにと、
 其議論異りと雖、俱に喜ぶべきなり、久留米の茶博士川
 上宗壽云ふ、屬鍊夢中の夢、清茶燈外の燈と、十字括盡す
 亦妙なり。

小説に載す、利休の靈、時に出て祟りを爲す、他人には見
 えず、唯太閔のみ之れを睹ると、近人の大阪懷古に云ふ、
 金殿玉樓春寂々、冤魂舊に依りて茶を點じ來ると、蓋、太
 閔一時天下を戡定す、然も其無辜を殺す、亦勝けて數ふ
 べからず、冤氣蘊塞し、宮中に怪多し、亡國の兆、人をして
 悚然たらしむ。

本藩の茶博士橋本抱鶴の茗宴に云ふ、警款一聲、寶戸に
 入る、主人恭しく進む小龍團と、釋子驚浦の茶匙に云ふ、
 一、枝知る是れ鐘龍の種手に隨つて白鷺穿雲を生ずと、

枝知是籀龍種、隨手白薺生翠雲、皆可誦也。
 王昌齡天宮寺茶集、鮑君微東亭茗燕、劉長卿惠福寺茶會、李嘉祐招隱寺東峰茶宴、可見唐賢等、拳乎茗宴、都如此也、不唯陸羽盧仝之二人而已。

松平徵典嘗云、茶湯卽煎茶、醫家葛根湯可例視矣、邦人呼點茶爲茶湯、謬甚、元稹詩曰、
 王建云、宮人手裏過茶湯、又劉元城語錄載、獨樂園在洛中、最爲簡素、人以溫公之故、春時必遊洛中、例看園子所得茶湯錢、閉園日、與主人平分之云云、是可證矣、噫、徵典年四十二、沒于天保己丑之歲、吾輩殆如失慈母、予哭之曰、豈比少陵無一語、爲君閉卻海棠花、蓋以園栽白海棠、因扁於其室爲號也。

皆誦すべきなり。

王昌齡、天宮寺の茶集、鮑君微東亭の茗燕、劉長卿の茶會、李嘉祐、招隱寺の東峰茶宴、見るべし、唐賢茗宴に拳々たるを都て此の如きなり、唯、陸羽盧仝の二人のみならず。

松平徵典嘗て云ふ、茶湯は卽煎茶、醫家の葛根湯、例し視るべし、邦人點茶を呼びて茶の湯と爲す、謬り甚し、元稹の詩に一に曰、云ふ、宮人手裏茶湯過ぐ、又劉元城の語錄に載す、獨樂園は洛中に在り、最簡素と爲す、人、溫公の故を以て春時必洛中に遊べは、例に看る、園子得る所の茶湯錢、園を閉る日、主人と之れを平分す、云云、是れ證すべし、噫、徵典年四十二、天保己丑の歲に沒す、吾輩殆慈母を失ふが如し、予之れを哭して曰、豈比せんや少陵一語なきに、君が爲に閉卻す海棠花と、蓋、園に白海棠を栽え、因て其室に扁して號と爲すを以てなり。

少陵母諱海棠、故終身未嘗詠是花、是附會之說耳、不足置喙、陸放翁云、少陵非無詩、蓋散落不傳也、是猶嫌其不措一詞、故造此說耳、試問唐諸賢詠之者、果有幾人耶、但不過王建海棠花下打流鶯之類、已及坡仙出、以七古大作描寫麗豔之質、於是乎花壇之月旦、或以是花班乎桃李之上矣。

按鄭谷蜀中賞海棠云、濃淡芳春滿蜀鄉、半隨風雨斷鶯腸、浣花溪上堪惆悵、子美無情爲發揚、後人附會之說、蓋自此興矣、河合屏山少壯時、負笈于菅茶山之門、加以過庭之訓、其玉成可知矣、同諸友宿仁壽山、半夜雨作云、漠漠溪雲似結愁、枕頭夢斷一燈幽、疎鐘聲濕半宵雨、散作千山楓葉秋。

少陵母の諱は海棠、故に終身未だ嘗て是の花を詠ぜずと、是れ附會の説のみ、味を置くに足らず、陸放翁云ふ、少陵詩なきに非ず、蓋散落して傳はらざるなりと、是猶其一詞を措かざるを嫌す、故に此説を造すのみ、試に問はん、唐諸賢之れを詠せし者、果して幾人あるか、但、王建の海棠花下に流鶯を打つゝの類に過ぎざるのみ、坡仙出るに及び、七古の大作を以て麗豔の質を描寫す、是に於てか花壇の月旦、或以是花を以て桃李の上に班せり。

按するに鄭谷、蜀中、海棠を賞するに云ふ、濃淡芳春蜀郷に滿つ、半は風雨に隨ふて鶯腸を斷ず、浣花溪上惆悵するに堪へたり、子美爲に發揚するに情なしと、後人附會の説、蓋此より興る。

河合屏山少壯の時、笈を菅茶山の門に負ひ、加ふるに過庭の訓を以てす、其玉成知るべし、諸友と同じく仁壽山に宿し、半夜雨作るに云ふ、漠々たる溪雲愁を結ぶに似たり、枕頭夢断えて一燈幽なり、疎鐘聲は濕ふ半宵の雨、散して千山楓葉の秋と作る。

高須氏、觀鷲齋、亦伐冰之家也。器宇海涵、人莫能測、所謂澄之不清、渾之不濁、昔聞其語、今見其人也。春日漫成云、儀休拔菜可稱高、遮莫春風發野桃、局務清閑無一事、朝來唯揖海書勞。

擲筆山、拋筆松、俱在東海道中矣。蓋言天然妙致難於描寫也。畫史鈴木其一、西遊之日、獲詩云、自負吾儂膽如斗、人拋筆處卻濡毫、其意氣可掬也。

河合孫一郎嘗謂曰、明大學士劉健不喜詩、謂人曰、縱爲李杜、亦不過一酒徒耳。袁子才引論語、斷斷證其非、抑亦迂矣。讀漁洋詩話、乃知是言未必出于衷、抑由門戶之爭耳。麓堂詩話載其英廟輓歌曰、天傾玉蓋旋從北、

高須氏、觀鷲齋と號す、亦伐冰の家なり、器宇海涵、人能く測るなし、謂はゆる之れを澄せども清まず、之れを渾せども濁らず、昔其語を聞く、今其人を見る、春日漫成に云ふ、儀休菜を抜く高と稱すべし、遮莫あれ春風の野桃を發くを、局務清閑一事無し、朝來唯、揖す海書の勞と。

擲筆山、拋筆松、俱に東海道中に在り、蓋天然の妙致、描寫に難きを言ふなり、畫史鈴木其一、西遊の日、詩を獲たり、云ふ、自負す吾儂の膽斗の如きを、人の筆を抛つ處、卻て毫を濡ほすと、其意氣掬すべし。

河合孫一郎嘗て謂ふて曰、明の大學士劉健は詩を喜ばず、人に謂つて曰、縱ひ李杜と爲るも、亦一の酒徒に過ぎざるのみと、袁子才、論語を引き、斷々として是非を證す、抑亦迂なり、漁洋詩話を讀み、乃知る是の言未だ必しも衷に出でず、抑、門戶の争に由るのみ、麓堂詩話に載す、其英廟の輓歌に曰、天傾きて玉蓋北より旋り、日戻きて金輪卻て復た中すと、前後皆稱ふ佳作と謂ふべし、是れを

日辰金輪卻復中、前後皆稱、可謂佳作、讀是則知、子然殺鄧析、而用其竹刑也。

徐氏筆精曰、古樂府暫泊于渚磯、歡不下艇、板即今上岸透板也、刻本誤作廷、非、高橋恕庵深川竹枝云、艇板堪憐亦堪恨、能迎郎至送郎還。

出淵翁、角田哥、綿貫叔、俱遊芒花樓矣、芒花樓蓋深川娼館之傑然者也、出淵壁頭朗吟曰、越女一笑三年留、韓退之角田應聲曰、不知身世自悠悠、李商綿貫續曰、百年三萬六千朝、王建爺復曰、傷心不獨爲悲秋、李益自是一韻透底、綿連不已、殆三十韻、皆以集唐賢句也、蓋狐腋成裘、咄嗟即辨、可謂唐伯虎、祝允明之後塵矣、篇以長不具錄、予嘗欲刊是詩以

讀めば則、子然、鄧析を殺し、而して其竹刑を用ふるを知らるなり。

徐氏筆精に曰、古樂府に暫く渚磯に泊す、歡艇板を下さずと、即今の岸に上る透板なり、刻本誤りて廷に作るは非なり、高橋恕庵の深川竹枝に云ふ、艇板憐むに堪へたり亦恨むに堪へたり、能く郎の至るを迎へ郎の還るを送ると。

出淵翁、角田哥、綿貫叔、俱に芒花樓に遊ぶ、芒花樓は蓋、深川娼館の傑然たる者なり、出淵壁頭に朗吟して曰、越女一笑三年留る、韓退之角田聲に應して曰、知らず身世自悠悠、李商綿貫續きて曰、百年三萬六千朝、王建爺復曰、傷心不獨爲悲秋、李益自是一韻透底、綿連已ます、殆三十韻、皆以て唐賢の句を集めしなり、蓋、狐腋を成し、咄嗟即辨す、唐伯虎祝允明の後塵と謂ふべし、篇は長きを以て具に錄せず、予嘗て是詩を刊し以て近人深川竹枝の後に繋げんと欲す、二十年、前舊板橋樓に已む能はざる所以なり。

繫近人深川竹枝之後、二十年前舊板橋、所以不能已于懷也。

菅野松塙弘、仁壽山之都講也、嘗作堰瀦記、文有法度、竊意堰瀦二字似妄立名目、恐未有據也、一日偶讀山谷詩、肥程野戸注引東坡錄奏、單鑿吳中水利狀曰、諸縣高原陸野之鄉、皆有塘圩、或三百畝、四百畝、爲一圩、蓋土人停畜水以灌民田、云云、則知松塙堰瀦即塘圩也、凡文家鑿空立名、往往不免、後人嗤笑、不可不與忠告也。

長澤信通、伊奈高堅、俱後進之才雋也、高堅贈予云、尋梅共蹋溪邊雪、吸茗同圍燈下棋、信通送予東歸云、相送橋頭雙駿、關雲驛樹路漫漫、羨君陪駕恩榮足、滿地風霜不識

菅野松塙弘は、仁壽山の都講なり、嘗て堰瀦の記を作る、文に法度あり、竊に意ふ堰瀦の二字妄に名目を立つるに似たり、恐くは未だ據あらずと、一日偶、山谷の詩を讀みしに、肥程野戸に豊なりと、注に東坡錄奏す單鑿吳中水利狀を引きて曰、諸縣高原陸野の郷、皆塘圩ありて、或は三百畝、四百畝を一圩と爲す、蓋土人水を停畜し、以て民田に灌ぐ云云と、則知る松塙堰瀦は、即塘圩なることをと、凡、文家鑿空して名を立つるは、往々後人の嗤笑を免れず、相與に忠告せざるべからざるなり。

長澤信通、伊奈高堅は俱に後進の才雋なり、高堅予に贈りて云ふ、梅を尋ねて共に蹋む溪邊の雪、名を吸りて同じく圍む燈下の棋と、信通、予の東歸を送りて云ふ、相送り橋頭雙駿を駐め、關雲驛樹路漫漫、羨む君が駕に陪して恩榮足る、滿地の風霜を識らず、未だ幾くならず、

寒、未幾高堅計音至、蓋小友之中、又損一介、可悼已。

石原路一充送予東歸序文、殆二千言、以長不能錄、路一嘗道、唐許瑤題懷素上人草書云、志在新奇、無定則、古瘦瀟灑、半無墨、醉來信手兩三行、醒後卻書書不得、袁簡齋以爲趙承旨作、則謬矣。

天保己丑、予撰西遊文藻二卷、咸是遊所獲之詩、上之京攝諸名家、次之西邦才人之作、偶見警觀、莫不采錄焉、近藤守正駁其書目之非曰、足下來于本鎮、非銜命、則必扈從、今謂之遊、可乎、易以西役、即僊矣、余曰、宦遊二字、見史記司馬相如傳、唐人依是、杜審言所謂、獨有宦遊人、是也、宋張世南亦撰游宦紀

御構時語卷之上

高堅の計音至る、蓋小友の中、又一損す、悼むべきのみ。

石原路一充予の東歸を送る序文は、殆二千言長を以て錄する能はず、路一嘗て道ふ、唐許瑤懷素上人の草書に題して云ふ、志は新奇に在りて、定期なく、古瘦瀟灑、半は墨なし、醉來手に信す兩三行、醒後卻て書すれば書し得ず、趙簡齋以て趙承旨の作と爲すは、則謬れり。

天保己丑、予西遊文藻二卷を撰す、咸な是の遊に獲し所の詩、之れを上にしては京攝諸名家、之れを次にしては西邦才人の作、偶見警觀、采錄せざるはなし、近藤守正、其書目の非を駁して曰、足下本鎮に來る、命を銜むに非ざれば、則必扈從す、今之れを遊と謂ふて可ならんや、易ゆるに西役を以てせば、即僊はん、余曰、宦遊二字、史記司馬相如の傳に見ゆ、唐人是れに依る、杜審言謂はゆる、獨宦遊の人のみありと、是なり、宋の張世南も亦、游宦紀聞を撰す、東坡、惠州に赴くに云ふ、此游宦、絕平生に冠たりと、乃證すべきなりと、守成憤然として肯んぜず、猶旁引

聞東坡赴惠州云、此遊奇絕冠平生、乃可證也、守成憤然不肯、猶旁引曲暢、鳴鼓不止、予西遊之日、獲駁正之益於守成最多、不唯此而已、噫、其人今則亡矣。

己丑歲、予在本鎮、八月二十七日、酷吏稍去、故人方來、蓋以西播炎燭殊甚也、乘快將遊仁壽山、迂路訪鈴木昌則、欲拉共往、昌則端坐一室、屏去妻孥、如持齋者、乃詰其故、昌則曰、本日係至聖孔子誕辰、故清朝聖天子乃創律令、每年是日、以及軍民人等、致齋二日、不理刑名、禁止屠宰、本邦雖不設此律、然吾輩讀書之士、亦所宜遵奉、故持心齋耳、予瞿然不告、故而辭去、此事似迂、而昌則之篤行

可見矣、傳家實、時歷纂云、八月二十七日、聖人壽誕矣、詳見定例成案合編續增。

曲暢鼓を鳴らして止まず、予西遊の日、駁正の益を守正に獲る最多し、唯に此れのみならず、噫、其人今は則亡し。

己丑の歲、予本鎮に在り、八月二十七日、酷吏稍去、故人方に來る、蓋西播炎燭殊に甚しきを以てなり、快に乘じ將に仁壽山に遊ばんとし、路を迂して鈴木昌則を訪ひ、拉して共に往かんと欲す、昌則一望に端坐し、妻孥を屏去し、持齋者の如し、乃其故を詰る、昌則曰、本日は至聖孔子の誕辰に係る、故に清朝聖天子乃律令を創む、毎年是の日、以て軍民人等に及ぶまで致齋二日、刑名を理めず、屠宰を禁止す、本邦此律を設けずと雖、然も吾輩讀書の士亦宜く遵奉すべき所、故に心齋を持するのみと、予瞿然として宜くを告げずして辭し去る、此事迂に似たり、而も昌則の篤行見るべし。傳家實、時歷纂に云ふ、八月二十七日、聖人の壽誕、詳に定例成案合編續增に見えたり。

清人陳允錫二十一史緯云、公羊傳襄公二十一年十有一月庚子孔子生、查十一月無庚子、而穀梁傳以爲十月庚子、按十月庚辰朔庚子二十一日也、或言孔子庚戌生、二十一年係己酉、非庚戌、路史又以爲二十二年十月庚子、乃二十七日、定爲今之八月二十七日、去聖已遠、亦不得其詳也、良白按、明宋濂亦著孔子生卒年月辨篇、學者併考、可也。

月泉吟社、劉應龜云、稅足溪無人照、應高須熟齋云、癰卽杖瘡也。

諸葛氏在本邦、未暇詳其譜、世人於武侯之德、不能無欣慕、故輒曰本邦之諸葛、亦出於蜀也、或曰非也、蓋吳之諸葛之後裔、避亂

清人陳允錫二十一史緯に云ふ、公羊傳襄公二十一年十有一月庚子孔子生る、查するに十一月に庚子なし、而して穀梁傳以て十月庚子と爲す、按するに十月庚辰朔庚子二十一日なり、或は言ふ孔子庚戌に生ると、二十一年は己酉に係る、庚戌に非ず、路史又以て二十二年十月庚子と爲す、乃二十七日、定めて今の八月二十七日と爲す、聖を去る已に遠し、亦其詳を得ずと、良白按するに、明の宋濂、亦孔子生卒年月辨篇を著す、學者併せ考へて、可なり。

月泉吟社の劉應龜云ふ、稅足りて溪には人の鑿を照すなしと、高須熟齋云ふ、癰は卽ち杖瘡なりと。

諸葛氏は本邦に在りて、未だ其譜を詳にするに暇あらず、世人、武侯の德に於て、欣慕するなき能はず、故に動もすれば輒曰、本邦の諸葛、亦蜀に出るなりと、或は曰、非なりと、蓋吳の諸葛の後裔、亂を避け東移せしのみ、然も紹

東移耳、然縉紳先生未嘗聞有冒之者、唯顯於藝林文墨之間、何也、抑典午以來、中原之域、淪胥于胡馬、故文墨之技、江南爲尤盛、風習之所漸、安知諸葛之不爲之所化邪、近時畫史、有諸葛監可徵矣、本藩侍讀諸葛良軒治經之外、又精於曆算音韻六書之學、蓋今之學者、遊馬融之門、而不困於推步者、果又有幾人乎、唯良軒可謂繼康成之後塵矣、其嗣東野爲予誦其禪房花木深云、林壑無雲、晝自陰、白桃紅杏繞、窓深、山僧夜夜、和花睡、不碍尸羅清淨心。

諸葛東野記雨毛、瑰奇可喜、其詞云、酒價年年高、願天賜醴醪、油直日日貴、願天降脂膏、不圖皇天貽下民、短者如鬚長如旄、想當天

紳先生未だ嘗て之れを言せし者あるを聞かず、唯藝林文墨の間に顯はるゝは何ぞや、抑、典午以來、中原の域、胡馬に淪胥す、故に文墨の技、江南を尤盛なりと爲す、風習の漸する所、安んぞ諸葛の之れに化せられしにあらざるを知らんや、近時畫史に諸葛監あり徵すべし、本藩の侍讀、諸葛良軒、經を治むるの外、又、曆算音韻六書の學に精し、蓋、今の學者、馬融の門に遊び、而して推步に困まざるもの果して又幾人あるか、唯良軒は康成の後塵を繼けると謂ふべし、其禪房花木深云、林壑無雲、晝自陰、白桃紅杏窓を繞りて深し、山僧夜々花に和して睡る、碍へず尸羅清淨の心と。

諸葛東野、雨毛を記す、瑰奇喜ぶべし、其詞に云ふ、酒價年年高し、願くば、天、醴醪を賜へ、油直日々貴し、願くば、天、脂膏を降せ、圖らざりき皇天、下民に貽る、短き者は鬚の如く、長きは旄の如し、想ふに、當に天、三冬被なき學士の

憫三冬無被學士寒、綴成裘褐代、縑袍不然、
 天憐十年窓下吟客苦、縛成管城佐彩毫、茹
 毛飲血太古世、今日魚熊溢中庖、定知肉食
 多、食墨大意乃是惡饕餮、何啻風毛與雨血、
 黠吏搏噬鵬攫、獫狁定知民生日、因悴天意乃
 是戒侵鈔、或謂峴崗朝發火、毛羽皆同玉石、
 焦陸渾山中百獸斃、桑谷之藪焚其巢、或謂
 天上碧翁老、衰容不復比垂髻、拔去霜毛鱗
 雪鬚、下遺不惜如弁髦、始制文字天雨粟、如
 是我聞雨花飄、以何因緣欽拔羅、不繞涿居
 亂影影、若使先主在、取之結駝毼、若使趙王
 在、假之續蟬貂、若使蘇卿在、不必習旃毛、節
 旄盡脫落、以之補其絀、客詰余曰、公勿譴、古
 昔先王畏彘妖、列國咎休徵、史策歷代興亡

寒きを憫み、裘葛を綴り成し縑袍に代ふべし、然らずんば天、十年窓下吟客の苦を憐み、管城を縛成して彩毫を佐く、毛を茹ひ血を飲む太古の世、今日魚熊中庖に溢る、定めて知る肉食食墨多く、天意乃是れ饕餮を惡む、何ぞ啻に風毛と雨血とのみならん、黠吏搏噬は鵬の獫狁を攫むがごとし、定めて知る民生日に、因悴天意乃是れ侵鈔を戒む、或は謂ふ峴崗朝に火を發し、毛羽皆玉石と同く焦し、陸渾山中百獸斃れ、桑谷の藪其巢を焚かん、或は謂ふ天上碧翁老い、衰容復垂髻に比せず、霜毛を拔去し、雪鬚を懸し、下し遺り惜まず弁髦の如し、始めて文字を制し、天粟を雨す、是の如く我れ聞く雨花飄る、何の因縁を以て欽拔羅、涿を繞り居らず、亂れて影々、若し先主をして在らしめば、之れを取り駝毼を結ばん、若し趙王をして在らしめば、之れを假りて蟬貂を續かん、若し蘇卿をして在らしめば、必しも旃毛を習まず節旄盡く脱落せば、之れを以て其絀を補はん、客余を詰りて曰公譴する勿れ、古昔先王、彘妖を畏る、列國咎休史策に徵す、歷代の興亡、童謡に驗す、漢の天漢元年三月、天毛を雨らず、術者云ふ、邪人進み賢人逃ると、晉の太元十四年四月、地に毛を生ず、史臣云ふ、經略多事人勞すと、本邦此專慶安三年、聖

驗童謠、漢天漢元年三月天雨毛、術者云、邪
 人進賢人逃、晉太元十四年四月地生毛、史
 臣云、經略多事人勞、本邦此事在慶安三年
 聖天子之朝、是歲九月洪水漂、余對之曰、君
 言然、雖然小疹不必兆、白面議論多柱膠、況
 余才愧張茂先、海島不辨賴莫嘲、金甌兩歲
 無虧缺、玉燭連年少、燮調書生所、郵油與酒
 夜窓何以慰無聊、天保丙申春涉夏、陰寒襲
 人雨連朝、客來諗予雨毛異、寔在六月十九
 宵、先是國門盜繫人、訛言日興頗繹駭、聖明
 在上盜斯獲、從今常務祈豐饒、高宗修政雉
 禍滅、大戊正德桑祥消、君不見天寶末年長
 安道、白晝賊行如蝟毛。

寬政癸丑七月十五日、亦有此異、其毛色

天子の朝に在り、是の歲九月洪水漂ふと、余之れに對へ
 て曰、君の言然り、然と雖小疹、必しも兆せず、白面の議論
 柱膠多し、況や余の才張茂先に愧づ、海島辨せず賴に嘲
 る莫れ、金甌兩歲虧缺なし、玉燭連年燮調少し、書生郵る
 所は油と酒と、夜窓何を以て無聊を慰めん、天保丙申春
 より夏に涉り、陰寒人を襲ひ雨ふる連朝、客來り予に諗
 ぐ雨毛異と、寔に六月十九宵に在り、是より先き國門盜
 人を繫め、訛言日に興り頗繹駭たり、聖明上に在れば盜
 斯に獲らる、今より當に務めて豐饒を祈るべし、高宗政
 を修めて雉禍滅し、大戊德を正して桑祥消す、君見ずや
 天寶末年長安の道、白晝賊行く蝟毛の如しと。

寬政癸丑七月十五日亦此異あり、其毛色長短略相同じ

長短略相同矣、見橘春輝北窓瑣談。

唐它山愷公觀角力記云、厥乎閒曠之地、凡可容十萬人、虛其中、壇而環之、如圓丘、廣若干步、樹四柱、彩帛裹之、或云象須彌四天、蓋表方位而已、無復有遮障、是爲角力之場焉、將使拈鬪、音吐高朗者名斥呼之、應聲而出、壯夫二人、所謂力士也、軀幹偉大、容貌瑰峨、駢脅巨腹、肩背肉隆、手足肥碩、擁腫礫柯、望之如金剛大士、仁王佛、發蹤者、將而上、是名行事、猶軍帥、力士皆聽命、把一便面、黑漆髻之、金銀瑣二曜、柄垂彩條、二士相鄉而跪、持角爲勢、如虎且負、喙如熊將出穴、行事握柄側立、必待其氣息精神相勻、一麾、二士卽拈、前撞後距、左曳右撻、一起一伏、離合翕張、擣虛扼

橘春輝の北窓瑣談に見ゆ。

唐它山愷公角力を觀る記に云ふ、閒曠の地を厥し、凡十萬人を容るべくし、其中を虛にし、壇して環し、圓丘の如し、廣さ若干步、四柱を樹て、彩帛之れを裹ひ、或は云ふ、須彌の四天に象ると、蓋、方位を表するのみ復遮障あるなし、是れを角力の場と爲す、將に拈鬪せしめんとす、音吐高朗の者名斥し之れを呼ぶ、聲に應じて出づ、壯夫二人、謂はる力士なり、軀幹偉大、容貌瑰峨、駢脅巨腹、肩背肉隆、手足肥碩、擁腫礫柯、之れを望めば、金剛大士、仁王佛の如し、發蹤者、將ひて上る、是れを行事と名く、猶軍帥の如し、力士皆命を聽く、一便面を把る、黑漆之れを髻し、金銀にて二曜を瑣し、柄に彩條を垂る、二士相鄉ひて跪き、持角勢を爲し、虎且く喙を負ふ如く、熊將に穴を出んとするか如し、行事柄を握り側立す、必其氣息精神相勻きを待ちて一麾す、二士卽拈し、前に撞き、後に距き、左に曳き、右に撻む、一起一伏、離合翕張、虚を擣き、扼し、巨石轉じて而して、盤根擗へ、悍馬軼して六轡控す、一瞬變化、名狀す可からず、始は處女の如く、敵誤りて隙を啓けば、後は脱鬼の如く、彼れ避くるに及ばず、是に於て勝負判る、

叱、巨石轉而盤根撐矣、悍馬軼矣、六轡控焉、
 一瞬變化、不可名狀、始如處女、敵誤啓隙、後
 如脫兔、彼不及避、於是勝負判矣、衆口大喝、
 殷電吼哮、潮斯湧、山斯墮、沿近人家、屋瓦皆
 震、其格鬪之殷也、觀者、肩相倚、手相拄、瓶僂
 酒覆、羹翻、衣污、一皆不知、疾痛疴癢、莫曾存
 于心者、何況寵辱得喪乎、昔有海上隨鷗而
 遊、恍遺思念、是一人之偶得也、難推之於衆、
 今會都下之人、寡亦數千、衆則萬萬、能使其
 億兆之人、觀猱猱搏擊之戲、爲海鳥忘機之
 遊、嗟夫、角力之戲、果神邪、抑仙邪、卽世之所
 尙、聲色紛華之娛、我知其非樂矣、雖然、靈公
 之葵、適資乎悖逆、季孫之雞、乃媒于禍亂、則
 畜力士者、宜識所戒焉。

衆口大に喝し、殷雷吼哮、潮斯に湧き、山斯に墮る、沿近の
 人家屋瓦皆震ふ、其格鬪の殷なるや觀る者、肩相倚り、手
 相拄へ、瓶僂れ酒覆へり、羹翻り、衣汚る一に皆知らず、疾
 痛疴癢、曾て心に存する者莫し、何ぞ況や寵辱得喪をや、
 昔、海上、鷗に隨ひて遊ぶ者あり、恍として思念を遺る、是
 は一人の偶、得るなり、之れを衆に推し難し、今都下の人
 を會し、寡も亦數千、衆なれば則萬々、能く其億兆の人を
 して猱猱搏擊の戲を觀て海鳥忘機の遊を爲さしむ、嗟夫
 角力の戲は、果して神か、抑、仙か、卽世の尙ぶ所の聲色紛
 華の娛み、我其樂に非ざるを知る、然りと雖、靈公の葵
 は、適、悖逆に資し、季孫の雞は、乃禍亂を媒すれば、則力
 士を畜ふ者は、宜く戒むる所を識るべし。

清王述菴補市集載相撲之戲、蒙古最重筵
 宴時、必陳之、本朝以是練習健士、謂之布古、
 蒙古語、謂之布克、脫朝短袴、兩兩相角、以搏
 之、仆地爲分勝負、其詩曰、一人突出張鷹拳、
 一人昂首森鴉肩、欲搏未搏意飛動、廣場占
 立分雙颯、猛虎掉尾宿莽內、蒼鷗側翅秋雲
 巖、須臾忽合互角觥、揮霍掀舉思爭先、搆虛
 時時見蹴踏、扼吭往往愁傾顛、壯心終擬作
 後勁、努力寧肯輸先鞭、三禽三縱逾拗怒、再
 接再厲紛騰驚、曳柴僞遜陋、狡獪舉鼎絕、頑
 猶喧闐、要使一蹶不復振、如鳥翹翅魚投筌、
 勝者昂藏作山立、命酒飽食黃羊鮮、相又相
 撲出法、雖小技、較藝亦足威、窮邊豈如翹關
 拔河戲、僅資嘔噓誇輕儼、

御橋時話卷之上

清の王述菴補市集に載す相撲の戲は蒙古最重んず筵
 宴の時、必之れを陳ぬ、本朝是れを以て健士を練習せし
 む、之れを布古と謂ふ、蒙古の語に、之れを布克と謂ふ、脫
 朝短袴兩々相角し、之れを搏ち地に仆すを以て、勝負を
 分つと爲す、其詩に曰、「一人は突出して鷹拳を張り、一人
 は首を昂くして鴉肩を森にす、搏たんと欲して未だ搏た
 ず意飛動し、廣場に占立して雙颯を分つ、猛虎尾を掉ふ
 宿莽の内、蒼鷗翅を側つ、秋雲の巖、須臾にして忽ち合し
 互に角觥す、揮霍掀舉先を争ふを思ふ、虛を搆き時々蹴
 踏せられ、吭を扼し往々傾顛を愁ふ、壯心終に後勁と作
 らんと擬す、努力寧ぞ肯て先鞭を輸せん、三禽三縱逾、拗
 怒再接再厲紛として騰驚、柴を曳き僞り遜れ、狡獪を陋
 し、鼎を舉げ、臍を絶ち猶喧闐、要使一蹶復振はざらしむ、
 鳥の翅を踢け魚の筌に投するが如くす、勝者は昂藏山立
 を作し、酒を命し飽食す、黃羊の鮮、相又し相撲つ法難經、小
 技と雖、藝を較べ亦窮邊を威すに足る、豈翹關拔河の戲
 の如くにして僅に嘔噓に資し輕儼を誇るのみならんや

趙雲菘蔘曝雜記云、布庫、一名捺脚、

野見宿禰即相撲之鼻祖、詳見國史、蓋宿禰爲人、賢且智、不唯膂力絕人、史稱、上古以來、宮車晏駕、殉者必以十數焉、宿禰竊悼、遂建議曰、陶埴以像之、以此易彼、乃典禮不缺、而庶乎不傷仁矣、終從其議、黃鳥之詩、絕響于世者、蓋宿禰之勳也、朝廷嘉之、授錫土部臣之姓、世掌喪儀、猶宗伯之職焉、噫、作俑無後、聖言烜赫、宿禰獨否、作俑之福、處于後裔、是豈有他哉、其事殆與聖言背馳、而所以拯於不仁、則合於聖意、故也、

明人李春亭送五郎太歸日本云、敬將玉帛、觀天顏、回首扶桑杳渺間、紅泊古鄒三佛地、杯傳新酒四明山、梅黃細雨江頭別、帆引清

趙雲菘蔘曝雜記に云ふ、布庫、一名は捺脚と、

野見、宿禰は即相撲の鼻祖、詳に國史に見ゆ、蓋、宿禰人と爲り、賢且智、唯膂力、人に絶するのみならず、史に稱す、上古以來、宮車晏駕すれば、殉者必十を以て數ふ、宿禰竊に悼み、遂に建議して曰、陶埴以て之れに像り、此を以て彼に易へば、乃典禮缺せず、而して仁を傷はざるに庶しと、終に其議に従ふ、黃鳥の詩、響を世に絶つ者は、蓋宿禰の勳なり、朝廷之れを嘉し、遂に土部の臣の姓を賜ふ、世に喪儀を掌る、猶宗伯の職のごとし、噫、俑を作りて後なきは、聖言烜赫、宿禰は獨否らず、俑を作るの福、後裔に及ぶ、是れ豈他あらんや、其事殆聖言と背馳す、而して不仁を拯ふ所以は、則、聖意に合する故なり、

明人李春亭、五郎太の日本に歸るを送るに云ふ、敬みて玉帛を將て、天顏を觀る、首を回せば、扶桑杳渺の間、紅は泊す、古鄒三佛の地、杯は傳ふ、新酒四明の山、梅は黃なり、細雨江頭の別れ、帆は清風を引て、海上より還る、明に到れ

風海上還、明到賢王、應有問、八方職貢、隆朝

班原本文云、詩送居士五郎太歸日本、大明正德癸酉、夏六月朔、四明李春亭。

梁星巖語於予曰、五郎太又號祥瑞、陶甃之巧、藉藉傳世、蓋伊勢人、其裔今在、南遊之日、嘗訪其居、李春亭詩幅、今爲叢林之藏物、亦現存目擊焉、凡書幅之可寶重者、第此幅與彥九郎耳、併謂雙壁可矣。頃者又聞沼津大夫、土方氏、購獲李春亭雙鴈、然則神物、送無歷而走也。

唐伯虎送彥九郎還日本、詩幅、搨本傳世、其眞蹟舊在都下富豪、輾轉久之、今爲本藩河合氏之物、初富豪獲之、又聞李春亭書幅在伊勢、遣人重價募之、蓋有一箭射雙鴈之意、居少之、富豪賊罪發覺、自裁以終、官以其名家之裔、其嗣仍襲街市總轄之職焉、因書

は賢王應に問ふあるべし、八方の職貢朝班に隘るか
と、原本に云ふ、詩、居士五郎太日本に歸るを送る、大初、正徳癸酉、夏六月朔、四明の李春亭。

梁星巖予に語けて曰、五郎太、又祥瑞と號す、陶甃の巧、藉々として世に傳はる、蓋伊勢の人、其裔今に在り、南遊の日、嘗て其居を訪ひしに、李春亭の詩幅、今、叢林の藏物と爲り、亦現存して目撃す、凡、書幅の寶重すべき者は、第此幅と彥九郎とのみ、併せて雙壁と謂ふて可なり。頃日又聞、土方氏、購ふて李春亭の書幅を得たりと、然らば、神物遂に歴無くして走るなり。

唐伯虎、彥九郎が日本に還るを送る、詩幅の搨本世に傳ふ、其眞蹟舊都下の富豪に在り、輾轉久して、今は本藩河合氏の物と爲る、初め富豪之れを獲、又李春亭の書幅伊勢に在るを聞き、人を遣はして重價之れを募る、蓋一箭雙鴈を射るの意ありと云ふ、居る少くして、富豪賊罪發覺し、自裁以て終る、官、其名家の裔なるを以て、其嗣仍街市總轄の職を襲がしむ、因て書畫散落し、復存する者なし、此專令を距る三十年予、しく覩る所、然れども當今

畫散落、無復存者。此事距今三十年、予所親觀。然當今之世、富豪之嗜畫者、亦不易得矣。

亡友金星氏有異才、嘗嘆曰、孝靈天皇四年、富士涌出、而近江州生一太湖、是古今未曾有之奇異也。豈料數千年後、至享保之際、西土之名勝、亦飛渡于東方者多矣。不亦咄咄怪事哉。若夫妄意立名、種種捏造、既反正名之訓、又悖稽古之訓、其罪大矣。一日有搆所業請益者、開卷第一曰、楊柳青青白馬津、問白馬是何處、曰、墨水下流、舊有御厩津、先賢以其非雅、改名白馬、好箇地名、便與唐詩一般、金星正色曰、予亦欲革一事、肯從否、問奈何、曰、欲更君姓字、王昌齡耳、其人赧羞而去。

の世、富豪の畫畫を嗜む者、亦得易すからず。

亡友金星氏異才あり、嘗て嘆して曰、孝靈天皇四年、富士涌出し、而て近江州に一太湖を生ずと、是れ古今未曾有の奇異なり。豈料らんや數千年後、享保の際に至り、西土の名勝、亦飛で東方に渡る者多し、亦咄々怪事ならずや。若夫れ妄意名を立て、種々捏造す、既に正名の訓に反す、又稽古の訓に悖る、其罪大なり。一日所業を搆へ、益を請ふ者あり、開卷第一に曰、楊柳青々たり白馬の津、問ふ白馬とは是れ何れの處ぞ、曰、墨水の下流、舊御厩の津あり、先賢其雅に非ざるを以て、改めて白馬と名く好箇の地名、便、唐詩と一般と、金星色を正して曰、予亦一事を革めんと欲す、肯て從はんや否や、問ふ奈何んと、曰君の姓字を王昌齡と更めんと欲するのみと、其人赧羞して去れり。

上總瀕海之地、名九十九里、一名白里、人間其故、乃云、白加一畫則百矣、今損一畫、不則九十九乎、漁獵之人、偶然創名、其言有理、大雅君子、卻似有愧色。

金星之詩、瑣異極矣、雜詠云、于于畢竟同三豕、巨特楊家一字師、予詰其出處、輒舉凌迪知氏族博考云、楊萬里論晉于寶、一吏取禮部韻書注、晉有于寶、以進曰、乃于寶非于也、楊大喜、以爲一字師、按此事、早見鶴林玉露。然余家所

藏宋板晉書文選、亦但作于、無有稱于者、胡承之以爲、字畫相沿之訛、而取于子書爲證、按春秋有于誓、後漢有干言、寶豈其後邪、然亦自有于定國、焉知寶之不爲其裔也、陸法言廣韻、止引于誓、而不及寶、何法盛晉書稱

上總瀕海の地を、九十九里と名く、一名は白里、人其故を問ふ、乃云ふ、白に一畫を加ふれば則百なり、今一畫を損すれば則九十九ならずやと、漁獵の人、偶然名を創む、其言理あり、大雅の君子、卻て愧色あるに似たり。

金星の詩は瑣異極まる、雜詠に云ふ、于于畢竟同三豕、巨特楊家一字の師と、予其出處を詰る、輒ち凌迪知の氏族博考を舉て云ふ、楊萬里晉の于寶を論ず、一吏禮部韻書の注に晉于寶有るを取り、以て進みて曰、乃于寶にして于に非ずと、楊大に喜び、以て一字の師と爲す、按ずるに此事早く鶴林玉露に見えたり。然るに余か家に藏する所の、宋版晉書文選、亦但于に作る、于と稱する者あることなし、胡承之以爲く、字畫相沿ふの訛と而して、于子書を取り證と爲す、按ずるに春秋に于誓あり、後漢に干言あり、寶は豈んと其後か、然も亦自ら于定國あり、焉んぞ寶の其裔たらざるを知らんや、陸法言の廣韻は、止于誓を引て、而して寶に及ばず、何法盛の晉書に稱す、寶は晉紀及搜神紀を撰すと、而して于の字に及ばず、恐くは未だ據るべからず。

實撰晉紀及搜神紀、而不及干字、恐未可據。

歐陽修日本刀歌云、徐福行時書未焚、尙書百篇今尙存、令殿不許通中國、舉世無人識古文、毛奇齡曰、福建漳浦學廩生、蔡氏請徵海外古文尙書之疏、蓋爲歐言所誤耳、金星嘗有詩云、臣不臣兮君不君、唐虞禪讓尙紛紜、百王一姓長垂統、何必區區祕古文。

有像梨園戲子、各種言語者、一轉喉間、抑揚高下、殆奪其真、彼土所謂像聲、槐西雜志、諸書、卽是也、其術與口技相似、然口技必在障屏中、像聲則稠人中、露坐不忌、唯手把一筵耳、其吭嚨轉換、乍而且、乍而丑、乍而正末、隨意所欲、應人所求、各各莫不入精微、於是聽者目瞠舌擡、腕扼泣下、而恍惚默存而已矣、遊手割

歐陽修の日本刀の歌に云ふ、徐福行く時書未だ焚かず、尙書百篇今尙存す、令殿にして許さず中國に通するを、舉世、人の古文を識る無し、と、毛奇齡曰、福建漳浦の學廩生、蔡氏請ふて海外古文尙書を徵するの疏は、蓋歐の言に誤らるゝのみ、金星嘗て詩あり云ふ、臣は臣たらず、君は君たらず、唐虞禪讓尙紛紜、百王一姓長く統を垂る、何ぞ必しも區々古文を祕せん」と。

梨園の戲子各種の言語を像どる者あり、一轉喉の間、抑揚高下、殆、其眞を奪ふ、彼土の謂はゆる像聲、槐西雜志、諸書、卽是れなり、其術、口技と相似たり、然も口技は、必障屏中に在り、像聲は則稠人中、露坐して忌まず、唯手に一筵を把るのみ、其吭嚨轉換、乍にして且、忽にして丑、乍にして正末、意の欲する所に隨ひ、人の求むる所に應ず、各々精微に入らざるなし、是に於て聽者目瞠し舌擡り、腕扼し泣下る、而して恍惚默存するのみ、遊手割間、是を以て命と爲す、宴席招邀、殆虛日なし、譬を良民中に擡げ、醉飽日を涉るなり、又乞丐あり、夜に乗じ街市比屋の簷下に佇立

間、以是爲命、宴席招邀、殆無虛日、攘臂良民中、醉飽涉日也、又有乞丐、乘夜佇立街市、比屋蒼下、手帕覆面、奏技售藝、少頃行人蜂擁、拋錢囊粟充實、則長揖辭去、亦花兒之瑣瑣者矣、近人有詠此云、幻華倏忽梨園中、宛與人間榮悴同、但把五明演妙舌、卻勝口技隔屏風。

金星氏曰、楊升菴有道、今之儒者、宋人之應聲蟲也、又有與此相似者、臨濟和尚曰、三乘十二分之教、咸是拭不淨之故紙也、陸象山六經注我、卽自此而祖述矣、禪氏傳燈之說尙矣、朱文公道統圖、亦從是而敷演也、彼二先生、亦應聲之說也。

近人云、茶褐麻袍依樣成、梨園不墜祖先名、

し、手帕面を覆ひ、技を奏し藝を售る、少頃にして行人蜂擁して錢を抛つ、囊粟充實すれば、則長揖して辭し去る、亦花兒の瑣瑣たる者なり、近人此れを詠するあり、云ふ、「幻華倏忽梨園の中、宛も人間の榮悴と同じ、但、五明を把りて妙舌を演ず、卻て勝る口技の屏風を隔つるに。」

金星氏曰、楊升菴、道ふあり、今の儒者は、宋人の應聲蟲なり、又此と相似たる者あり、臨濟和尚曰、三乘十二分の教、咸な是れ不淨を拭ふの故紙なり、陸象山六經我を注す、卽此れよりして祖述す、禪氏傳燈の説尙し、朱文公道統圖、亦是れよりして敷演するなり、彼の二先生も、亦應聲の説なり。

近人云ふ、茶褐の麻袍依樣に成り、梨園墜さず祖先の名、

休詩春信金衣早、絲竹林中喚一聲、又云、斬關樓、發見精神、頭髮蒙茸、輒脫巾、今日梨園推著宿、眼空一世、卽斯人、竝是梨園弟子之寫真也、王阮亭觀瓊花夢傳奇云、自招檀痕、親顯曲、江東誰似阿龍超、讀彼二詩者、當作如是觀。

袁子才詩話詳載劉三李桂官之事、不可謂梨園無人也。

趙雲菘觀演劇云、今古茫茫貉一丘、恩讐事已隔千秋、不知於我預何事、聽到傷心也淚流。

佳人薄命胚禍基、遞送蠟書無意窺、儂愛微風吹醉醒、夜深樓上立多時、又云、留連三日泥杯觥、問謀何景嘗膽長、一隊紅裙齊拍手、

詩るを休めよ春信金衣の早きを、絲竹林中喚ぶ一聲と、又云ふ、關を斬り寶を握み精神を見る、頭髮蒙茸輒ち巾を脱す、今日梨園著宿を推す眼、一世を空するは卽此人と、竝に梨園弟子の寫真なり、王阮亭、瓊花夢の傳奇を觀るに云ふ、自ら檀痕を招り親しく曲を顧みる、江東誰か似たる阿龍超と、彼二詩を讀む者當に如是觀を作すべし。

袁子才詩話に、詳に劉三李桂官の事を載す、梨園に人なしと謂ふべからず。

趙雲菘演劇を觀るに云ふ、今古茫茫貉一丘、恩讐事已に千秋を隔つ、知らず我に於て何事に預らん、聽いて傷心に到れば也た涙流ると。

「佳人薄命禍基を胚す、遞送の蠟書窺ふに意なし、儂は愛才微風醉を吹き醒すを、夜深く樓上立つこと多時、又云ふ、留連三日杯觥に泥む、問謀何ぞ量らん、膽を嘗むる長きを、一隊の紅裙齊く手を拍ち、相追ひ相逐ふて、」

相追相逐捉迷藏、咸是近人觀赤穂傳奇之作也。

先儒詆譏大石氏多矣、近世功名之士、亦或不慊于伊人先儒之意、乃惑於春秋之書法、姑置不論焉、彼功名之士、乃以其身分、與之影對、其心以謂、彼何人、予何人、予傳呂仙金丹之秘訣、故銷禍於未形、速福於未臻、嚴毅之顔、莫不醜然而嘖焉、使雖發之口、能如鷓夷之倒傾也、飛也非翼、走也非足、然猶非其至者、若夫幾芳非于嚴冬、送冰雪于炎夏、翻掀世人之耳目、亦辨之禹步咒語之間、彼唯以劍解一途、視爲上乘、是以卒於龜毀玉碎而已、不亦惜乎、某氏代大石答之云、花飛孰不恨東風、描出勾欄翠幙中、劍解須供、入抵

捉ふと、咸な是れ近人の赤穂傳奇を觀るの作なり。

先儒に大石氏を詆譏するもの多し、近世功名の士、亦或は伊の人に慊たらず、先儒の意は、乃春秋の書法に惑へば、姑置いて論ぜず、彼の功名の士は、乃其身分を以て、之れと影對し、其心に以謂らく、彼れ何人ぞ、予何人ぞ、予、呂仙金丹の秘訣を傳ふ、故に禍を未形に銷し、福を未臻に速く、嚴毅の顔も、醜然として嘖はざる莫し、發き難きの口能く鷓夷の倒傾の如くならしむ、飛ぶや翼に非ず、走るや足に非ず、然も猶其至れる者に非ず、若し夫れ芳非を嚴冬に發し、冰雪を炎夏に造り、世人の耳目を翻掀す、亦之れを禹步咒語の間に辨す、彼れ唯劍解一途を以て、視て上乘と爲す、是を以て龜毀れ玉碎くに卒るのみ、亦惜からずや、某氏、大石に代り之れに答へて云ふ、花飛んで孰れか東風を恨まざらん、描出す勾欄翠幙の中、劍解は須く人の抵掌に供すべし、功名附與す呂仙翁と、其退抑遜讓、美を推して人に與ふ能く、良雄氏の口氣に肖似せり。

掌功名附與呂仙翁、其退抑遜讓、推美與人、能肖似良雄氏之口氣也。

鳩巢先生義人錄、可謂赤穂之司馬遷矣、東匡先生萱野三平傳、不啻褚少孫之補也、明良洪範亦載、小島喜兵衛事、予頃者演譯焉、亦庶幾乎索隱述贊之續也。

它山讀義人錄詩云、不朽千年稱、匪躬閭閻演戲感、兒童惜遺曲、突移薪略、羞徇伏橋吞炭忠、珍寶妖姝阨能脫、黍離麥秀怨無功、書生議論休苛責、霜雪凜然貞士風、前聯巧緻極矣。

寮友中根善長栽梅數百本、自號梅花長者、且署揭楣間、即詩佛老人之筆也、按儒家所謂長者、即年高有德之稱、已釋子所謂、給孤

鳩巢先生の義人録は、赤穂の司馬遷と謂ふ可し、東匡先生の萱野三平傳は、晉に褚少孫の補のみならず、明良洪範にも、亦小島喜兵衛の事を載す、予、頃日演譯す、亦索隱述贊の續を庶幾ふなり。

它山、義人録を讀む詩に云ふ、不朽千年匪躬と稱し、閭閻の演戲兒童を感ぜしむ、惜む突を曲げ薪を移すの略を遺して、羞らくは橋に伏し炭を吞むの忠に徇ふ、珍寶妖姝阨能く脱す、黍離麥秀怨も功なし、書生の議論苛責を休めよ、霜雪凜然貞士の風と、前聯巧緻極まれり。

寮友中根善長、梅數百本を栽え、自ら梅花長者と號す、且署して楣間に掲ぐ、即詩佛老人の筆なり、按ずるに儒家に謂ふ所の長者は、即ち年高有德の稱のみ、釋子の謂ふ所の給孤園の長者、法華經の譬喩に引く所の長者は、並

園長者法華經譬喻所引長者、竝指巨富之室、本邦近古、乃謂素封爲長者、亦資浮屠也、然則梅花長者四字、亦豈謂不可邪、且梅花長者自居、則其人、凡可知矣、漫成云、梅花長者緣何事、疎影暗香渾潤家。

東都淺草門外、厥倉所在焉、墨水襟帶其東、吉原盤踞其北、觀音祠宇、金碧輪奐、直當九軌之衝焉、雷神之門、赤城霞起、七級之塔、金莖露滴、百貨肆鄭、櫛比鱗次、五步一茶店、十步一酒館、凡列居其側者、咸是陶朱、夏屋渠渠、可謂洞天福地矣、然富則侈、侈則敗、敗則天堂地獄、倏忽變化、甚可痛哉、佛力廣大、洞見其理、於是乎一寸八分之紫磨金身、乃出世于千有餘年之前矣、蓋豫開一大化城、專

に巨富の室を指せり、本邦にては、近古、乃素封を謂つて長者と爲す、亦浮屠に資るなり、然らば則梅花長者の四字、亦豈不可と謂はんや、且梅花長者もて自ら居れば、則其人凡ならざる知るべし、漫成に云ふ、梅花長者何事に縁るか、疎影暗香渾て家を潤すと。

東都淺草門外、厥倉の在る所、墨水其東に襟帶し、吉原、其北に盤踞し、觀音の祠宇、金碧輪奐、直に九軌の衝に當る、雷神の門、赤城霞起り、七級の塔、金莖露滴る、百貨の肆鄭、櫛比鱗次し、五歩に一茶店、十歩に一酒館、凡其側に列居する者、咸な是陶朱、夏屋渠々、洞天福地と謂ふべし、然も富は則侈り、移れば則敗る、敗れば則天堂地獄、倏忽變化、甚痛むべきかな、佛力廣大、其理を洞見す、是に於てか一寸八分の紫磨金身、乃千有餘年の前に出世す、蓋豫め一大化城を開き、專是地の豪富を濟度するのみ、然も禍敗の家、往々猶武を接する者は何ぞや、豈一旦之れを陥罪の中に擠すも、 hands 援けざるが若く、千眼見ざるが如く、九十の化身漠然として省視せざるか若し、困阨懲創心を洗ひ面を革め、而して後終に善に歸せしむるか、將た不

濟度是地之豪富耳、然禍敗之家、往往猶接武者何哉、豈一旦擠之於陷穽之中、千手若不援、千眼如不見、十九化身漠然若不省視、使困厄懲創洗心革面而後終歸于善也歟、將不屑之濟度亦濟度之也、近時又有觸法網蒙譴責者、一僂子嘗有詩云、乃公著了觀音鎖、呼做端然妙相人、西土謂手枷爲觀音鎖、故造此謔已。

予嘗閱五山堂詩話、始知守村鷗嶼爲錦腸繡口人、一日遊墨水長命寺、讀荷塘散人碑、又觀鷗嶼五朶之妙矣、爾後乃獲鷗嶼之詩於擁鼻山人、殆如遇舊識、他日又得鷗嶼之墨妙、嘗復有此想也、消夏吟云、風榭客來供酒初、銀盤只是列園蔬、忽聽門外傳佳語、叫

屑の濟度も、亦之れを濟度するか、近時又法網に觸れ譴責を蒙る者あり、一僂子嘗て詩あり云ふ、乃公著了觀音の鎖、呼んで端然妙相の人と做すと、西土手枷エサヅリを謂ふて觀音鎖と爲す、故に此の謔を造するのみ。

予嘗て五山堂詩話を閱し、始めて守村鷗嶼の錦腸繡口の人たるを知れり、一日墨水長命寺に遊び、荷塘山人の碑を讀み、又鷗嶼五朶の妙を觀る、爾後、乃鷗嶼の詩を擁鼻山人に獲しに、殆舊識に遇ふが如し、他日又鷗嶼の墨妙を得れば、嘗に復此想あるべし、消夏の吟に云ふ、風榭客來りて酒を供する初め、銀盤只是れ園蔬を列す、忽聽く門外佳語を傳ふるを、叫了了鑿々、晚市の魚と、金澤雜咏に云ふ、遙鼠繞水塵寰を隔て、佛閣神祠海灣に連なる、昨

了聲聲晚市魚金澤雜咏云、遙嵐繞水隔塵
 寰、佛閣神祠連海灣、昨雨糝糊米家墨、今朝
 變作范寬山、鷗嶼名約字希曾、一字抱儀、閨
 鷗嶼之別號、其所居與墨水相接、不問而知
 矣。

夏目成延近從梅塢遊、日寫法華經、勇猛精
 進、不見其止、可謂在家菩薩、成延畜一妾、亦
 善女人、或謂是娑竭羅龍女之化身也。

雨糝糊たり米家の墨、今朝變して范寬の山と作る、と、鷗
 嶼名は約字は希曾、一の字は抱儀とす、鷗嶼の別號を閨
 すれば、其居る所、墨水と相接すること、問はずして知れ
 り。

夏目成延、近ごろ梅塢に従ひて遊ぶ、日に法華經を寫し、
 勇猛精進、其止るを見ず、在家の菩薩と謂ふ可し、成延一
 妾を畜ふ、亦善女人、或ひと謂ふ、是れ娑竭羅龍女の化身
 なりと。

柳橋詩話卷之上終

柳橋詩話卷之下

善庵 加藤良白撰

河合氏所藏玉盞形似匳有欄柄僅受二勺許外邊雕鏤梨花姿態橫出可愛也予以爲所謂梨花盞是也若溪漁隱引陸元光回仙錄云飲器中惟鍾鼎爲大屈卮螺盃次之而梨花蕉葉最小也又山谷謝楊景送酒器云楊君喜我梨花杯卻念初無生酒魁注云梨花謂酒盃樣製如此。

梨花蕉葉俱小盞也而蕉葉獨爲小戶之通稱東坡飲酒但三蕉葉陳后山云易醉易醒蕉葉量陸放翁云酒纔三蕉葉此類可見矣。

柳橋詩話卷之下

河合氏の藏する所の玉盞は形匳に似て欄柄あり僅に二勺許を受く外邊に梨花を雕鏤す姿態横出愛すべきなり予以爲らく謂はゆる梨花盞は是なりと若溪漁隱陸元光の回仙錄を引て云ふ飲器中惟鍾鼎を大と爲し屈卮螺盃之れに次ぎ而して梨花蕉葉最小なりと又山谷の楊景が酒器を送るを謝するに云ふ楊君我れを喜ばず梨花の杯却て念ふ初めより注酒の魁なきをと注に云ふ梨花は酒盃を謂ふと樣製此の如くならん。

梨花蕉葉俱に小盞なり而して蕉葉のみ獨り小戶の通稱と爲れり東坡酒を飲む但三蕉葉陳后山云ふ醉易く醒め易きは蕉葉量と陸放翁云ふ酒纔に三蕉葉と此の類見る可し。

宮人參朝儀、本朝今猶爲然、蓋唐制然已、杜甫云、戶外昭容紫袖垂、雙瞻御座引朝儀、是也、然唐天祐二年、下詔罷之、自是以還、彼土此制終廢矣、本朝遂不改、而沿舊也、按李唐創此制、想在女主垂簾之日、邪天祐二年始悟其非、而罷之、蓋堯舜在上、而昭容之紫袖、翩躚於臬罽稷契之間、或庶幾乎媿嫫。

凡精神注處、都謂之眼明、陸放翁喜用此字、苦筍云、藜藿盤中忽眼明、又云、眼明對此幽樓閣、始覺吾廬分外奢、桃源云、十年俗客明雙眼、又云、解映名園眼倍明之類、不可枚舉、少陵云、鷓鴣瀟瀟莫漫喜、吾與汝輩俱眼明、蓋放翁之所本也。

明、白香山琵琶行云、如聽仙樂耳暫明、

心開目明、見後漢書王常傳、山谷云、模寫一箇心眼

宮人朝儀に參ず、本朝今猶然りと爲す、蓋唐制然るのみ、杜甫云ふ、戶外に昭容の紫袖垂れ、御座を雙瞻して朝儀を引くと、是れなり、然れども、唐天祐二年、詔を下して之れを罷む、是れより以還、彼土にも此制終に廢れたり、本朝は遂に改めず、而して舊に沿ふなり、按ずるに李唐にて此制を創めしは、想ふに女主垂簾の日に在るか、天祐二年始めて其非を悟りて、之れを罷めしは、蓋堯舜上に在り、而して昭容の紫袖、臬罽稷契の間に翩躚する、或は媿嫫に庶幾しとするか。

凡精神の注ぐ處は、都て之れを眼明と謂ふ、陸放翁喜んで此字を用ふ、苦筍に云ふ、藜藿盤中忽眼明と、又云ふ、眼明に此幽樓閣に對し、始めて吾廬の分外に奢るを覺ゆと、桃源に云ふ、十年俗客雙眼を明にすと、又云ふ、映を解く名園眼倍、明なりの類、枚舉すべからず、少陵云ふ、鷓鴣瀟瀟漫に喜ぶ莫れ、吾れ汝が輩と俱に眼明と、蓋放翁の本づく所なり、心開き目明と、後漢書王常傳に見ゆ、山谷云ふ、模寫一箇心眼開くと、白香山琵琶行に云ふ、仙樂を聽くが如く耳暫明と。

岡崎庄八云、普請二字、原出于釋子、古者僧徒人人執務、不辭勞碌、所謂普請、蓋以行一大衆之力也、陸放翁詩云、堂靜僧閒普請疎、

栗山先生、伍石小廬山銘、爲元鼎賢友云、萬層峯千尺泉、下無地上惟天、與之伍誰也、鉞蝶乎曉日盤穿、騎雲背踏風肩、肉雖溫骨已僂、韻而歌我是彥、噓先生墓木已拱、而我伍石老人、鑄背兒齒、仍逍遙乎文墨之間、栗山子豈豫兆華封之祝歟、

觀濤處三大字、幾乎徑丈、永根八郎之遺筆也、近時其父伍石老人、乃攜紙本往本鎮、鑄之瀨海懸崖之額、筆力遒勁、爲偉觀云、或曰、老人無喪明之失、而謀筆札之不朽、可謂偉

佛禪詩話卷之下

岡寄莊八云、普請の二字、原釋子より出づ、古は僧徒人々務を執りて、勞碌を辭せず、謂はゆる普請也、蓋、以て一大衆の力を資るなりと、陸放翁の詩に云ふ、堂靜に僧間にして普請疎なりと。

栗山先生、伍石が小廬山の銘に、元鼎賢友の爲にすと云ふに、萬層の峯千尺の泉、下には地無く上には惟天、之れと伍するは誰ぞや、鉞蝶か、曉か、日に盤穿、雲背に騎し、風肩を踏む、肉は温と雖骨は己に僂す、韻して歌ふは、我是れ彥と、噓、先生の墓木已に拱せり、而るに我伍石老人は、鑄背兒齒、仍文墨の間に逍遙す、栗山子、豈んど豫め華封の祝を兆するか。

觀濤處の三大字、徑丈に幾し、永根八郎の遺筆なり、近時其父伍石老人、乃紙本を携へ、本鎮に往き、之れを瀨海懸崖の額に鑄す、筆力遒勁、偉觀と爲すと云ふ、或ひと曰、老人喪明の失無く、而して筆札の不朽を謀る、偉人なりと謂ふ可し、更に喜ぶ可きは、雕工の費、數十金、適ち河合氏

人矣、更可喜者、雕工之費、數十金、迺出於河合氏之惠、可謂世有范文正矣、原田鎮平與老人交篤、頗經紀此舉、有詩云、駐馬行人歎賞去、不知紅淚墮磨崖。

丙午災、糟谷墨舟疾篤、家人昇出、焰煙縱橫、避火群衆、狼狽推換、左排右闕、纒脫火道、抵一知友家、是時奄奄一息而已、友人佐藤仲甫馳往省之、手煎人參、以灌口焉、門生小西古蘭續至、護視周至、既而調治半載、稍稍有起色、然鷄骨支牀、僅脫鬼籍耳、墨舟筆札端正確守古法、乃異於當世名諫之流、具一隻眼者、必能辨之矣、墨舟病中無聊、有人來者、必分韻賦詩、其題孟浩然歸隱圖、三首俱佳、墨舟云、綠水青山護舊途、寒松瘦竹映吟鬚、

の恵に出づ、世に范文正ありと謂ふ可し、原田鎮平、老人と交り篤し、頗、此舉を經紀し、詩あり云ふ、馬を駐めて行人歎賞し去り、知らず紅淚の磨崖に墮つるをと。

四

丙午の災、糟谷墨舟病篤し、家人昇ぎ出づ、焰煙縱橫なり、火を避くる群衆は、狼狽して推換す、左排右闕、纒に火道を脱し、一知友の家に抵れり、是時奄々たる一息のみ、友人佐藤仲甫、馳せ往きて之れを省れば、手づから人參を煎じ以て口に灌げり、門生小西古蘭續で至り、護視周く至れり、既にして調治半載、稍々起色あり、然して鷄骨牀を支へ、僅に鬼籍を脱するのみ、墨舟は筆札端正にして古法を確守す、乃當世名諫の流に異なり、一隻眼を具する者は、必能く之れを辨ぜん、墨舟病中無聊、人の來る者あれば、必韻を分ち詩を賦す、其孟浩然歸隱の圖に題せしは、三首俱に佳なり、墨舟云ふ、綠水青山舊途を護り、寒松瘦竹吟鬚に映す、詩人失意清きと許くの如し、塚ぞ比せんや、明皇蜀に入る圖に陳放翁、明皇蜀に入る、仲甫云ふ、道ふ莫れ、坎軻の孟浩然と、機を見るは、須らく是れ高賢

詩人失意清如許、寧比明皇入蜀圖、隨放翁有因明皇入蜀仲甫云、莫道坎軻孟浩然、見機須是

屬高賢、卻憐禁省王維輩、凝碧池頭聽管絃、

古蘭云、高風難繼鹿門歌、踏蹬官途不可曉、

金戶玉堂無此景、夜窓松月擺烟蘿、孟詩云、松月夜

窓

楊誠齋詠梁武帝云、梵王豈是無甘露、不爲

君王致蜜來、可謂最上說法、皇祖檜陰翁詠

聖德太子云、焉證醍醐非毒藥、山陵幾日草

茫茫、亦不落第二義矣、予嘗撰六國史論五

卷、而於太子論、亦襲述其意、今忘固陋、此揭

一篇、以問世、他日得全軼梓行、慰皇祖歸天

之魂、爲天之所假、不菲、

聖德太子論曰、虎狼不與麒麟同群、鸚鵡不

に屬すべし、卻て憐む禁省王維の輩、凝碧池頭に管絃を
聽く、古蘭云ふ、高風繼ぎ難し鹿門の歌、踏蹬たる官途嗟
く可からず、金戶玉堂には此景なし、夜窓の松月烟蘿を
擺ふ、孟詩に云ふ、松月夜窓處し」と。

楊誠齋、梁の武帝を詠じて云ふ、梵王豈是れ甘露無から
んや、君王の爲に蜜を致し來らずと、最上の說法と謂ふ
可し、皇祖檜陰翁、聖德太子を詠して云ふ、焉んぞ醍醐の
毒藥に非ざるを識らんや、山陵幾日か草茫茫々と、亦第二
義に落ちず、予嘗て六國史論五卷を撰せり、而して太子
論に於ても、亦其の意を襲述せり、今固陋を忘れて、此に
一篇を掲げ、以て世に問ふ、他日全軼梓行し、皇祖歸天の
魂を慰むるを得ば、天の假す所非からずと爲す。

聖德太子論に曰く、虎狼は麒麟と群を同じくせず、鸚鵡

與鳳皇共類、姦雄不與聖賢並立、如是而後善善惡惡之法、遂定于一、而不可移易矣、是乃史筆之所以垂千萬世、而姦臣賊子所以毛髮豎肝膽碎而無復容身之地也、僕舉上古聖賢者、必以厩戸太子居其一焉、以予觀之、抑虎狼邪、麒麟邪、鵬鴞邪、鳳皇邪、其名實之相反、未有甚於是也、若眩其名、而昧其實、取其華而遺其根、則薰狐之目、眩於五色、而仲尼之筆、惑乎涇渭矣、當敏達帝之時、蘇我馬子、物部守屋俱爲左右匡輔之大臣、方是時、高麗貢佛典及丈六銅像、馬子大喜、尊奉甚至、守屋抗議而斥之、二子釁隙、遂自此啓矣、厩戸太子亦喜佛之尤、而與馬子有密契焉、故日後守屋之滅亡、陽發于廢立之議、陰

は鳳皇と類を共にせず、姦雄は聖賢と並び立たず、是の如くにして後、善を善とし、惡を惡とするの法、遂に一定り、而して、移易すべからず、是れ乃史筆の千萬世に垂るゝ所以、而して姦臣賊子の、毛髮豎肝膽碎けり、而して復た身を容るゝの地無き所以なり、上古の聖賢を僂擧する者は、必ず厩戸の太子を以て其の一に居く、予を以て之を觀れば、抑も虎狼か、麒麟か、鵬鴞か、鳳皇か、其の名實の相反する、未だ是れより甚だしきは有らざるなり、若し其の名に眩みて、而して其實に昧く、其の華を取りて其の根を遺れば、則ち薰狐の目は、五色に眩み、仲尼の筆は、涇渭に惑はん、敏達帝の時に當り、蘇我馬子、物部守屋俱に左右匡輔の大臣たり、是の時に方り、高麗、佛典及び丈六の銅像を貢す、馬子大に喜び、尊奉甚だ至れり、守屋抗議して之を斥く、二子の釁隙、遂に此れ自り啓けり、厩戸太子亦佛を喜ぶの尤、而して馬子と密契有り、故に日後守屋の滅亡するや、陽に廢立の議を發し、陰に佛を斥るの致す所に由ると云ふ、嗚呼、是れ其の形跡のみ、庸詎其事情を悉さんや、夫れ馬子は忍人なり、守屋も亦剛悍にして、禮を知らず、俱に與に大政に參す、譬は潛居虎狼の檻を同じうし、虺蛇の穴を共にするがごとし、一吞一

由於斥佛之所致云、嗚呼是其形跡耳、庸詎悉其事情乎哉、夫馬子忍人也、守屋亦剛悍而不知禮、俱與參大政、譬猶虎狼之同檻、虺蛇之共穴、一吞一噬、何有底止、幸而是時莫有佛之東傳、邪二臣竟保于無隙、歟又上之爲阜變稷契、下之爲蕭曹邴魏、德庇蒼生、續垂史冊、邪乎決知其不然也、冬有陰寒、春有瘡首、二疾之作、必根于內、而發於外、愚者輒答於春曰、汝何以發若疾矣、又責於冬曰、而何以釀若痼矣、豈理也哉、二臣怨毒之疾、根結于五藏之中、久矣、彼佛之來也、猶春氣冬令、行于時、二臣之疾、適觸是而發耳、何足深怪、以是觀之、二臣之相與吞噬、有未必不可、諉於佛者矣、太子與馬子相比、亦有由、是時草

噬、何の底止する有らんや、幸にして是時佛の東傳する有る莫からんか、二臣竟に隙無きを保せんか、又之を上にして阜變稷契と爲り、之を下にして蕭曹邴魏と爲り、德蒼生を庇ひ、續史冊に垂れんか、予決して其の然らざるを知るなり、冬は陰寒有り、春は瘡首有り、二疾の作る、必ず内に根し、而して外に發す、愚者輒ち春を咎て曰く、汝何を以て若き疾を發すと、又冬を責めて曰く、而何を以て若き痼を釀すと、豈理ならんや、二臣怨毒の疾は、五藏の中に根結する、久し、彼の佛の來るや、猶春氣冬令、時に行はるがごとし、二臣の疾、適是れに觸れて發するのみ、何ぞ深く怪むに足らん、是を之て之れを觀れば、二臣の相與に吞噬する、未だ必らずしも佛に諉すべからざる者有り、太子の馬子と相ひ比するも、亦由あり、是時草昧の習ひ未だ除かず、而して嫡庶の分明かならず、負服して南面する者、往々椒房庶孽の間に、出づ、是を以て諸皇子觀覲の心、固より一日に非ず、殿廊の上に、逐鹿の争ひ有り、彼の馬子は、伊蓋の糖、震主の威を挾て、而して浮屠を崇尚する、適太子と相ひ投ず、是に於て磁芥相ひ引き、膠漆相ひ合ひ、水魚相ひ親しむ、焉ぞ他日、發立の謀、誦經念佛の際に、定るに非ざるを知らんや、或るひと難じて

味之習未除、而嫡庶之分不明、負辱而南面者、往往出於椒房庶孽之間、是以諸皇子親親之心、固非一日巖廊之上、有逐鹿之爭焉。彼馬子者、挾伊霍之權、震主之威、而浮屠之崇尚、適與太子相投、於是磁芥相引、膠漆相合、水魚相親、焉知非他日援立之謀、定于誦經念佛之際邪、或難曰、馬子之弑、崇峻帝、太子亦與謀歟、曰、固也、然則是時、盍卽位焉、曰、是太子至險至姦之心、所以自欺且欺人、以博聖賢之名、何者、遽取大物、天下後世、其謂之何、若以漸及焉、猶有辭矣、以聰明絕倫之資、藉金仙誕漫之說、文之以莽操姦雄之才、何事而不成、何物而不服、宜乎舉一世而爲之所欺也、且天下之易制、易欺者、孤兒寡婦

曰、馬子の崇峻帝を弑する。太子亦謀に與るか、と、曰く固よりなり、然らば則ち、是時盍ぞ位に卽かざる、曰く、是れ太子至險至姦の心、自ら欺き且つ人を欺き、以て聖賢の名を博する所以なり、何なれば、遽に大物を取らば、天下後世、其れ之を何と謂はん、若し漸を以て及ばば、猶ほ辭有り、聰明絶倫の資を以て、金仙誕漫の説を藉り、之を文るに、莽操姦雄の才を以てす、何事か成らざらん、何物か服せざらん、宜なるかな、一世を擧て之れに欺かるるや、且天下の制し易く、欺き易き者は、孤兒寡婦のみ、推古帝は乃ち敏達帝の寡婦なり、是の時に當り、太子始めて國儲と爲り、萬幾を總攝す、謂はゆる馬子が昔日奉獻の謀、駭々乎として成る、是を以て之を觀れば、太子と馬子と相ひ比するも、亦必らずしも佛に擬すべからざる者有り、始め太子は儒術を博士覺智に受く、豈弑逆の大罪たるを知らざらんや、設使儒を以て之を論ずれば、則ち太子止趙盾、之を如何せん、佛は則ち然らず、凡そ此經を誦する者は、十惡五逆の罪も、卽時に消滅せざる莫し、蓋此の一言、乃ち以て仲尼春秋の旨を抹殺す可し、而して太子滔天の罪、亦得て以て掩覆す可し、是を以て之を觀れば、太子の人となり、聖賢か、姦雄か、明者を待たずして知

耳、推古帝、乃敏達帝之寡婦也、當是時、太子始爲國儲、總攝萬幾、所謂馬子昔日奉戴之謀、駸駸乎成矣、以是觀之、太子與馬子相比、亦有未必可諉于佛者矣、始太子受儒術於博士覺智、豈不知弑逆之爲大罪乎哉、設使以儒論之、則太子止趙盾如之何、佛則不然、凡誦此經者、十惡五逆之罪、莫不卽時消滅、蓋此之一言、乃可以抹摻仲尼春秋之旨、而太子滔天之罪、亦可得掩覆矣、以是觀之、太子之爲人、聖賢邪、姦雄邪、不待明者而知矣、然觀太子之薨於推古之末年、豈天邪、抑所謂罪障消滅之說、亦遂無一效邪、或曰、太子憲法十七章、言格訓懿、垂千載法戒、併謂之非、而可乎、嗚呼、九錫之美、炳焉于曹魏、周

らん、然れども太子の推古の末年に薨するを觀る、豈んぞ天なるか、抑、謂ゆる罪障消滅の説も亦遂に一效無きか、或るひと曰く、太子、憲法十七章、言格しく訓懿しく、千載の法戒を垂る、併せて之を非と謂ふて、可ならんや、嗚呼九錫の美、曹魏に炳焉たり、周官井田の法、新莽に秩然たり、夫れ文字制度の以て恃む可からざるや久し、獨り太子のみならず。

官井田之法、秩然于新莽、夫文字制度之不可以待也久矣、不獨太子而已。

括囊文集三卷、乃先考之所撰述、而手澤如新、乙酉冬、火發北鄰、不唯屋宇煨燼、此冊亦烏有、每思及之、五內且裂、蓋先考晚年獲何雪漁圖章、乃鐫括囊二字、因號括囊老人焉、予乏記性、若詩若文、口誦者無幾、今錄其一、二、以當蓼莪之篇、墨水觀花云、不是高樓一百家、湘簾鱗次旋煎茶、年年春色無租稅、數里長堤渾是花、又經箱根山中云、驛亭人嗜香、山路馬玄黃。

先考嘗言、毛萇注我馬玄黃曰、玄馬病則黃、鄭玄注何草不黃、何草不玄、曰、始春之時、草木葉者必玄、二家之陋、固不容、際近世考證

括囊文集三卷、乃先考の撰述する所、而して手澤新なるが如し、乙酉の冬、火、北鄰に發し、唯に屋宇の煨燼たるのみならず、此の冊も亦烏有す、思ふて之に及ぶ毎に、五内且に裂けんとなす、蓋し先考晚年、何雪漁の圖章を獲て、乃ち括囊二字を鐫し、因て囊括老人と號せり、予記性に乏し、若くば詩若くは文、口誦する者幾ばくも無し、今其詩一二を録して、以て蓼莪の篇に當つ、墨水に花を觀るに云ふ、是れ高樓一百家のみならず、湘簾鱗次しづで茶を煎る、年年春色租稅無し、數里の長堤渾て是れ花、又箱根山中を經るに云ふ、驛亭人嗜香、山路馬玄黃と。

先考嘗て云ふ、毛萇、我馬玄黃を注して曰く、玄馬病めば則ち黃なりと、鄭玄、何の草か黃ならざらん、何の草か玄ならざらんを注して曰、始春の時、草木の葉する者は必らず玄と、二家の陋固より疎にれられず、近世の考證家

家、謂玄黃爲眩惶、是說宜通於馬、子草則窮矣、爾雅釋詁云、虺類玄黃、病也、郭璞云、皆人病之通名、說者便謂之馬、失其義也、以是考之、則草木黃落、亦謂之玄黃耳、按瘠鹵之地、謂之不毛、亦謂之窮髮、莊子要是草木毛物相通之理、自不可誣也、小戴內則曰、馬黑脊而盤臂、漏狗赤股而躁躁、鄭玄云、盤臂、前脛般般然也、赤股、股裏無毛也、蓋盤臂赤股、可以案狗馬之病、而黃落之候、亦可以證草木之病、其理蓋一也、淮南子訓修務云、舜文黑、又應道云、深目玄鬢、劉向九歎云、顏黧黑以俱敗、蓋玄色之爲病、亦可以徵矣、

雲和不止一物、楊師道詠笙云、來應雲和琴、即琴名也、陳子昂修竹篇云、遂偶雲和瑟、亦

物猶詩經卷之下

は、玄黃を讀んで眩惶と爲す、是の説宜く馬に通ずべし、草に于ては則ち窮す、爾雅釋詁に云、虺類玄黃は、病なりと、郭璞云、皆人病の通名と、說者便ち之を馬と謂ふ、其の義を失するなり、是を以て之を考ふれば、則ち草木黃落も、亦之を玄黃と謂ふのみ、按するに瘠鹵の地之を不毛と謂ひ、亦之を窮髮と謂ふ、莊子要是是れ草木は毛物と相通するの理、自ら誣ふ可からざるなり、小戴の内則に曰く、馬、黑脊にして盤臂なるは漏狗、赤股にして躁なるは躁と、鄭玄云ふ、盤臂は、前脛般々然たり、赤股は、股裏毛無きなりと、蓋、盤臂赤股、以て狗馬の病めるを案す可し、而して黃落の候、亦以て草木の病めるを證す可し、其理は蓋し一也、淮南子訓修務云ふ、舜文黑と、又應道云ふ、深目玄鬢、と劉向の九歎に云ふ、顔の黧黑は以て俱に敗ると、蓋、玄色の病たる、亦以て徵す可し、

雲和は一物に止らず、楊師道、笙を詠じて云ふ、來應す雲和の琴、即、琴の名なり、陳子昂の修竹篇に云ふ、遂に偶す雲和の瑟、亦、瑟の名なり、白樂天の雲和に云ふ、琴に非

瑟名也、白樂天雲和云、非琴非瑟亦非箏、別復一物也、武帝內傳云、董雙成吹雲和之笙亦爲笙名、然則雲和一名、判爲四物、先考在日、舉以質之、先考曰、梧桐一名雲和、抱朴子云、鞞陽雲和、可以證美、宜其名通諸樂器、未必止四物而已、周禮大司樂、孤竹之管、雲和之木、用爲瑟、其聲清亮、因以名瑟、

兒貞白讀江戶繁昌記云、靜軒何事弄毫忙、曾向虞初傳此方、楮葉刻成人駭見、龍肝煎熱客爭嘗、寒儒未必謀溫飽、冷語唯能醒熱腸、寫出名都許多事、家家莫不說繁昌。

臨濟語錄曰、日消萬萬黃金、注云、消猶用也、蓋唐人俗語也、白樂天雲和云、欲散白頭千萬恨、只消紅袖兩三聲、李遠、長日唯消一局

寸瑟に非ず亦等に非ずと、別に復た一物なり、武帝內傳に云ふ、董雙成、雲和の笙を吹くも、亦笙の名と爲す、然らば則ち雲和の一名判して四物たり、先考在日、舉て以て之を質せしに、先考曰く、梧桐の一名は雲和、抱朴子に云ふ、鞞陽の雲和と、以て證す可し、宜なり、其の名の諸樂器に通するや、未だ必ずしも四物のみならず、周禮大司樂、管、雲和の琴瑟と、鄭玄曰く、雲和は、山の名、地良木を産す、用て瑟と爲す、其聲清亮、因て以て瑟と名く、

兒貞白、江戶繁昌記を讀むに云ふ、靜軒は何事ぞ毫を弄ぶの忙しき、曾て虞初に向て此方を傳ふ、楮葉刻し成して人駭き見る、龍肝煎熱客争ふて嘗む、寒儒未だ必ずしも温飽を謀らず、冷語唯能く熱腸を醒せり、寫し出す名都許多の事、家々繁昌を説かざる莫しと。

臨濟語錄に曰く、日に萬々の黄金を消ゆと、注に云ふ、消は猶用のごときなりと、蓋唐人の俗語なり、白樂天の雲和に云ふ、白頭千萬の恨を散せんと欲し、只消ゆ紅袖兩三聲と、李遠の「長日唯消一局の棋」と、並に此義なり。

棋、竝此競也。

李長吉云、金鷲屏風蜀山夢、或曰、本朝所傳、鴨毛屏風、卽李唐物也、所謂金鷲豈是歟。

茅茨土階、美則美矣、然我仁德天皇、上漏下濕、又加一等、故高臺之詠、將、駕、擊壤南風、而土之也、懽堂松崎先生、大阪覽古云、大江南北、去古今流、王伯升沈此水頭、欲醉三杯、問、江水、渚、花洲草自悠悠、仁皇御世有、如、傷、月、照、屋梁、雨、滴、牀、艸木也、知恩澤、瀨、登樓初詠、富民章、百城摧破一城成、仰看金湯雲共平、猶有後人笑、君拙、須臾、哲婦、警然傾。

幻景、卽浮屠氏醒世之語也、然百年一瞬、桑滄變遷、莫一非、幻景、而人之處世、榮悴窮達、異於鏡花水月者、其與幾何、懽堂先生、關、澁

御稱詩話卷之下

李長吉云ふ、金鷲屏風蜀山の夢と、或人曰く、本朝に傳はる所の鴨毛屏風は、卽ち李唐の物なりと、謂はゆる金鷲は豈んど是れなるか。

茅茨土階、美は則ち美なり、然れども我仁德天皇の、上漏り下濕ふは又一等を加ふ、故に高臺の詠は、將に擊壤南風に駕して而して之に上らんとするなり、懽堂松崎先生の、大阪覽古に云ふ、大江南北に去て古今流る、王伯の升沈此水の頭、三杯を酔して江水に問はんと欲すれば、渚花洲草自ら悠悠、仁皇世に御す傷つくが如き有り、月は屋梁を照し雨は牀に滴る、艸木也た恩澤の濕きを知る、樓に登り初めて富民の章を詠す、百城摧破せられて一城成る、仰き看る金湯雲と共に平なり、猶ほ後人、君の拙を笑ふ有り、須臾にして哲婦警然として傾く。

幻景は、卽ち浮屠氏世を醒すの語なり、然も百年一瞬、桑滄變遷、一として幻景に非ざるは莫し、而して人の世に處る、榮悴窮達、鏡花水月に異る者は、其れ幾何ぞや、懽堂先生、澁谷の郵居を聞き、一古印を土中に獲たり、乃ち

谷、郁居、獲一古印於土中、乃幻景二字也、先生手授石經、上諸梓、所謂十四經殿、殿開生面、然則君子之德、本不爲幻景移、而不朽盛業、豈謂之鏡花水月乎哉、清乾隆皇帝、亦有四幻景詩、見御製文集云、按、趙觀齋有奉和幻景詩、見臨北集。

小西古蘭近以重價購明人林焯草書橫卷、蓋其所自作、和少陵秋興八首之詩、三覆至廿四首之侈、其書禿筆揮灑、而遒勁有恣態、宜其十襲不輕視、按林焯載在書畫譜、此不贅、謝肇淛云、吾閩林布衣焯、學松雪、而稍勁、泰山有唐時磨崖碑、至爲鉅麗、而近人以林焯忠孝廉節四大字覆之、蓋當時監司愛其書、下郡縣鐫之石、而下吏凡俗、急承風旨、遂爲此煞風景、五、續上文謂、張北部焯得法於

幻景の二字なり、先生手づから石經を授し、諸を梓に上す、謂はゆる十四經殿々として生面を開けり、然らば則ち君子の徳、本より幻景に移されず、而して不朽の盛業は、豈之れを鏡花水月と謂んや、清の乾隆皇帝も、亦四幻景の詩有り、御製文集に見ゆと云ふ、按、趙觀齋奉和幻景の詩あり、臨北集に見ゆ。

小西古蘭近ごろ重價を以て明人林焯の草書横卷を購ふ、蓋し其自作する所なり、少陵の秋興八首に和するの詩三覆して廿四首の侈に至る、其の書禿筆揮灑、而も遒勁にして恣態有り、宜なり其十襲して輕しく視さざるや、按ずるに林焯は載て書畫譜に在れば、此に贅せず、謝肇淛云ふ、吾が閩の林布衣焯は、松雪を學んで、而して稍勁し、泰山に唐時の磨崖碑有り、至て鉅麗たり、而して近人林焯の忠孝廉節の四大字を以て之を覆ふ、蓋當時の監司、其書を愛し、郡縣に下して之を石に鐫す、而して下吏凡俗、急に風旨を承け、遂に此の煞風景を爲すと、五、續上文に謂ふ、張北部焯は、法を米に得て、而して參するに己が意を以ず、其の題識する所は尋文を遮るに至り、天然の趣を極めざるは莫しと、則ち林張二家竝に大字を善

米、而參以己意、其所題諱、至逾尋丈、莫不極天然之趣、則林張二家、竝以善大字著稱、至徑丈徑尋之曠、巨也、近披讀廣東新語云、吾粵先輩多善書、有趙東臺者、於訶林書、集唐嘉樹四大字、而黎瑤石於錦石山書華表石三大字、大徑丈、人皆以爲神筆、閩也、粵也、經吳耿之亂、其巨觀大筆、存不亦未可知也、永根奕孫曾揮觀濤處三大字、乃翁冰齋鑄之、管內海瀕之石崖、蓋與閩粵、隔地相映射者矣。

仙臺公族大夫伊達氏號三山亭、園池放鶴一雙、曾愈綴翻、乃霽然颺去、數年之後、復相與旋歸、和鳴飯啄、動止自適、從是後、翻亦不殺、幾乎如安、九阜之中焉、女校書紅蘭爲裁。

するを以て著稱せらる。徑丈徑尋の曠巨に至れり、近て廣東新語を披き讀むに、云ふ、吾粵の先輩多くは書を善くす、趙東臺といふ者有り、訶林に於て集唐嘉樹の四大字を書す、而して黎瑤石は錦石山に於て華表石の三大字を書す、大さ徑丈、人皆以て神筆と爲す、閩や粵や、吳耿の亂を経たり其巨觀の大筆、存するや、不や亦未だ知る可からざるなりと、永根奕孫曾て觀濤處の三大字を揮ふ、乃翁冰齋之を管內海瀕の石崖に鑄す、蓋、閩粵と、地を隔て、相ひ映射する者なり。

仙臺の公族大夫、伊達氏三山亭と號す、園池に鶴一雙を放てり、曾て翻を綴るに怠る、乃ち霽然として颺り去り、數年の後、復た相ひ與に旋り歸り、和鳴して飯啄し、動止自適なり、是れ從り後翻亦殺がず、幾んど九阜の中に安んずるが如し、女校書紅蘭は爲に七律を裁して云ふ、年

七律云、經年歸到舊園林、露下依然吐羽音、對舞豈緣人目悅、和鳴似感主恩深、池亭夜月三山夢、雲海秋風萬里心、世上乘軒者何限、勢榮相誓不如禽、紅蘭張氏名景婉、字道華、梁星巖之室也、蓋梁氏之室、世有賢操、然伯鸞之妻、貌不稱德、才華亦遜、其優劣豈待辨哉。

唐人鄭審則信憑、今乃在江州飯室正禪寺、舊是叡山之秘藏云、蓋傳教大師證自唐齋來者矣、元亨釋書曰、當歸紅之時、明州太守鄭審則乃與公據印署、以讚美焉、即此物也、始岡本半介宣就、年十五六讀書、叡山僧房會織田氏兵燹、乃抱鄭審則文書而逃去、事定後、復還投之寺庫、迄今殆千年矣、唐人真蹟

を経て歸り到る舊園林、露下依然として羽音を吐く、對舞豈人目の悦に緣らんや、和鳴主恩の深きを感ずるに似たり、池亭夜月三山の夢、雲海秋風萬里の心、世上軒に乗る者何ぞ限らん、勢榮相誓む禽に如かざるを、紅蘭は張氏名は景婉、字は道華、梁星巖の室なり、蓋、梁氏の室也、賢操有り、然れども伯鸞の妻は、貌徳に稱はず、才華も亦遜る、其の優劣豈辨を待たんや。

唐人鄭審則の信憑、今乃ち江州飯室の正禪寺に在り、舊と是れ叡山の秘藏と云ふ、蓋し傳教大師證唐より齋し來る者、元亨釋書に曰く、歸紅の時に當り、明州の太守、鄭審則乃ち公據印署を與へ、以て讚美す、即ち此物なり、始め岡本半介宣就、年十五六、書を叡山の僧房に讀む、織田氏の兵燹に會ふ、乃ち鄭審則の文書を抱て逃れ去り、事定つて後、復た之を寺庫に還投す、今に迄、殆ど千年、唐の眞蹟完好現存する、亦岡本宣就の勳なり、宣就は後に彦根に仕へ、戎馬の功勳著たり、其の童年の不凡なる、此の舉にて見る可し。

完好現存、亦岡本宜就之勳也、宜就後仕彦根、戎馬之功赫著、其童年之不凡、此舉可見矣。

岡本氏歷世爲彦藩之名閥、今其裔名龜宇吉甫號秋石、半介之稱、則因襲不改、蓋從邦俗焉、船鈴之略、文藻之美、俱不愧乃祖也、秋夜讀九歌云、奈此秋風蕭索、何、空江木落月明多、時清何用懷孤憤、宵永惟宜誦九歌、楓樹夜猿悲欲斷、女蘿山鬼語相和、五更捲卷恍無寐、心遠天南湘水波、春日感懷云、衰衰街塵十丈紅、奔車走馬漫西東、豈能括舌爲樓護、且擬回心學塞翁、閑易閒聽春館雨、驟花悄立曉堤風、此生未是全無事、愧爾沙邊水物公。

柳橋詩話卷之下

岡本氏は歴世彦藩の名閥たり、今其の裔名は龜宇は吉甫秋石と號す、半介の稱は、則ち因襲して改めず、蓋邦俗に従ふなり、船鈴の略、文藻の美、俱に乃祖に愧ぢざるなり、秋夜、九歌を讀むに云ふ、此秋風蕭索を奈何んせん、空江木落ちて月明多し、時清して何ぞ用ひん、孤憤を懷くを、宵永くして惟九歌を誦するに宜し、楓樹夜猿悲み斷えんと欲し、女蘿山鬼語相ひ和す、五更巻を捲き恍として寐る無く、心は、遠し天南湘水の波、春日感懷に云ふ、衰々たる街塵十丈紅なり、奔車走馬漫に西東す、豈能く舌を括て樓護と爲らんや、且ほ擬す心を回て塞翁を學ばんと、易を閑して閒に聽く春館の雨、花を驟して惟ひて立つ曉堤の風、此生未だ是れ全く事無きにはあらず、愧つ沙邊の水物公と。

韓退之寄盧仝云、立召賊曹呼伍伯、或作五百盡取鼠輩尸、諸市、蔣之翹註云、伍伯見古今註、什伍之長也、東漢禰衡傳、令五百將出加筆注、五百猶今之同事者、按三隱集、拾云、若解捉老鼠、不在五百猶、便以五百爲貓兒名矣、蓋狸奴之捕鼠、譬諸五百之執役、故命其名耳、且三隱初唐人、而在退之前、則其爲貓兒名亦久矣。

和合神圖、昉于近世、家家掛壁、禱祀維虔焉、或云顧鐵卿清嘉錄所謂和合壽星卽此也、不知然否、近人咏之云、南極老人示變相、家爭先掛畫圖、豈料君亦愛銅臭、笑容粲然歡且娛、三思始悟君意厚、人間萬事避青蚨、大則天下小則家、由是和合不可誣、招福殿

韓退之盧仝に寄せて云ふ、立るに賊曹を召し伍伯を呼或は五百び、盡く鼠輩を取つ、諸を市に尸せん」と、蔣之翹の注に云ふ、伍伯は古今注に見ゆ、什伍の長なり、東漢禰衡傳に、五百をして將に出で筆を加しむと、注に五百は猶ほ今の同事者のごとしと、按ずるに三隱集に、拾云ふ、若し老鼠を捉ふるを解せば、五百猫に在らずと、便ち五百を以て猫兒の名と爲す、蓋狸奴の鼠を捕ふる、諸を五百の役を執るに譬ふ、故に其名を命ずるのみ、且つ三隱は初唐の人、而して退之の前に在れば、則ち其猫兒の名たる亦久し。

和合神の圖は、近世近世に昉る、家々壁に掛て、禱祀維れ虔む、或ひと云ふ、顧鐵卿の清嘉錄に謂ゆる、和合壽星卽ち此なりと、知らず然るや否や、近人之を咏じて云ふ、南極老人變相を示し、家々争ふて先づ畫圖を掛く、豈料らんや君亦銅臭を愛し、笑容粲然歡び且つ娛む、三思して始て悟ス君が意の厚を、人間萬事青蚨に憑る、大は則ち天下小は則ち家は、由て和合誣ゆ可らず、招福殿々靈驗有り、且々香火膏腴を禱る、漸く見る屋宇光彩を生ずるを、恰

首五 蓋南江詩、散見扶桑若木集、花上集等者、咸可觀焉、今復摘其一、二、海客椰帆懸暮雨、蠻僧蕉縷織秋風、午雨欲零雪著地、頭風難愈日如年、提撕渭北春天句、參得江西宗派人、又餞大內源公西還云、三年已罷九州師、封內清風海內知、忽上青霄却回贊、舟中唯載野僧詩、他至贊一休壽像、悼江西老人之詞、乃衲衣下事耳、故不錄矣。

尺八、詳見容齋隨筆、且云、今無由曉其形製也、然則南宋時、其製已不傳矣、本邦所傳尺八、豈其遺製邪、將原是別物、而冒尺八之稱邪、南江詩有湖村尺八之言、則知室町氏之時、尺八盛行矣。

納涼之遊、極盡豪華、經四五十年之久、而都

今復た其の一二を摘せん、海客は椰帆を暮雨に懸け、蠻僧は蕉縷を秋風に織る、午雨零ちんと欲して雲地に著き、頭風愈え難く日は年の如し、渭北春天の句を提撕して、參し得たり江西宗派の人と、又大内源公西に還るを餞して云ふ、三年已に罷む九州の師、封内の清風海内知る、忽ち青霄に上り卻て回去す、舟中唯載て野僧の詩、他一休壽像に贊し、江西老人を悼むの詞に至ては、乃ち衲衣下の事のみ、故に錄せず。

尺八は詳に容齋隨筆に見ゆ、且つ云ふ、今其形製を曉るに由無しと、然らば則ち南宋の時、其製已に傳はらざるなり、本邦に傳はる所の尺八は豈んど其の遺製なるか、將た原とはれ別物にして、尺八の稱を冒すか、南江の詩に「湖村尺八」の言有れば、則ち知る室町氏の時、尺八盛行するを。

納涼の遊びに、豪華を極め盡して、四五十年の久きを經

人猶道其事者、横山潤是也。其爲豪侈也、都下遊舫、千百艘、一日悉買之、殆不遺一雙、每舫聲妓幫間俱二三人、絲竹酒饌竝陳、自墨水上游、至兩國下流、舟舫魚貫、掩流而下、其主盟横山氏、與親交一二人、駕小舟往來其間、杯酌交驩、一日之費、千金不啻、可謂天物暴殄之極矣。横山氏家舊富殖、藏鏹百萬、至潤、其性慷慨、揮金如土、且讀書學字、所交皆一時名流也、而蘆葦家產、亦未曾不由此輩贊襄也。周亮工書影載、茅元儀止作、午日秦淮大社、吊汨羅、盡兩岸樓臺亭榭、及河中之巨艦扁舟、無不倩也、盡四方之詞人墨客、及曲中之歌妓舞女、無不集也、分明結伴、遞相招邀、傾國出遊、無非赴止生之社者、止生之

柳橋詩話卷之下

て、而も都人猶ほ其事を道ふ者は、横山潤是れなり、其の豪侈たるや、都下の遊舫、千百艘、一日悉く之を買ひ、殆ど一隻を遺さず、每舫聲妓幫間俱に二三人、絲竹酒饌竝べ陳ね、墨水の上流より、兩國の下流に至るまで、舟舫魚貫、流を掩ふて下る、其主盟横山氏、親交一二人と、小舟に駕し、其間を往來し、杯酌交も驩す、一日の費、千金も管ならず、天物暴殄の極と謂ふ可し。横山氏家舊と富殖、藏鏹百萬、潤に至て、其性慷慨、金を揮ふ土の如く、且つ書を讀み字を學び、交る所は皆一時の名流なり、而して家産を蘆葦する亦未だ曾て此輩の贊襄に由らずんばあらざるなり、周亮工の書影に載す、茅元儀止午日秦淮大社を作して、汨羅を弔し、兩岸の樓臺亭榭を盡し、及び河中の巨艦扁舟、倩はざる無く、四方の詞人墨客を盡し、及び曲中の歌妓舞女、集らざる無きなり、分明に伴を結び、遞いに相ひ招邀す、國を傾け出遊するは、止生の社に赴くに非る者無し、止生の名、遂に大に噪し、今に至るまで、以て美談と爲す、盡し横山氏の納涼は、茅生の大社と、蘆葦相類す、而して其の爽快奇宕、亦以て韻頰對射するに足る、潤翁詩草一卷有り、祝融に奪ひ去られ、今存せずと云ふ、惜む可きのみ、其子敏齋醫に隠れ、予友とし、善し、故に其の大

八九

名、遂大噪、至今以爲美談矣。蓋橫山氏納涼與茅生之大社、豪舉相類、而其爽快奇宕、亦足以韻頗對射矣。潤翁有詩草一卷、爲祝融所奪去、今不存云、可惜已、其子敏齋隱於賢子友善、故得其大槩。

朝川善庵先生以經術自任、其造詣非後生所窺、予與先生同別號、故世以謂今之陳鷲坐也、先生漫成云、浮利浮名心已灰、三槐何必擬三台、移牀坐就新陰下、也怯南柯入夢來、或曰、先生經術文章之餘、亦爲春城無處不飛花之韓翃也。

清人顧鐵卿寄貽善菴先生詩扇、曾蒙借觀、背寫牡丹一朵、著色輕鬆、雅致可掬、蓋顧氏臨池繪事之妙、可併見焉、錄其近製云、輕陰

梗を得たり。

朝川善庵先生、經術を以て自ら任ず、其の造詣は後世の窺ふ所に非ず、予先生と別號を同うす、故に世以謂ふ今の陳鷲坐なりと、先生の漫成に云ふ、浮利浮名心已に灰、三槐何ぞ必しも三台に擬せん、牀を移し坐して就く新陰の下、也た怯る南柯夢に入り來るを、或人曰く、先生經術文章之餘、亦「春城處として飛花ならざるは無し」の韓翃たり。

清人顧鐵卿、善菴先生に寄貽せし詩扇、曾て借觀を蒙りしに背に牡丹一朵を寫せり、著色輕鬆、雅致可掬、蓋顧氏臨池繪事の妙、併せ見る可し、其の近製を錄す、云ふ、「輕陰會て記す征驂を護りしを、歸夢迢々思ひ堪へず、惟

曾記護征驂、歸夢迢迢思不堪、惟有桑乾河
 畔柳、朝來分綠至江南、風風雨雨惜年華、纔
 覺微暄嬾更眠、曉起尙寒宵自暖、誤佗妮媿
 弄秋千、無言桃李自成蹊、白白朱朱放已齊、
 挽住落英風裏舞、不隨飛絮共沾泥、鄧尉香
 霏滿翠巒、問誰攜、取一枝看、淡雲微露、暈
 日似爲梅花護、嫩寒、茅屋臨流釣客過、晚煙
 淡淡罨青蘿、殼紋織得簾波細、看到斜陽近
 水多、敲詩獨自揜茅扉、荆樹花開香滿衣、庭
 艸不嫌春意淺、一雙蝴蝶上階飛、絳紗燈暖
 夜迢迢、水閣依前奏碧簾、略記年時停畫舫、
 衣香人影赤欄橋。

太閤記載、瀬川采女事蹟、奇矣、然未嘗聞有
 先賢修辭也、近時太田晴軒教跋于墨本云、

柳橋詩話卷之下

桑乾河畔の柳有り、朝來緑を分ちて江南に至る、風々雨々
 々年華を惜む、纔に微暄を覺れば嬾更に眠る、曉起は尙
 寒く宵は自ら暖に、佗の媿媿を誤て秋千を弄す、無言の
 桃李自ら蹊を成し、白々朱々放て已に齊し、落英の風裏
 に舞を挽住し、飛絮に隨て共に泥に沾はしめず、鄧尉香
 霏翠巒に滿つ、問ふ誰れか一枝を携取して看る、淡雲微
 に露す、暈々の日、梅花の爲めに嫩寒を護るに似たり、茅
 屋流に臨み釣客過ぎる、晚煙淡々青蘿を纏ふ、殼紋織り
 得たり簾波の細を、看到る斜陽水に近きて多し、詩を敲
 き獨自ら茅扉を揜ふ、荆樹花開き香衣に滿つ、庭艸嫌は
 ず春意の淺きを、一雙の蝴蝶階に上りて飛ぶ、絳紗燈暖
 にして夜迢々、水閣前に依て碧簾を奏す、略ぼ記す年時
 畫舫を停む、衣香人影赤欄橋。

太閤記に載す瀬川采女の事蹟、奇なり、然れども未だ嘗
 て先賢の修辭あるを聞かず、近時太田晴軒教墨本に跋し
 て云ふ、文祿元年龍造寺麾下の兵士瀬川采女、朝鮮の役

文祿元年、龍造寺磨下兵士瀬川采女從朝
 鮮之役、深入異壤、音問隔絶、其妻某氏、輒作
 此函、囑商舶以遞達焉、中途颶風、舟幾覆、不
 唯貨物烏有此函併淪于洪波之中矣、後會
 有拾獲者、以聞于豐太閤、太閤覽之、悽然遂
 免采女之役、還之本國云、嗟乎幽閨之婦女、
 一發伯兮之歎、言有出于丹衷者、猶足以動
 天地、感鬼神、如此、況忠臣孝子、至誠惻怛之
 言、萬世不容泯滅者乎、瀧岡之表、脫於風濤、
 鐵函之史出于智井、蓋理之必然、無足怪也、
 李穆堂曰、能拾人造文殘篇、而代存之者、其
 功德正與哺棄兒、葬枯骨、同旨哉、言也、刻工
 霞年祕藏此函久矣、而世無有知者、恐其味
 沒而不傳也、遂以公同嗜、剖荆山之璞、發潛

に從ひ、深く異壤に入り、音問隔絶す、其妻某氏、輒ち此函
 を作り、商舶に囑し以て遞達す、中途颶風にて、舟幾んど
 覆らんとす、唯貨物の烏有のみならず、此の函も併せて
 洪波の中に淪む、後會、拾ひ獲し者有り、以て豐太閤に聞
 す、太閤之を覽、悽然として遂に采女の役を免し、之を本
 國に還すと云ふ、嗟乎幽閨の婦女、一たび伯兮の歎を發
 す、丹衷より出る者有り、猶ほ以て天地を動し、鬼神を
 感ぜしむるに足る、此の如し、況や忠臣孝子、至誠惻怛の
 言、萬世泯滅すべからざる者をや、瀧岡の表、風濤を脱し、
 鐵函の史智井より出づ、蓋理の必然、怪むに足る無し、李
 穆堂曰く、能く人の遺文殘篇を拾ひ、而して代りて之を
 存する者、其功德正に棄兒に哺し、枯骨を葬むると同じ
 と、旨あるかな言や、刻工霞年此函を祕藏する久し、而も
 世に知る者有る無し、其の味沒して傳らざるを恐る、遂
 に以て同嗜を公にす、荆山の璞を剖ち、潛德の光を發す、
 其の功德大なり、予知る、日後の報を獲る、必然疑ひ無き
 なり、因て跋す。

德之光、其功德大矣、予知日後之獲報、必然無疑也、因跋。

唐邊將張陵防戎十餘年、其妻侯氏、繡回文、作龜形、詣闕進之、帝覽詩、放陵還鄉、賜綉三百疋、以彰才美、詩云、陵雖恰是千秋強、對鏡那堪重理粧、聞雁幾回修尺素、見霜先爲製衣裳、閉箱疊練時垂淚、拂杵調礮更斷腸、繡作龜形獻天子、願教征客早歸鄉、蓋其事略、與采女相類、詳見名媛詩歸。

評者謂、米元章書家之申韓也、卷菱湖先生視米法、士直不翹、唯申韓之言、頗庶幾焉、是以一世能書之流、無一當其意者、若其人與先生邂逅、乃精神沮喪、殆如小巫之大巫云、或曰、昔者懷素、張旭之徒、巧狂草、平生假

唐の邊將張陵防戎十餘年、其妻侯氏、回文を繡して龜形を作り、闕に詣り之を進む、帝詩を覽て、陵を放ち郷に還らしむ、綉三百疋を賜ひ、以て才美を彰す、詩に云ふ、陵雖恰も是れ千秋強、鏡に對して那ぞ堪へん重ねて粧を理するに、雁を聞て幾回か尺素を修め、霜を見て先づ爲に衣裳を制す、箱を開き練を疊て時に涙を垂る、杵を拂ひ礮を調て更に腸を斷つ、繡して龜形を作りて天子に獻す、願くは征客をして早く郷に歸らしめんことを、蓋其事略、采女と相ひ類す、詳に名媛詩歸に見ゆ。

評者謂ふ、米元章は、書家の申韓なり、卷菱湖先生、米法を視て、士直も翹ならず、唯申韓の言は、頗る庶幾し、是を以て一世能書の流、一も其意に當る者無し、若し其の人と先生と邂逅せば、乃ち精神沮喪し、殆ど小巫の大巫を見るが如けんと云ふ、或ひこ曰く、昔、懷素、張旭の徒、狂草に巧みなり、平生、酒徳を假り、以て其の飄逸の氣を佐く、生の端楷、歐虞と相ひ上下す、而して被酒顛狂、亦懷張二

酒德以佐其飄逸之氣、先生端楷、與歐虞相上下、而被酒顛狂、亦出懷張二家之上焉、宜其曠一世、眼底無人、而近體詩亦頗自負、所謂菱湖有餘翠也、其擬友人登富士山作云、高峻誰將丈尺論、雲梯萬里似升天、十秋積雪凝如玉、六月驚颼冷透綿、仰視蟾珠分斗漢、俯臨溝壑認山川、神奇最是難猜處、絕頂源源有涌泉。

陳元贊富士五古云、直豎巨靈指、笑粲膝六齒、可謂佳矣、落句云、貧乃士之常、富亦何足喜、惜哉、龍頭蛇尾。

義楚六帖云、日本王城、東北千餘里、有山名富士、或云、是蓬萊也、高峻無際、三面臨海、山頂常有烟突起焉、按此言、與釋子西京之和

家の上に出づ、宜なり其の一世を曠ふして、眼底人無きや、而して近體詩亦頗自負す、謂はゆる、菱湖餘翠有るなり、其の友人が富士山に登る作に擬するに云ふ、高峻誰か丈尺を將て論ぜん、雲梯萬里天に升るに似たり、千秋の積雪凝て玉の如く、六月驚颼冷綿に透る、仰ぎ視る蟾珠斗漢を分かつ、俯して溝壑に臨み山川を認む、神奇最も是れ猜し難き處、絶頂源々涌泉有り。

陳元贊富士の五古に云ふ、直豎す巨靈の指、笑は粲なり膝六の齒、と、佳と謂ふ可し、落句に云ふ、貧は乃ち士の常、富亦何ぞ喜ぶに足らん、と惜いかな、龍頭蛇尾なり。

義楚六帖に云ふ、日本王城東北千餘里、山有り富士と名づく、或は云ふ、是れ蓬萊なりと、高峻際無く、三面海に臨み、山頂常に烟有りて突起すと、按ずるに此言、釋子西京の和歌と、殆ど符を合するが如し、亦奇なり、而るに陳元

歌、始如合符、亦奇矣、而陳元贊題富士山序云、富士山當倭國之中、巍峩雄偉、孤拔萬仞、杳嶂迴巒、森護環拱、如立如坐、隱現出沒、蟠據三州、跨衍數郡、東扼首根、爲武關之屏翰、蓋日域之岱岳也、其巔積雪、盛夏不消、四時雲氣繚繞、旦暮霞彩變幻、若有仙靈棲息、故土人呼爲蓬萊瑤島、其四頂如池、名天池、池有七小嶼、名七星嶼、巔有入穴、名仙洞、每天欲大風、則先從池穴中、噉號而出、亦神奇矣、云云、白石記云、嶽北諸洞、土人呼曰入穴。

白石新井先生富嶽記云、凡其欲降、則箕踞於積沙岸上、尻以爲輿、脚以爲輪、車轉而下、瞬息之間、身既在乎林麓矣、蓋萬仞之山、隨崩沙之勢、頃刻直下、即富士之一奇也、白石

御橋時話卷之下

富士山に題すス序に云ふ、富士山は倭國の中に當り、巍峩雄偉、孤拔萬仞、杳嶂迴巒、森護環拱、立つが如く坐するが如く、隱現出沒、三州に蟠據し、數郡に跨衍し、東は首根を扼し、武關の屏翰と爲る、蓋日域の岱岳なり、其の巔の積雪は、盛夏にも消えず、四時雲氣繚繞し、旦暮霞彩變幻す、仙靈有り棲息するが若し、故に土人呼んで蓬萊瑤島と爲す、其の四頂は池の如し、天池と名づく、池に七小嶼有り、七星嶼と名づく、巔に入穴有り、仙洞と名づく、天大風せんと欲する毎に、則ち先づ池穴中より、噉號して出づ、亦神奇なり、云云、白石の記に云ふ、嶽北諸洞、土人呼んで入穴と曰ふ。

白石新井先生の富嶽記に云ふ、凡そ其の降らんと欲するときは、則ち積沙岸上に箕踞し、尻以て輿と爲し、脚以て輪と爲し、車轉して下る、瞬息の間に、身は既に林麓に在り、蓋萬仞の山、崩沙の勢に隨ひ、頃刻直下す、即富士の一奇なりと、白石先生僅々數十字、其情狀を摸寫す、妙筆と

九五

先生僅僅數十字、摸寫其情狀、可謂妙筆矣。土人云、積沙之下者、夜復上、故處、義楚六帖云、凡諸寶、白畫在山下、暮則歸山上、亦訛傳崩沙之事已。白石先生撰高子觀臥遊記、奇蹟記、亦在其中矣。

明永樂四年封本邦之山爲壽安鎮國之山、即肥後阿蘇山也、東匠秉燭談、備載其說焉、近人詠富士云、萬仞唯君撰如雪、笑看封冊至阿蘇。

昔者、長崎詩人高彝、重賂商舶、投詩卷於沈德潛、乞求製序、德潛不許、商人計窮、遂使、玄磨代大匠、凡德潛以下一時名士數人、王鳴鶴、錢大昕、趙文哲、王昶、來殷、錢氏、黃文蓮等、凡六人。假託齋來、大抵七古大作也、細讀之、虛譽溢美、斬侮可憎、然高彝不悟、奉爲拱璧、燕石之誚、人口藉藉、其事備見

謂ふ可し、土人云ふ、積沙の下る者、夜復故處に上ると、義楚六帖に云ふ、凡そ諸寶、白畫山下に在り、暮には則ち山上に歸ると、亦崩沙の事を訛傳するのみ。白石先生、高子觀撰、亦其中にあり。感遊記を撰す、富

明の永樂四年、本邦の山を封じ、壽安鎮國の山と爲す、即ち肥後の阿蘇山なり、東匠の秉燭談に、備に其の説を載す、近人富士を詠じて云ふ、萬仞唯君操雪の如し、笑つて看る封冊の阿蘇に至るを」と。

昔者、長崎の詩人高彝、重く商舶に賂ひ、詩卷を沈德潛に投じ、乞て製序を求む、德潛許さず、商人計窮り、遂に玄磨に大匠に代らしむ、凡そ德潛以下一時の名士數人、王鳴鶴、錢大昕、趙文哲、王昶、來殷、錢氏、黃文蓮等、凡六人。假託して齋し來る、大抵七古の大作なり、細に之を讀めば、虛譽溢美なり、斬侮憎む可し、然れども高彝悟らず、奉じて拱璧と爲す、燕石の誚、人口に藉々たり、其の事備に原溥夫の詩學新論に見ゆ、或ひと曰く、東里の魚鼎譚に泣く、何ぞ獨り彝を咎めん、且つ近時

原温夫詩學新論、或曰、東里之魚、泣于鼎鑊、何獨咎于彝、且近時清商所、齎來諸貨、何物非膺、不獨詩已、德潛記其事、七律落句云、恨望停雲我所師、噫、德潛以停雲自比、亦不敢犯夷虜二字、蓋禁省貴人鼻嗅、三斗醇酢處、

唯士七律、
蓋其餘集。

王述菴德起、春融堂集年譜載沈公歸愚所刻七子詩選、流傳日本、大學頭默真迦、見而嗜之、附書番舶、以上沈公、又每人寄憶一詩、寄先生云、新陰兩卷重、麻沙海雨江風入、齒牙洵有詩書歸、典則偶將烟月闕、芳華人如句、曲陶宏景詞、比新宮蔡少霞、我欲據梧同詠、曠滄溟、何處覓靈槎、梁星巖書道、此乃高彝之作、遂彼土之一證、所寄七律亦彝詩也、蓋

清商齋來する所の諸貨、何物か膺に非らん、獨り詩のみならず、德潛其の事を記す七律落句に云ふ、恨望す停雲は我師とする所と、噫、德潛停雲を以て自ら比す、亦敢て夷虜二字を犯さず、蓋、禁省貴人鼻に三斗の醇酢を喫する處なり。唯士七律其餘集に載す。

王述菴德起、春融堂集年譜に詳載す、沈公歸愚刻する所の七子詩選、日本に流傳す、大學頭、默真迦、見て之を嗜み、書を番舶に附し、以て沈公に上る、又人毎に一詩を寄憶す、先生に寄するに云ふ、新陰兩卷重、麻沙を重ね、海雨江風、齒牙に入る、洵に詩書の典則に歸する有り、偶も烟月を將て、芳は華を闕はず、人は句曲の陶宏景の如く、詞は比す、新宮の蔡少霞、我梧に據りて、同く詠嘯せんと欲す、滄溟何の處にか靈槎を覓めん、梁星巖書道、此れ乃ち高彝の作、彼土に達するの一證、寄する所の七律亦彝が詩なり、蓋、祭酒林公の大名、原より海外に播くこと久し、故に誤て以て其の人と爲すなり。

祭酒林公之大名原播海外久矣故誤以爲其人也。

芹田靜所語於予曰蒼茶山有言東都詩人以岡本華亭爲巨擘問華亭先生之作奈何旋錄數首見貽噫微靜所予殆無目者也峽猿圖云援落風悲巫峽夕蒼山夾水崖千尺烟暗蘿深叫何處老松倒挂半天石掩篷孤舟聽者誰鄉心萬里未歸客容淚滴盡猿聲斷十二峯頭秋月白又詩佛贈瀧水春長句言謝云勸人飲酒者五百世無手佛說如是誰不懼休言有酒旨且樂一杯薄酒業報然何況芳醇送幾斗詩佛老人已佛身何將此味與人誘一切衆生斷智根敗家亡國禍由酒爲救迷情說方便救迷情目佛是衆生慈

接、來設
用、百設
生、之語、
此、世字、
此、世字、

芹田靜所予に語りて曰く蒼茶山言へる有り東都の詩人は岡本華亭を以て巨擘と爲すと問ふ華亭先生の作は奈何んと旋ち數首を録し貽らる噫微靜所徵せは予は殆ど目き者なり峽猿の圖に云ふ援落風は悲む巫峽の夕蒼山水を夾む崖千尺烟暗く蘿深く叫ぶ何の處ぞ老松倒に挂る半天の石筵を掩ふ孤舟に聽く者は誰ぞ郷心萬里未歸の客容淚滴り盡して猿聲斷え十二峯頭秋月白しと又詩佛瀧水春を贈らる長句もて謝を言ふに云人に酒を飲むを勸る者は五百世手無しと佛説是の如し誰か懼らざらん言ふを休よ酒有り旨く且つ樂し一杯の薄酒業に報然り何ぞ況や芳醇幾斗を送るをや詩佛老人已に佛身何ぞ此味を將て人に與へて誘ん一切衆生智根を斷じ家を敗り國を亡す禍は酒に由る迷情を救はんが爲めに方便を説く迷情を救ふ、迷情の偏に見へたり佛は是れ衆生の慈父也詩佛の方便は何の説か有る詩を釣るの釣愁を持ふの荷愁無く詩有り吾事足る無量の清福卮を擧げて受く瀑水傾瀉し大に快と呼ぶ笑ふ佗の

父母詩佛方便有何說、釣詩之釣、掃愁帚、無愁有詩吾事足、無量清福舉、扈受瀑水傾瀉、大呼快笑、佗斗酒謀諸婦、無勞沽去錢掛杖、不用渡來巾脫首、李白風流人坐花、陶潛與趣春生柳、醉吟直到極樂界、醜顏即是黃面、覓君餓我受大功德、我勸人飲亦何咎、五百生事一任佗、縱然無手寧無口、能飲能吐、驚人語、百千萬劫我不朽、不朽與朽亦任佗、何問他生有口否、且醉且吟且安眠、忘卻生前與身後、唯願未來五百生、生生相歡詩酒友、王莽篡奪之時、所鑄長宜子孫之鑑、藏于福田氏、舊矣銘文古字假借者、昔時竹菴已考其證、剝蝕不可辨者、近日不肖偶有得於楊升菴、亦悉辨之、是以二十八字之銘、可得而

御橋詩話卷之下

斗酒諾を婦に謀ると、勞する無して沽ひ去り錢は杖に掛かる、用ひず渡し來りて巾、首を脱するを李白の風流、人に花に坐し、陶潛の興趣、春、柳に生ず、醉吟直に到る極樂界、醜顏即ち是れ黃面、君餓り我れ受く大功德、我れ勸めて人飲む亦何ぞ咎めん、五百生の事佗に一任す、縱然手無き、か寧ぞ口無なからん、能く飲み能く人を驚かす語を吐かば、百千萬劫我れ朽ちず、朽ちざると朽つると亦佗に任かす、何ぞ問はん他生口有りや否や、且つ醉ひ且つ吟じ且つ安眠し、卻卻す生前と身後と、唯願ふ未來五百生、生々相歡し詩酒の友たらんと。

王莽篡奪の時に鑄し所の長宜子孫の鑑、福田氏に藏せらるるに舊し銘文の古字の假借なる者、昔時竹菴已に其の證を考ふ、剝蝕辨す可らざる者、近日不肖偶々楊升菴に得る有り、亦悉く之を辨す、是を以て二十八字の銘、得て全く讀む可し、梁星巖古を嗜むの癖有り、爲めに長歌

全讀矣、梁星巖有嗜古之癖、所以不憚爲我長歌之勞、其詞云、雕奩寒生銅一片、青綠斑駁古氣森、有似月逢妖墓厄、光華銷盡魄深沈、徑五寸強重百廿五錢、二十八字銘在陰、乃是新莽之所造、不知何由傳至今、將毋天誅大姦畢、故留其器爲世箴、豈特摩挲養古心、憶昔炎德中微金甌削、王家權熾真炙手、五大司馬九諸侯、諸父昆弟耀章綬、莽也孤貧如儒生、恭儉力行事慈母、一朝博得沙鹿脊、縱弄銜衡運羣有、鷓目豺聲何威詐、大漢神鼎輕瓦缶、祖龍法皆從我始、燔書坑儒復何咎、莽也則不然、六經不離口、影借黃虞自欺罔、宜哉顛覆險桀紂、雖云三萬六千歲數多、非命之運豈能久、君不見內廷日按紫閣

を裁するの勞を憚らざる所なり、其詞に云、雕奩寒は生す銅一片、青綠斑駁古氣森たり、月の妖墓の厄に逢ふに似たる有り、光華銷え盡て魄深く沈む、徑五寸強重さ百廿五錢、二十八字銘陰に在り、乃ち是れ新莽の造りし所、知らず何に由てか傳へて今に至る、將た天大姦を誅し畢り、故らに其の器を留めて世箴と爲す、母らんや、豈特に摩挲して古心を養ふのみならんや、憶昔炎德中微金甌削れ、王家權熾眞に手を炙き、五大司馬九諸侯、諸父昆弟章綬を耀かす、莽や孤貧儒生の如し、恭儉力行慈母に事へ、一朝博し得たり沙鹿の脊、銜衡を竊弄し羣有を運し、鷓目豺聲何ぞ威詐、大漢の神鼎瓦缶より軽く、祖龍法皆我より始む、書を燔き儒を坑す復た何ぞ咎めん、莽や則ち然らず、六經口を離さず、黃虞を影借して自ら欺罔す、宜なるかな顛覆桀紂より險に、三萬六千歲數多しと云ふと雖、非命の運豈能く久からんや、君見すや内廷日に按ず紫閣の圖、五石銅を範し斗極に象る、是の時列塞人馬驚れ、乃ち上帝汝を罪するの先驅なる母らんや、目前金匱置て問はず、枉て寶鏡を鑄て石符に配す、吁嗟山河破碎、支體尙且ほ保つ能はず、子孫長瓦何をか爲んや、乾坤を再造せんに誰某を待たん、白水真人洪爐を出す、

圖、籠五石銅象斗櫃、是時列寒人馬、斃母乃上帝罪、汝之先驅、目前金鑿置不問、枉鑄寶鏡、配石符、吁嗟山河破碎、支體尙且不能保、子孫長宜何爲乎、再造乾坤待誰某、白水真人出、洪爐竹坪、夔詩距躍三百、亦裁七古以申謝焉、結句云、先生一夕捻吟鬢、卻勝古人十年功、蓋潘緯十年賦古鏡、見東谷贅言。

梁星巖夜聞落葉云、綠綠羅緒對殘缸、策策俄來落耳雙、幾度衝霜移宿鳥、孤村吠月有驚龍、五更聲亂離門鼓、一陣寒敲野寺窓、拈起秋風吹渭句、教人漫憶賈長江、又戲題插花瓶云、一雙每倒沙頭玉、百尺長沈井底銀、何物窳瓶能大膽、欲涵三萬六千春。

清人王岡齡山塘燈船行云、黃頭之郎蝸角

と、竹坪詩を獲て距躍三百、亦七古を裁し以て申謝す、結句に云ふ、先生一夕吟鬢を捻り、卻て勝る古人十年の功とぞ、潘緯十年古鏡を賦せしこと、東谷贅言に見ゆ。

梁星巖、夜落葉を聞くに云ふ、緑々羅緒殘缸に對し、策々俄に來て耳雙に落つ、幾度か霜を衝いて宿鳥を移し、孤村月に吠る驚龍有り、五更聲は亂る離門の鼓、一陣寒に敲く野寺の窓、秋風渭を吹くの句を拈起し、人をして漫に賈長江を憶はしむ、又戲に插花瓶に題するに云ふ、一雙毎に倒る沙頭の玉、百尺長へに沈む井底の銀、何物の窳瓶か能く大膽、涵さんと欲す三萬六千春と。

清人王岡齡の山塘燈船行云、黃頭の郎蝸角の妓と、

妓、予居柳橋近側、每到夏時、所謂蝸角作群爲隊、紅裙飄搖、髻履鏗然、午前必赴浴堂、是時卯酒未醒、雲鬢撩亂、洛水神女、不問而可知也、午後、乃盛飾四散、娼樓酒館、戲園舟舫、尋盟蹈約、莫所不至、迨冬稍衰、蓋以烟火止、遊客少、而舟舫之嬉廢也、余戲曰、蚌蛤之大、猶隨月消長、矧蝸角乎。

一耆宿嘗曰、新瓦一篇、中根東里所撰、其中載橋町町聲妓之事、是以戒其女兒云、東里始及物徂徠室鳩巢之門、則距今殆百年、蓋是時聲妓總住橋町、他處莫有、先輩詩云、誰測風流手談外、人間別有橋中仙、即是也、今乃各處街坊、莫不雜居、橋町寥寥踪跡殆絕、噫、弦索淫蛙之場、亦不無滄碧之嘆。

予が居は柳橋の近側なれば、夏時に到る毎に、謂はゆる蝸角群を作し隊を爲し、紅裙飄搖、髻履鏗然、午前必浴堂に赴く、是時卯酒未だ醒めず、雲鬢撩亂、洛水の神女たるは問はずして知る可し、午後乃ち盛飾四散、娼樓酒館、戲園舟舫、盟を尋ね約を蹈み、至らざる所莫し、冬に迨べば稍衰ふ、蓋烟火止み、遊客少くして、舟舫の嬉み廢るるを以てなり、余戲て曰く、蚌蛤の大も、猶月に隨て消長す、矧や蝸角をや。

一耆宿嘗て曰く、新瓦一篇は、中根東里の撰する所なり、其の中に橋町町聲妓の事を載す、是を擧げ以て其女兒を戒むと云ふ、東里は始め物徂徠、室鳩巢の門に及ぶ、則ち今を距る殆ど百年、蓋是の時の聲妓は總て橋町に住し、他處には有る莫し、先輩の詩に云ふ、誰か測らん風流手談の外、人間別に橋中の仙有んとは、と即ち是れなり、今は乃ち各處の街坊に、雜居せざるは莫し、橋町は寥として、踪跡殆ど絶ゆ、噫、弦索淫蛙の場亦滄碧の嘆無くんばあらざるなり。

也。

下野佐野天明郷菅神廟碑文、乃係東里先生之所撰、昔者錦城師翁屢稱之、以爲大手筆也。

予嘗讀柳灣漁唱、又閱林園月令、頃於靜齋詩屏上、亦獲先生夜聞漁歌之七古、分韻然得者然則先生雖無半面、因緣亦不淺、其詞云、漁歌夜發浦岸、輕柁鳴榔、逐節敲、靜聽滄浪、千古曲、不倚金石、與絲匏、縱調逸韻、兩三唱、風水相和響、咬咬、今夜秋江泊舟客、愁眠耿耿、難交、起推篷窗、凭絃坐、落月半彎、挂柳梢、高標唐詩正聲七言絕句下、引謝疊山之注解、寥寥數言、感慨古今、乃知疊山之有寄託、然未知更有別本公行也、一日獲疊翁唐絕

下野佐野天明郷の菅神廟の碑文は、乃ち東里先生の撰する所に係る、昔者錦城師翁屢之を稱し、以て大手筆と爲せるなり。

予嘗て柳灣漁唱を讀み、又林園月令を閱す、頃、齋の詩屏上に於て、亦先生の夜、漁歌を聞くの七古を獲たり、分韻者を得たり然ば則ち先生半面無しと雖、因緣亦淺からず、其の詞に云ふ、漁歌夜發す浦岸の坳、輕柁鳴榔節を逐ふて、敲く、靜に聽く滄浪千古の曲、金石と絲匏とに倚らず、縱調逸韻兩三唱、風水相和し響咬々、今夜秋江舟を泊する客、愁眠耿耿、難交へ難し、起て篷窓を推し、絃に凭て坐せば、落月半彎、柳梢に挂かる」と。

高標の唐詩正聲七言絕句の下に、謝疊山の注解を引く、寥寥數言、古今を感慨す、乃ち疊山の寄託有るを知る、然れども未だ、更に別本の公行する有るを知らず、一日、疊翁の唐絕句注解を、海保漁村に獲なり、唯に眞珠船のみ

句注解於海保漁村、不唯真珠船、而漁村之考證、頗爲詳備、亦詩家刮膜之金篋也、文長不錄、當於嗣編摘錄。

楊漣絕命詞云、一笑、一笑、又一笑、刀斫東風、於我何有哉、無學和尚諱元、字子元、無學、其號也、歸化住鎌倉建長二刹爲元兵所逼、說偈曰、乾坤無地、卓孤筇、喜得入空、法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風、則知名臣烈士、與悟道之人、固莫有二致也。

馬文淵之蕙苴、李長源之糖猊、爲人臣炳戒、況開國元勳、伐國拓境、何曾不致意于此乎、胡元丞相伯顔、度梅嶺云、馬首徑從庾嶺、歸王師至處、悉平夷、擔頭不帶江南物、只插梅花一兩枝、讀者嘉獎其風流灑脫、不蹈嫌疑

ならず、而して漁村の考證は、頗る詳備たり、亦詩家膜を刮するの金篋なり、文長ければ録せず、當に嗣編に於て摘録すべし。

楊漣絶命の詞に云ふ、一笑、一笑、又一笑、刀、東風を斫る、我に於て何か有んやと、無學和尚諱は元、字は子元、無學はの建長四刹の、其の號なり、歸化して鎌倉二刹に住す。元兵に逼まれ、偈を説て曰く、乾坤孤筇を卓つるに地無く、喜ぶ人空を得て法亦空しきを、珍重す大元三尺の劍、電光影裏に春風を斬ると、則ち知る名臣烈士、悟道の人と、固より二致有る莫きなり。

馬文淵の蕙苴、李長源の糖猊、人臣の炳戒たり、況や開國の元勳、國を伐ち境を拓く、何ぞ曾て意を此に致さざらんや、胡元の丞相伯顔、梅嶺を度るに云ふ、馬首徑に庾嶺より歸る、王師至る處悉く平夷、擔頭帯びず江南の物、只挿む梅花一兩枝と、讀者其の風流灑脫、嫌疑の禍機を蹈まざるを嘉獎す。

之禍機矣。

甲越兩雄相角之時、較其兵士之衆寡、則上杉氏不及武田氏、遠甚、而二公之英靈、今傳于韻語之間者、亦與之相類、豈不奇乎、機山之詩、世所傳、殆十餘首、而越將之詩、唯一首耳、越將之詩、冷峭可喜、而機山之詩、株守法度、故川中島之役、機山敗、而不全敗、越將勝、而不全勝、於詩亦然矣。

大田雄飛大醉歌云、文命胼胝賜玄圭、何如一飲三百盃、周公神功虎豹走、何如月下舉新醪、春秋褒貶三百年、何如花邊倒金盃、治亂循環付皇天、聯躡偏招麴秀才、伯夷盜跖一亡羊、悲歡百年骨生苔、願變東海成美酒、乘以太白到蓬萊、李公勿慕太倉鼠、欲牽黃

甲越兩雄相角の時、其の兵士の衆寡を較すれば、則ち上杉氏は武田氏に及ばざること遠き甚し、而も二公の英靈、今韻語の間に傳ふる者、亦之れと相類す、豈奇ならずや、機山の詩、世に傳ふる所、殆と十餘首、而して越將の詩は、唯一首のみ、越將の詩は、冷峭喜ぶ可く、而して機山の詩は、法度を株守す、故に川中島の役、機山敗る、而れども全敗せず、越將勝つ、而も全勝せず、詩に於て亦も然り。

大田雄飛、大醉歌に云ふ、文命胼胝玄圭を賜ふ、何如んぞ一飲三百盃、周公神功虎豹走る、何如んぞ月下に新醪を舉げん、春秋褒貶三百年、何如んぞ花邊に金盃を倒さん、治亂循環皇天に付す、聯躡偏に招く麴秀才、伯夷盜跖一亡羊、悲歡百年骨を生ず、願くは東海を變じて美酒と成し、乘るるに太白を以てして蓬萊に到らん、李公慕ふ勿れ太倉の鼠、黃犬を牽かんと欲するも何ぞ得んや、陸子嘆するを休めよ、華亭の鶴、顯官元無妄の災有り、名出我

犬何得哉陸子休嘆華亭鶴顯官元有無妄
災名山爲我身後冢百年事業付大塊江上
風月不用錢名花豈爲求良媒一醉典卻千
金裘釀酒不嫌家賸額崑崙巖繞三萬里愁
與黃河衰衰來試來盡此一觴酒意氣忽如
上春臺嗟雄飛年甫二十五而卒玉樓之召
千古同嘆

大田金剛踪跡不定忽而客遊數月忽而在
孺人膝下慣見爲常恬不爲怪一日叩戶乃
謂曰上毛之富豪遣伴延之明日且赴故來
辭問近製立援筆錄一首而去未幾計音至
矣今讀其詩氣象慘怛不類平生俊快豈豫
兆不祥歟山村云寥落山邨聊寄生幽吟又
作不平鳴可憐遙夜歸家夢常向故園熟處

か身後の冢たり百年の事業大塊に付す江上の風月は
錢を用ひず名花豈爲に良媒を求めんや一醉典卻す千
金の裘酒を釀し嫌はず家賸額崑崙巖繞三萬里愁は黃
河と衰々として來る試に來り此一觴の酒を盡せ意氣
忽ち春臺に上るが如けんと嗟雄飛年甫めて二十五に
して卒す玉樓の召し千古同嘆なり。

大田金剛踪跡定らず忽にして客遊數月忽にして孺人
の膝下に在り慣れ見て常と爲し恬として怪むを爲さ
ず一日戸を叩き乃ち謂て曰く上毛の富豪伴を遣して
之を延けり明日且に赴かんとす故に來り辭すと近製
を問へば立るに筆を援り一首を錄して去れり未だ幾
ならずして計音至る今其の詩を讀むに氣象慘怛平生
の俊快到期せず豈んと豫め不祥を兆するか山村に云
ふ寥落たる山邨に聊か生を寄す幽吟又不平の鳴を作
す憐む可し遙夜家に歸る夢常に故園熟處に向て行く
と何等の懷婉ぞ。

行、何等悽惋。

大田晴軒客遊在參州吉田、惜哉、富贍之學、奇偉之才、何不開業都下、而甘作汗漫之遊、豈性之所適歟、其於韻語、固非所長、然讀者擊節、則其自負者可知矣、食貧云、年來對案發長吁、不特無魚菜、亦無銀鱗、玉膾酒如海、臥看朱門夜宴圖、睡起聞鶯云、未到華胥夢、忽驚滿簾花影夕、陽明、綠楊紅杏渾無語、鼓吹春光只此聲。

近世偉人以醫師保己一校檢爲巨擘焉、所著群書類從六百三十五冊、所收一千二百七十三部、可謂大典策矣、昔者南畝先生太田贈之云、區區螢雪君無用、默記汗牛充棟書、蓋紀實也、在素封之流、而或屹屹攻經、或考据精到、或

大田晴軒客遊して參州吉田に在り、惜いかな、富贍の學、奇偉の才、何ぞ業を都下に開かざらずして甘んじて汗漫の遊を作す、豈んど性の適する所か、其韻語に於ける、固より長ずる所に非ず、然れども讀者節を撃つ、則ち其の自負するを知る可し、食貧きに云ふ、年來案に對して長吁を發す、特に魚無きのみならず、菜も亦無し、銀鱗玉膾酒、海の如し、臥して看る朱門夜宴の圖と、睡起鶯を聞くに云ふ、未だ華胥に到らずして夢忽ち驚く、滿簾の花影夕陽明なり、綠楊紅杏渾べて語無し、春光を鼓吹するは只此聲と。

近世の偉人は、醫師保己一校檢を以て巨擘と爲す、著す所の群書類從六百三十五冊、收むる所一千二百七十三部、大典策と謂ふ可し、昔し南畝先生太田之に贈て云ふ、區々たる螢雪君用ふる無し、默記す汗牛充棟の書と、蓋實を紀するなり。

素封の流に在りて、或は屹々として經を攻め、或は考据

博雅好古、一時之名家、傾蓋相交、不亦闕聞之麟鳳乎、近世都下、獲三人焉、市野屋三治、號迷菴、是其一、津輕屋三衛、號掖齋、是其二、鍵屋半兵、號醒齋、是其三也、掖齋著和名鈔箋注十卷、本朝度量權衡考三卷、二附錄 六册、一若干卷、迷菴醒齋之著述、當復他日搜案記之也。

三十年前曾聞有葺工匠師者、通稱某、其人好閉戶讀書、博覽莫所不通、藝林之士、往往有資益焉、然片言隻字、莫有傳者、惜夫、伊川先生獲易說於一籬匠、豈虛談哉、或云、其著述、烏有於近時都下之火厄。

一日過書肆玉巖堂、語次偶及葺工宗師、肆主曰、其人猶無恙、齡喩七、望八、髮鏘不

精到、或曰博雅好古、一時之名家、蓋を傾け相ひ交る、亦闕聞の麟鳳ならざらんや、近世都下、三人を獲たり、市野屋三治、迷菴と號す、是、其の一、津輕屋三衛、掖齋と號す、是れ其の二、鍵屋半兵、醒齋と號す、是れ其の三なり、掖齋、和名鈔箋注十卷、本朝度量權衡考三卷、二附錄 六册、一若干卷を著す、迷菴醒齋の著述、當に復た他日搜案して之を記すべし。

三十年前曾て聞けり葺工の匠師なる者あり、通稱某、其の人好んで戸を閉ぢ書を讀み、博覽、遜ぜざる所莫し、藝林の士、往々資益する有り、然れども片々隻字、傳ふる者有る莫し、惜いかな、伊川先生易說を一籬匠に獲たりと、豈虛談ならんや、或人云ふ、其の著述、近時都下の火厄に烏有すと。

一日書肆玉巖堂に過ぎり、語次偶、葺工宗師に及ぶ、肆主曰、其人猶恙なし、齒七を踰え八を望む、髮鏘、讀書を讀せず、姓は北名は慎言、字は有和、梅園と號す、又壽庵

廢讀書、姓北、名慎言、字有和、號梅園、又稱
 靜廬、著書凡十五種、如五雜俎、訓纂、十六
 卷、梅園日記四卷、近將付梓以問世焉、予
 聞而爽然自失、□急援筆以救原本之踈
 謬已。

嘗今之時、避世於金馬門、荻野梅塢、豈其人
 邪、名長字子善、一字元亮、梅塢其號、或又號
 蛇山、蓋取於地名云、其人精於瞿曇氏之典
 矣、嗟近世釋子益衰、其所企望、不過施紫衣
 住、大剝盛、徒隸炫燿一時已、能不愧于梅塢
 者、鮮矣。

梅塢有詩云、虛靈廓落真如海、幻出乃翁
 自在身、煙塢殘花雨塘月、襟中妙境孰清

新

御備神話卷之下

と稱す、書を著す、凡そ十五種、五雜俎、訓纂、十六卷、梅園
 日記四卷の如き、近く將に梓に付し以て世に問はんと
 すと、予聞て爽然自失せり、□急に筆を授り、以て原
 本の踈謬を救ふのみ。

今の時に當り、世を金馬門に避るは、荻野梅塢豈んど其
 人なるか、名は長、字は子善、一の字は元亮、梅塢は其號、或
 は又蛇山と號す、蓋地名に取ると云ふ、其人瞿曇氏の典
 に精し、嗟、近世釋子益衰ふ、其企望する所は、紫衣を拖
 き大利に住し、徒隸を盛にし、一時に炫燿するに過ぎざ
 るのみ、能く梅塢に愧ぢざる者は鮮し。

梅塢詩あり、云ふ、虚靈廓落真如海、幻出す乃翁自在の
 身、煙塢の殘花雨塘の月、襟中の妙境孰か清新と。

山田小霞嘗道曰、儒曰佛曰管晏曰老莊、咸居百家九流之一焉、比諸撥亂反正之功、乃么麼不足數、若夫垂名于一藝一道、豈謂大丈夫邪、是梅塲先生之持論也、予曰、是二十年前之梅塲、而非今之梅塲也、小霞又曰、梅塲先生始受儒術于栗山先生、問蠻夷學于前野良次、漢醫則今井松菴、洋醫則宇田川元瑞、其所師資也、予笑曰、足下之言、豈不亦癡人汲聖塘乎、以予觀之、梅塲子即今之張無盡也、

中江藤樹先生文集一卷、頃者得之、不知先生之文止于是邪、將復有別本邪、今舉其寄友一首、以寓平生仰止之懷、云、產業隨時不須擇、伊耕莘野、呂漁翁、當時不有殷周遇、依

山田小霞嘗て道ふ、曰く儒、曰く佛、曰く管晏、曰く老莊、咸な百家九流の一に居る諸を撥亂反正の功に比すれば、乃ち么麼數ふるに足らず、若し夫れ名を一藝一道に垂るは、豈大丈夫と謂はんや、是れ梅塲先生の持論なり、予曰く、是れ二十年前の梅塲にして、今の梅塲に非るなりと、小霞又曰く、梅塲先生始め儒術を栗山先生に受け、蠻夷の學を前野良次に問ひ、漢醫は則ち今井松菴、洋醫は則ち宇田川元瑞、其師資する所なりと、予笑て曰く、足下の言、豈亦癡人の聖塘に汲むならずや、予を以て之を觀れば、梅塲子は即ち今の張無盡なり、

中江藤樹先生文集一卷、頃者之を得たり、知らず先生の文是に止るか、將た復た別本有るか、今其友に寄する一首を擧げ、以て平生仰止の懷を寓す、云ふ、產業時に隨て擇ぶを須ひず、伊は莘野に耕し、呂は漁翁、當時殷周の遇有らずんば、舊に依て釣磯歌賦の中と、

舊約磯映畝中。

大田喬松親摹宇士新先生眞蹟見視云、韓人所書清和院三字、題曰菱雪、蓋其人之別號也、爾雅云菱忘也、說文云、蓋令人忘、愛草也、引詩焉得薺草、或作葦、然則菱薺葦同是一字、而後世專用葦焉、謝惠連雪賦云、折園中之葦草、杜甫臘日云、侵凌雪色還葦草、菱雪之號、蓋取於此也、葦之草字、形與雪相似、豈厭其重、而用菱邪、菱之草字、其在偏傍、或省其畫、此既減畫、又略其半、故難讀耳、寬保辛酉八月字鼎謹考。

對州大夫杉村氏語予曰、藤樹先生之嗣子、笠仕本藩、秩貳百石、瓜瓞綿延、猶襲舊秩、其家所藏、先生遺照、近時郵致東都、乃爲請祭

大田喬松親ら宇士新先生の眞蹟を摹し視しさる、云ふ韓人書する所の清和院三字、題して菱雪と曰ふ、蓋其人の別號なり、爾雅に云ふ、菱は忘るゝ也、說文に云ふ、菱は人に菱を忘れ令る草なりと、詩、焉得薺草を得、或は葦に作ると引く、然らば則ち菱薺葦同く是れ一字而して後世専ら葦を用ふ、謝惠連雪の賦に云ふ、園中の葦草を折ると、杜甫臘日に云ふ、雪色を侵凌し葦草に還るゝと、菱雪の號、蓋此に取るなり、葦の草字は、形雪と相ひ似たり、豈んど其重を厭ひて、菱を用ふるか、菱の草字、其偏傍に在て、或は其畫を省く、此れ既に畫を減じ、又其半を略す、故に讀み難きのみ、寬保辛酉八月字鼎謹んで考ふ。

對州の大夫杉村氏予に語けて曰く、藤樹先生の嗣子、本藩に笠仕し、秩貳百石、瓜瓞綿延、猶ほ舊秩を襲ぐ、其家藏する所の、先生の遺照、近時東都に郵致し、乃爲めに祭酒林公の贊語を請ふ、予之れが紹介を爲し、遂に允許を蒙

酒林公之贊語焉、予爲之紹介、遂蒙允許、林公父子俱賜泚筆、可謂榮矣。

多紀柳沂先生春雪云、忍凍推窓看雪晴、不唯茅舍竹籬清、滿庭依約藤溪紙、月畫梅花影正橫、嗟先生春秋未滿五十、已捐館舍、惜夫、追憶春草堂中函丈每課詩、先生必先獲驪珠焉、恍然舊夢殆三十年矣。王維朝川有菜羹泚、全唐詩注云、沂嘗半切、莖與泚通。

山崎青圃法眼春暹云、梅未啓唇柳眉縮、鶯喉更懶報春來、大膽亮勉齋先生初夏云、粉蝶驚醒三月夢、黃鶯叫盡一場春、蓋斷圭碎玉、咸獲之扇頭。

樗園杉本法印寄河合氏云、經濟當今推此人、寸心憂國不憂貧、一朝硯北曾投筆、卅

る林公父子俱に泚筆を賜ふ、榮と謂ふ可し。

多紀柳沂先生春雪に云ふ、凍を忍び窓を推し雪晴を看る、唯に茅舍竹籬の清のみならず、滿庭依約藤溪の紙、月は梅花を畫きて影正に横はると、嗟、先生春秋未だ五十に滿たずして、已に館舍を捐つ、惜いかな、追憶す春草堂中函丈詩を課する毎に、先生必先づ驪珠を獲たり、恍然として舊夢殆ど三十年。王維朝川、菜羹泚有り、全唐詩注に云ふ、沂嘗半の切莖、泚と通す。

山崎青圃法眼の春暹に云ふ、梅未だ唇を啓かず、柳眉縮む、鶯喉更に春來を報するに懶し、と、大膽の亮勉齋先生初夏に云ふ、粉蝶驚き醒む三月の夢、黃鶯叫び盡す一場の春と、蓋、斷圭碎玉、咸な之を扇頭に獲たり。

樗園杉本法印、河合氏に寄贈するに云ふ、經濟當今此人を推す、寸心國を憂へて貧を憂へず、一朝硯北曾て筆を投じ、卅歲關東塵を厭はず、身は悴れて鬢邊毛に雪を雜

歲關東不厭塵、身悴鬢邊毛雜雪、民休境內
物皆春、依然仁壽山頭月、應照急流勇退身。

韓翃云、寒食東風御柳斜、一說讀御爲禁節
非也、盧綸云、御竹潛通筍、王昌齡曰、霜飛天
苑御梨秋、王建云、御菓呈來每度嘗、李適之、
御桃舞蝶飛行飄、劉憲云、御酒新寒退、王濯
云、御火傳香殿、王建又云、御詩新集未、教傳
竝其例也、佗如、御路御宿御服御衣御籜御
印御扇之類、不暇枚舉、世說規勅御妓吹笛、
崔豹古今注、長安御溝謂之楊溝、謂植高楊
於其上也、然則尊上之物、一切必冠御字、未
必始于唐人也。

賈山谷揀芽詩、赤囊歲上雙龍壁、曾見前朝
盛事來、想得天香隨御所、延春閣道轉輕雷、

御稱詩話卷之下

へ、民は休して境内物皆春、依然たる仁壽山頭の月、應に
照すべし急流勇退の身」と。

韓翃云ふ、寒食東風御柳斜なり」と、一説に御を讀みて禁
節と爲すは非なり、盧綸云ふ、御竹潛に筍に通ず、王昌齡
曰く、霜は飛ぶ天苑御梨の秋」と、王建云ふ、御菓呈し來
り毎度嘗む」と、李適之云ふ、御桃の舞蝶飛行して飄ると、
劉憲云ふ、御酒新寒退くと、王濯云ふ、御火香殿に傳ふ
と、王建又云ふ、御詩新集未だ傳らしめず」と竝に其例な
り、佗御路、御宿、御服、御衣、御籜、御印、御扇の類の如き、枚
舉に暇あらず、世説に規勅御妓に勅し笛を吹かしむ、崔豹
の古今注に、長安御溝之を楊溝と謂ふ、高楊を其上に植
うるを謂ふなり、然らば則ち尊上之物、一切必御字を冠
す、未だ必ずしも唐人に始らざるなり。

賈山谷揀芽の詩に、赤囊歲上雙龍の壁、曾て前朝の盛
事を見來る、想ひ得たり、天香御所に隨ひ、延春の閣道輕
雷を轉ず」と、六如上人云ふ、御所は、即御坐の所を假りに

六如上人云、御所、即假日御坐之所耳、非總指禁内也、其說見葛原詩話前篇矣、村瀬栲亭曰、品字箋云、以文章或他務封達御所、謂之進呈、南渡典儀、有御服御絲鞋所之稱、其說載葛原詩話後編矣、大田喬松道、六如栲亭皆謂御所二字、昉于趙宋之時、殊不知其稱後漢已有之矣、鄭玄注周禮鬯氏曰、鬯今御所食蛙也。

按左傳哀公三年、司鐸火云云、命周人出御書、杜預云、御書進於君者也。

劉夢得楊柳枝詞云、城外春風颭酒旗、行人揮袂日西時、長安陌上無窮樹、唯有垂楊管別離、胡次森注之曰、夢得此詩不知作於何時、若在改連州以後、當爲柳子厚言之、子厚

目くるのみ、總て禁内を指すに非ず、と其說、葛原詩話前篇に見ゆ、村瀬栲亭曰、品字箋に云ふ、文章或は他務を以て御所に封達す、之を進呈と謂ふ、南渡の典儀に、御服御絲鞋所の稱あり、其說は葛原詩話後編に載す、大田喬松道ふ、六如栲亭皆謂ふ、御所の二字、趙宋の時に昉ると、殊不知らず其稱、後漢已に之れ有り、鄭玄、周禮鬯氏に注して曰、鬯は今の御所の食蛙なり。

按ずるに左傳哀公三年、司鐸火云云、周人に命じ、御書を出す、杜預云ふ、御書は君に進むる者なり。

劉夢得の楊柳枝の詞に云ふ、城外の春風酒旗颭めく、行人袂を揮ふ日西する時、長安陌上無窮の樹、唯、垂楊の別離を管する有り」と、胡次森之に注して曰く、夢得此詩何の時に作るを、知らず、若し連州に改めらるる以後に在らば、當に柳子厚の爲に之を言ふべし、子厚、柳州を以て播に易るを願ふ、豈、惟、垂楊の別離を管する有りといふ

願以柳州易播、豈非惟有垂楊管別離者耶、
凡注唐詩、不如是、不以足抓痒處也。

崔道融長門怨云、長門花泣一枝春、爭奈君
恩別處新、錯把黃金買詞賦、相如自是薄情
人、謝疊山云、漢武帝時、陳皇后失寵居長門
宮、聞司馬相如能賦、而結知天子、以千金賂
相如、作長門賦以獻上、上覽之、悽然、召陳皇
后歸椒房、寵幸如故、相如仕漢爲郎、買茂陵
人之女爲妾、文君失意、作白頭吟、以怨之、事
見琴操、故曰、相如自是薄情人、此乃前人所
未道、次森曰、按長門賦序謂、相如爲文悟主、
陳皇后復得幸、但致之史傳、陳皇后擅寵驕
妬、又爲誣、武帝使有司賜詔云、罷退居
長門宮、數年廢后薨、蓋未嘗得幸復入宮也、

者に非ずや、凡そ唐詩を注する、是の如くならざれば、以
て痒處を抓くに足らざるなり。

崔道融長門怨に云ふ、長門花に泣く一枝の春、争で奈せ
ん君恩の別處に新なるを、錯て黄金を把て詞賦を買ふ、
相如自らはれ薄情の人と、謝疊山云ふ、漢の武帝の時、陳
皇后寵を失ひ長門宮に居る、司馬相如、賦を能くし、而し
て知を天子に結ぶと聞き、千金を以て相如に賂ひ、長門
の賦を作らしめ、以て上に獻す、上之を覽て悽然たり、陳
皇后を召し椒房に歸し、寵幸故の如し、相如漢に仕へ郎
と爲る、茂陵の人の女を買ひ妾と爲す、文君意を失ひ、白
頭吟を作り、以て之を怨む、事は琴操に見ゆ、故に曰く、相
如は自らはれ薄情の人と、此れ乃ち前人の未だ道はざ
る所なり、次森曰く、按ずるに長門賦序に謂ふ、相如文を
爲り主を悟とす、陳皇后復た幸を得ると、但、之を史傳に
致ふるに、陳皇后寵を擅にして驕妬、又誣疊を爲す、武帝、
有司をして詔を賜はしむ、云云、漏めて長門宮に退居す、
數年にして廢后薨すと、蓋未だ嘗て幸を得て復た宮に入
らざるなり、此詩に謂ふ、錯て黄金を把て詞賦を買ふ、相
如自らはれ薄情の人、蓋相如、茂陵人の女を聘し、文君に

此詩謂錯把黃金買詞賦、相如自是薄情人、蓋爲相如聘茂陵人女、背負文君、薄情如此、賣其作賦、何補於事、所以謂之錯也、此說正與史合、若陳后再得入宮、寵幸如故、則賣賦有功、何得又謂之錯、惜不及與、墨翁商之也、常州小川鄉人、本問玄調頃者、寄視近製、摘句云、常把刀圭在、醫壘儘將鉛槧入、儒林形如枯木槎枿立、心似寒蛩蕭瑟吟、方讀此二聯、其人品事業、好讀書耽吟咏、不問而可知矣。

海霞漁鍾山退居圖云、鵲語驚人萬綠稠、天津過客早回頭、爭如雪竹霜筠裏、一鳥不鳴山更幽、嗟乎宋之天下壞于安石、學術亦壞于安石、一鳥不鳴則天下晏然、靖康南渡之

背負すと爲す、薄情此の如し、其作賦を賣る、何ぞ事に補あらんや、之を錯ると謂ふ所以なり、此說正に史と合す、若し陳后再び宮に入るを得て、寵幸故の如くならば、則ち賦を賣りて功有り、何ぞ又之を錯ると謂ふを得ん、惜いかな墨翁と之を商るに及ばざるを。

常州小川の郷人、本問玄調、頃者近製を寄せ視ざる、摘句に云ふ、常に刀圭を把て醫壘に在り、儘鉛槧を將て儒林に入る、形は枯木の槎枿として立つが如く、心は寒蛩に似て蕭瑟として吟すと、方に此二聯を讀めば、其人品事業、好んで書を讀み吟咏に耽ける、問はずして知る可し。

海霞漁鍾山退居の圖に云ふ、鵲語人を驚かして萬綠稠し、天津の過客早く頭を回らず、争でか如かん雪竹霜筠の裏、一鳥鳴かず山更幽なるに、嗟乎宋の天下は安石に壞られ、學術も亦安石に壞れる、一鳥鳴かざれば天下晏然たり、靖康南渡の變、南葉有る莫、今乃ち其詩を引

變莫有萌蘖矣。今乃引其詩以資其人。是謂騎賊馬而趕賊也。

辻本崧菴漫成云耳門數莖草眉宇一雙霜。讀者首肯曰是辻本翁之小照也。

有竹居集

任兆麟文田

載日本源監詩稿序云此

競秀亭詩一卷。迺廿年前日本源東谿氏。繇賈舶來寄正於余者也。源監館監罷職後所居亭故以名其集。爾披其詩神理清超風格雋逸直搗扇屐唐賢。屏初裁切屐直立切音贊集韻屏屐前從也。抑使居中華當亦自名一家。蓋知宇宙之大無地不生才何方隅之囿耶。昔王摩詰有送晁監還日本一詩流傳至今余固未敢希風摩詰而源監當不亞晁監其人已抑近世朱錫鬯編明詩綜於日本不過蒐羅兩三篇

き以て其人を責む是れを賊の馬に騎りて賊を趕ふと謂ふなり。

辻本崧菴漫成に云ふ耳門數莖草眉宇一雙の霜と讀者首肯して曰く是れ辻本翁の小照なりと。

有竹居集に任兆麟文田日本源監詩稿序を載せて云ふ此の競秀亭の詩一卷は迺廿年前日本源東谿氏賈舶に繇て來て正を余に寄する者なり源監は館監職を罷て後居る所の亭故に以て其集に名づくるのみ其詩を披くに神理清超風格雋逸直に唐賢を扇屐するに堪へたり。屏初裁の切屐直立の切音贊集韻屏屐前後相隣なり中華に居らしめば當に亦自ら一家に名づくべし蓋知る宇宙の大地として才を生ぜざる無し何ぞ方隅に之れ囿せんや昔王摩詰晁監の日本に還るを送る一詩有り流傳して今に至る余固より未だ敢て風を摩詰に希はず而して源監當に晁監其人に亞がざるべきのみ抑近世朱錫鬯明詩綜を編す日本に於ては兩三篇を蒐羅するに過ぎず茲れば則ち異然として成集す實に遠く平福中心の諸家數に過ぐ後流傳して我朝の文教單く數きて洵に海隅日出の邦を遺

茲則哀然成集、實遠過普福中心諸家數矣、流傳於後、俾知我朝文教單敷、洵不遠海隅日出之邦也。

按源監東谿、不悉何所人、詢諸人、亦莫知者、近時或者曰、長崎之譯士、而有文者也、今徵諸任兆麟之文、則瓊浦商人之館監、似不謬矣。

賀知章曰、賀監、仲麻呂曰、晁監、俱帶秘書之官銜、故云爾矣、所謂源監、其號相似、而其實大異也。

李白哭晁卿衡、王維送秘書晁監歸日本、儲光義洛中貽胡校書衡、朝郎日本人也、趙麟送晁補闕還日本國、包佶送日本聘賀使晁巨卿、劉長卿贈日本聘使、凡讀其詩、又閱其

さざるを知らしむるなり。

按ずるに源監東谿は、何の所の人なるを審にせず、諸人に詢ふに、亦知る者莫し、近時或者曰く、長崎の譯士にして文有る者なりと、今諸を任兆麟の文に徴するに、則ち瓊浦商人の館監、際らざるに似たり。

賀知章を賀監と曰ひ、仲麻呂を晁監と曰ふ、俱に秘書の官銜を帯ぶ、故に爾か云ふ、謂はゆる源監は、其號相似たり、而も其の實は大に異なるなり。

李白の晁卿衡を哭し、王維の秘書晁監が日本に歸るを送る、儲光義の洛中にて朝校書衡に貽る、朝は則ち日本人なり、趙麟の晁補闕が日本國に還るを送る、包佶の日本聘賀使晁巨卿を送る、劉長卿の日本聘使に贈る、凡そ其詩を讀み、又其命題を閱すれば、則ち仲麿の位置稱謂、較

命題、則仲麿之位、畧稱謂皎然如白日矣。

古者、王室賜姓氏於勳閥之臣、或曰眞人、或曰朝臣、故冒眞人朝臣之姓、榮莫大焉、阿倍仲麿在唐、留學之日、始改姓爲眞、眞朝蓋單用朝臣之朝而已、身在海外、其心未嘗不在朝廷、宋烏越吟、誰敢不哀哉、仲麿始將還本國、王維之詩、蓋在是時矣、解纜之後、遭颶風、幾沒、李白之哭、蓋在是際矣、既而飄著安南、間關千里、百苦備蓋、不知終達于洛陽、幾歲月之久也、由是觀之、仲麿之心事、不亦明白乎、然則拜秘書監、若之何、曰、異邦之人、加之官銜、以寵異焉、本邦不無其例、國史顯然矣、何獨咎於李唐、又何獨責於仲麿乎、然則終不還歸、而沒于彼土、何也、曰、國史所載、聘

然として白日の如し。

古者、王室姓氏を勳閥の臣に賜ふ、或は眞人と曰ひ、或は朝臣と曰ふ、故に眞人朝臣の姓を冒するは、榮焉れより大なるは莫し、阿倍仲麿唐に在り留學の日、始く姓を改めて眞と爲す、眞朝蓋朝臣の朝を單用するのみ、身海外に在り、其心は未だ嘗て朝廷に在らずんばあらず、宋烏越吟、誰れか敢て哀まざらんや、仲麿始め將に本國に還らんとす、王維の詩は蓋是の時に在り、纜を解くの後、颶風に遭ひ、幾んど沒せんとす、李白の哭するは、蓋是際に在り、既にして安南に飄著し、間關千里、百苦備に嘗む、終に洛陽に達し、幾歲月の久きを經るを知らず、是に由て之を觀れば、仲麿の心事、亦明白ならずや、然ば則ち秘書監を拜す、之を若何んと、曰く、異邦の人、之に官銜を加へ、以て寵異す、本邦其例無きにあらず、國史に顯然たり、何ぞ獨り李唐を咎めん、又何ぞ獨り仲麿を責めん、然ば則ち終に還歸せずして彼の土に沒するは、何ぞや、曰く、國史載する所、聘唐の使者、凡魚腹に葬らるゝ者、十に八九、仲麿曾て傷弓の鳥たり、躊躇遲疑、日復た一日、將た歸らんと欲せんか、即ち前日潮死の厄に懲る、將た歸らざらん

唐之使者、凡葬于魚腹者、十八九、仲磨曾爲傷弓之鳥、躊躇遲疑、日復一日、將欲歸耶、卽懲前日瀕死之厄矣、將欲不歸耶、上負聖朝、下負慈母、不唯是、又置宗祏於何地乎、於是仲磨之心、不一日九廻者幾希、未幾、彼土乃有祿山之亂、天下鼎沸、天子蒙塵、而仲磨死于兵燹之中、不可知也、或與王維輩俱被囚辱、而沒于、是時亦不可知也、史無明文、可謂仲磨之不幸矣、然當時之人、能察其心、朝廷亦察其忠、而褒卹之典、行於數十年之後、由是觀之、仲磨稽留之罪、不亦君子恕而不苛責乎、歐陽宋祁輩、不審其事蹟、載筆踈漏、未始知歸缸飄流之事、唯謂爲僭王所愛、或謂倦倦中國而不忍去矣、於是本邦先哲、爲歎

と欲するか、上、聖朝に負き、下、慈母に負く、唯是のみならず、又宗祏を何れの地に置かんや、是に於て仲磨の心、一日九廻、ざる者は幾んど希なり、未だ幾ばくならず、私土に乃ち祿山の亂有り、天下鼎沸し、天子蒙塵す、而して仲磨兵燹の中に死するも亦知る可らざるなり、或は王維輩と俱に囚辱せられて、是時に没するも亦知る可らざるなり、史に明文無し、仲磨の不幸と謂ふ可し、然ども當時の人能く其心を察し、朝廷亦其忠を察し、而して褒卹の典、數十年の後に、行はる、是に由て之を觀れば、仲磨稽留の罪、亦君子恕して而して苛責せざるにあらずや、歐陽宋祁の輩、其事蹟を審にせず、載筆踈漏、未だ始より歸缸飄流の事、知らず、唯謂ふ僭王に愛せらるると、或は謂ふ中國に倦々として而して去るに忍びずと、是に於て本邦先哲、歐宋に給かれ、輒ち責むるに首丘の義を以てし、視て君を忘れ親を遺るゝの罪人と爲す、而して仲磨の冤世に白せざること、殆ど千鈞戰荷も然らずんば、王室文明、賢臣滿廷の時に當り、仲磨淑慝の衷、猶ほ察する能はず、稽留の罪、尙ほ正す能はず、而して贈典を海外叛臣の枯骨に錫ふ、寧ぞ是理有らんや、故に予撰する所の六國史論、嘗て仲磨、於て三たび哀を致せしも

宋所結、輒責以首丘之義、視爲忘君遺親之罪人、而仲麿之冤、不自于世者、殆千餘載矣、苟不然、當王室文明、賢臣滿廷之時、仲麿淑慝之衷、猶不能察、稽留之罪、尙不能正、而錫贈典于海外、叛臣之枯骨、寧有是理哉、故予所撰六國史論、嘗於仲麿三致意焉、蓋爲是也、

續日本紀、天平八年丙戌、從三位葛城王、從四位上爲王等、上表云云、昔者輕擲大宮御宇、天王曾孫建內宿禰、壽事君之忠、致人臣之節、創爲八氏之祖、永遺萬代之基、自是以來、賜姓命氏、或眞人、或朝臣、源姓王家流、終臣節、云云、○續日本紀、承和三年五月、便附贈往歲入唐使、并留學問贈二品安倍朝臣仲滿、大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潯州大都督伯耆可贈正二品云云、○按、家翁之言、未嘗無遺、夫仲麿之事、即見續紀實、龜元年、由是觀之、過激大曆之際、仲麿猶無恙也、又續紀實、龜九年五月丙寅、前學生阿部朝臣仲麿、在唐而亡、家口備乏、葬禮有闕、勳賜東起二府、在唐三百宅、山是觀之、不可謂史無明文矣、然此時李唐使人孫興造等來、始告仲麿之殞、謝安知仲麿墓木之已

柳橋詩話卷之下

蓋是が爲めなり。續日本紀、天平八年丙戌、從三位葛城王、從四位上爲王等、上表云々、昔者輕擲大宮御宇、天王曾孫建內宿禰、君に事ふるの忠を盡し、人臣の節を致し、創めて八氏の祖と爲り、永く萬代の基を遺す、是より以來、姓を賜ひ氏を命じ、或は眞人、或は朝臣、源姓王家流、終に終る、云云、○續日本紀、承和三年五月、便附贈往歲入唐使、並に留學等、彼に在て身を没する者八人、位記以て贈魂を賜ひ、云々、曰く、留學問贈二品安倍朝臣仲滿、大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潯州大都督朝臣正二品を贈る可し、云々、○按家翁の言、未だ嘗、過激無きにあらず、夫の仲麿の事は、仰ち續紀實龜元年に見ゆ、是に由て之を觀れば、從士大曆の際、仲麿猶ほ恙無き也、又續紀實龜九年五月丙寅、前學生阿部朝臣仲麿に在りて亡す、家口備乏、葬禮闕り、勳して東起二百宅、白綿三百宅を賜ふ、是に由て之を觀れば、史に明文無しと謂ふ可らず、然れども是時李唐の使人孫興造等來り、始て仲麿の殞を告ぐ、安ぞ知らん仲麿墓木の已に拱なるを、且つ藤原河清乃ち聘唐大使と爲り、□□而して竟に棺を海外に蓋ふ、亦仲麿と相ひ似たり、論者彼を答めずして是を答む、豈從無しと謂はんや、男貞白附記す。

拱也哉、且藤原河清乃爲聘唐大使焉、□□□□而
竟蓋棺于海外、亦與仲鷹相似論者不咎、彼而特
男貞白附記、此、豈謂無完哉、

仲鷹命、命使本國之五古、見文苑英華、王
維送秘書晁監詩之引、載全唐詩、二者併
考、則其事瞭然矣。

杜鵬性躁、豈餵養之物哉、近時鳥戶始悟籠
畜之法、噫、何其奇也、杜甫杜鵬行云、生子百
鳥巢、百鳥不敢噏、乃爲餵其子、禮若奉至尊、
元稹云、杜鵬無百作、天遣百鳥哺雛、夫鳥戶
之言、亦與杜甫元稹殆相契合、亦奇之尤奇
者矣、鳥戶謂子規發聲、正是育卵之時、人熟
察其機、探之鳥巢、莫不獲卵、因使家雞伏、居
然而生、自小餵養、習與性成、或進炭火消息
之、彼爲之所、給裂帛之音、發于影籠之中矣、

仲鷹命を御み本國に使用するの五古文苑英華に見え、
王维、秘書晁監を送る詩の引、全唐詩に載す、二者併せ
考ふれば、則其事瞭然たり。

杜鵬は性躁し、豈餵養の物ならんや、近時鳥戶始めて籠
畜の法を悟れり、噫、何其れ奇なるや、杜甫の杜鵬行に
云ふ、子を生む百鳥の巢、百鳥敢て噏らず、乃ち爲めに其
子を餵ふ、禮至尊に奉するが若しと、元稹云ふ、杜鵬百作
無く、天百鳥に雛を哺せしむと、夫の鳥戶の言、亦杜甫元
と殆ど相ひ契合す、亦奇の尤も奇なる者なり、鳥戶謂
ふ子規の聲を發するは、正に是れ卵を育つるの時なり、
人其機を熟察し、之を鳥巢に探れば卵を獲ざること莫
し、因て家雞をして伏せしむ、居然として生る、小より餵
養すれば習ひ性と成り、或は炭火を進めて之を消息す、
彼れ之が爲めに給かれ、裂帛の音、影籠の中に發す、便房
曲壁、或は青鷗と伍を爲す、主人莞爾として耳を傾く、而

便房曲室、或與黃鸝爲伍、主人莞爾傾耳、而客在戶外者、莫不錯愕而詰其由也、福田恕菴咏籠鶻云、拙去東西與南北、近來閑卻邵堯夫。

杜牧云、霜葉紅於二月花、蓋斥桃花也、月令、仲春桃始華、小杜據之矣、又漢書曰、來春桃花水盛、是謂二月雨水盛、滋可以證也。

白樂天一雁蹲滄州、謝榛猶蹲花庭午、蹲字下得俱佳、寮友坂井長軒云、釣客蹲蘆汀、問有據否、曰、莊周有言、任公子蹲乎會稽、投竿東海。

蒲生氏郷爲豐氏所藥殺、是世俗之所傳也、然翠竹翁記牒詳載其患狀、安在其毒手也、或者謂藥殺有緩急二途、急者卽斃、緩者在

して客の戶外に在る者、錯愕して其由を詰らざるは莫し、福田恕菴、籠鶻を咏じて云ふ、拙へ去る東西と南北と、近來閑卻す邵堯夫と。

杜牧云ふ、霜葉は二月の花よりも紅なりと、蓋桃花を斥すなり、月令に、仲春桃始めて華く、小杜之に據るなり、又漢書に曰く、來春桃花水盛なりと、是れ二月雨水盛なるを謂ふ、滋以て證す可きなり。

白樂天、一雁滄州に蹲す、謝榛、猶は蹲る花庭の午、蹲の字下し得て俱に佳、寮友坂井長軒云ふ、釣客蘆汀に蹲る、問ふ據有りや否や、曰く、莊周言へる有り、任公子會稽に蹲り竿を東海に投すと。

蒲生氏郷豊氏に藥殺せらると、是れ世俗の傳ふる所なり、然ども翠竹翁の記牒詳に其患狀を載す、安ぞ其毒手に在らんや、或者は謂ふ、藥殺に、緩急二途有り、急なる者は即ち斃れ、緩なる者は在再數月にして起たすと、明の

再數月而不起。明胡惟庸進毒于劉基。基自是綿憊。然迄于屬續。凡閱數旬矣。以是推之。安知氏鄉之疾不類于劉伯溫耶。翠竹翁唯舉候證耳。未必窮其病原耶。或隱忍而不顯言耶。且氏鄉悟爲所中傷。輒賦國歌以寓意焉。是可證也。赤堀通菴咏氏鄉云。多士豈無愧寥寥。寧子忠。用左傳寧武子貨。醫薄毒之事。亦取世俗之說耶。通菴卽蒲生氏之子。而稟給于赤堀氏。故其家譜所傳。或如此耶。予將行質之也。

國大曆曰。兼好法師之故舊。曰橘成忠。成忠除伊賀守。兼好始居京師。後如伊賀。遂寓于成忠之家。居有頃。乃建精舍于國見山之麓。以遷徙焉。春秋六十三。貞治元年病沒矣。始

胡惟庸毒を劉基に進む。基是れより綿憊す。然ども屬續に迄ぶまで。凡そ數旬を閱す。是を以て之を推せば。安ぞ氏郷の疾。劉伯溫に類せざるを知らんや。翠竹翁は唯候證を擧るのみ。未だ必ずしも其病原を窮めざるか。或は隱忍して顯言せざりしか。且つ氏郷中傷せらるるを悟り。輒ち國歌を賦し。以て意を寓す。是れ證す可きなり。赤堀通菴氏郷を咏じて云ふ。多士豈愧ぢ無らんや。寥寥たり寧子の忠と。左傳。寧武子貨。毒を薄くするの事を用ふ。亦世俗の説を取るか。通菴は即ち蒲生氏の子。而して赤堀氏に稟給たり。故に其家譜傳ふる所。或は此の如きか。予將に行よ之を質さんとす。

國大曆に曰く。兼好法師の故舊を。橘成忠と曰ふ。成忠。伊賀の守に除せらる。兼好始め京師に居り。後ち伊賀に如き。遂に成忠の家に寓す。居ること頃らく有り。乃ち精舍を國見山の麓に建て。以て遷徙す。春秋六十三。貞治元年病沒す。始め成忠に一女有り。兼好の才華を慕ひ。續に腰懸を通す。中悅往來す。尤也。同々たり。即ち兼好集中載す。

成忠有一女、慕兼好才華、竊通盤、懸、巾、稅、往來、尤也、唱、唱、卽兼好集中所載忍山之和歌、蓋寓其意云、然扶桑隱逸傳、不一言及之、何哉、元政豈爲之回護耶、或不讀國大曆、而唯依據太平記乎、近人喜兼好者多矣、嘗咏之云、緇衣未必了緣因、肉眼從來難認眞、形跡區區君莫問、鳩摩羅什是前身。

一説曰、兼好始爲士人、視王室衰替、不可奈何、遂逃緇素、優遊卒歲、然耿耿之心、寧一日忘之哉、是以武弁凶德、莫不贊、彼漁色、贖貨、吾所欲、彼罪貫盈、以自斃、亦吾所祈也、彼不敗、我不問矣、武弁不替、王室不隆矣、是兼好之本意、而人莫之察、史筆莫之傳者、不然、兼好一好漢也、豈曳裾于高氏之門哉、是說

る所の忍山の和歌は、蓋其の意を寓すと云ふ、然ども扶桑隱逸傳は、一言も之に及ばざるは何ぞや、元政豈んどのれが爲に回護するか、或は國大曆を讀まずして、唯大平記に依據するか、近人兼好を喜ぶ者多し、嘗て之を咏じて云ふ、緇衣未だ必ずしも緣因を了せず、肉眼從來眞を認め難し、形跡區々君問ふこと莫れ、鳩摩羅什是れ前身と。

一説に曰く、兼好は始め士人たり、王室衰替し、奈何ともす可らざるを觀、遂に緇素に逃れ、優遊歳を平ふ、然ども耿々の心、寧ぞ一日も之を忘れんや、是を以て武弁凶德、贊成せざる莫し、彼れ色を漁し、貨に贖る、吾が欲する所のまゝにす、彼の罪貫盈し、以て自ら斃る、亦吾が祈る所なり、彼敗れざれば、我興らず、武弁替れずんば、王室隆ならず、是れ兼好の本意、而して人之を察する莫し、史筆之を傳ふる者莫し、然らずんば、兼好は一好漢なり、豈、裾を高氏の門に曳かんやと、是の説未だ必ずしも然らず、又未だ必ずしも然らずんば、識者以て如何と爲す。

未必然、又未必然、識者以爲如何哉。

徒然草曰、鎌倉海中産堅魚焉、噉之有毒、讀

者以謂堅魚、創出于鎌倉氏之時、殊不知東

海産堅魚、固已久矣、延喜式調庸曰、伊豆所

買堅魚二百十二斤、是可證也、物徂徠有言、

兼好不讀、延喜式蓋以此故歟、按萬葉集長

歌所咏堅魚、卽斥南海之産、其事最古矣、以

是觀之、兼好不唯不讀、式文併不讀、萬葉集

已。按古人讀書之難、比諸今人、不啻千百倍、不

一、二、本已、故陶、古人者、乃須著意、于

鯉魚、唐韻云、鯉、音堅、漢語抄云、加豆、大鯛也、

大曰鯛、小曰魴、音新撰字鏡曰、難、難、難三字、

其訓曰、加豆乎、又云、鯉、古年反、其訓曰、左女、

按昌住爲、加豆乎、別作難、難、難三字、其訓曰、

徒然草に曰く、鎌倉海中堅魚を産す、之を噉ふに毒有り

と、讀者以謂、堅魚は創め鎌倉氏の時に出土と、殊に知らず

東海堅魚を産する固より已に久し、延喜式調庸曰、伊豆所

買堅魚二百十二斤と、是れ證す可きなり、物

徂徠言ふ有り、兼好、延喜式を讀まずと、蓋此を以の故か、

按ずるに萬葉集の長歌に咏する所の堅魚は、卽ち南海の

産を斥す、其事最古し、是を以て之を觀ば、兼好唯、式文を

讀まざるのみならず、併て萬葉集を讀まざるのみ、按ずる

書を讀むの難、諸を今人に比すれば、實に千百倍のみならず、古

に印本無きのみならず、兵革の世、乞貸する所無し、續神家鏡

此に考くべし、式文萬葉を讀ざる、兼好に於て何ぞ憚けん、和名

鈔に曰く、鯉魚、唐韻に云ふ、鯉、音堅、漢語抄に云ふ、加豆

鯛也、大を鯛と曰ひ、小を魴音新撰字鏡に曰く、難

難、難、難三字、其訓加豆乎と曰ふ、又云ふ、鯉は古年の反、其訓

左女と曰ふ、按ずるに昌住、加豆乎の爲に、別に難、難、難三

字を作り、其訓を加豆乎と曰ふ、豈んど據る所有るか、將

た謂はゆる新撰する者か。

加豆乎、豈有所據耶、將所謂新撰者乎。

續日本紀載、石上朝臣堅魚、乃養老年間人

也、豈斯人降誕之時、偶有餉堅魚者、而其父

以名其子焉耶、堅魚異名謂之松魚、

東鑑又

謂鉛鍾魚、

雜字爲肺者、謂之佳蘇魚、中山傳

按堅魚爲肺者、堅硬如木片、一先生謂、清人

方言、謂之木魚、不知然否、古昔之人、不知生

食、唯肺以薦祭祀、供饋羞而已、兼好視如怪

物、可以徵矣。

予二十年前、作松魚歌、意頗自負、近時細閱

其類有泚、一友德源曰、世不無逐臭嗜痴之

人、姑存之可也、詞曰、寒食清明渾一夢、綠陰

滿地杜宇鳴、夏味稍稍出、文鶴嗜慾一至不

可防、東海波臣姓曰松、碧綠衣兮銀縷裳、不

續日本紀に載する、石上の朝臣堅魚は、乃ち養老年間の

人なり、豈んど斯人降誕の時、偶ま堅魚を餉る者有り、而

して其父以て其子に名づくるか、堅魚異名之を松魚と

謂ふ、東鑑又鉛鍾魚と謂ふ、雜字肺と爲せる者之を佳蘇

魚と謂ふ、中山傳按に堅魚肺、爲したる者、堅硬、木片の

如し、一先生謂ふ、清人の方言に、之を木魚と謂ふと、知ら

ず然るや否や、古昔の人、生食するを知らず、唯肺にして

以て祭祀に薦め、饋羞に供するのみ、兼好視て怪物の如

くす、以て徵とす可し。

予二十年前、松魚の歌を作る、意に頗る自負せり、近時細

に閱れば、其の類泚たる有り、一友德源して曰く、世には

臭を逐ひ痴を嗜むの人無きにはあらず、姑く之を存して

可なりと、詞に曰く、寒食清明渾て一夢、綠陰滿地杜宇鳴

く、夏味稍々文鶴を出だす、嗜慾一たび至れば防ぐ可らず、東海の波臣姓を松と曰ふ、碧綠の衣や銀縷の裳、羽翼を假らず飛んで市に上る、市人一見して喜び且つ狂し、

假羽翼飛上市、市人一見喜且狂、一尾輕重均、周鼎東西何異、僕殷湯包茅不入楚罪大、幾人水濱問昭王、死且不辭、矧魚肉都人遊俠不可當、大鵬斥鷃不相讓、白屋朱門爭先嘗、爾時良庖技癢甚、發劔好刀二尺強、去乙會講禮家言、著然割擊傳於莊、森切片片方寸許、色相離合自成章、白玉盤中堆珊瑚、或訝洛神步冰霜、休說聞苑沆瀣味、何如絳雪沁肝腸、芥子稗菜羹蘆脆、爭進齋粉和瓊漿、棘鬘瑤柱鮓、顏色吞聲屏氣鯉與魴、一呼牛飲何足多、不啻耳熱又腐腸、從來長途有他哉、口腹與身爲劍鉞、君不見古訓洋洋延喜式、脰脯但陳俎豆旁、匹似尙書稱鹽梅、不及踈影與暗香。

一尾輕重すること周鼎に均し、東西何ぞ殷湯を僕に異ならん、包茅入らず楚の罪大、幾人か水濱昭王を問ふ、死も且ほ辭せず、矧んや魚肉をや、都人遊俠當る可らず、大鵬斥鷃相ひ讓らず、白屋朱門争て先づ嘗む、爾の時良庖技癢やし、劔を發する好刀二尺強、乙を去るは會て禮家の言を講ず、著然割擊莊より傳ふ、森切片々方寸許、色相離合自ら章を成し、白玉盤中珊瑚堆し、或は訝る洛神冰霜に步するかと、説くを休めよ、閨苑沆瀣の味、何如かん、絳雪の肝腸に沁に、芥子稗菜羹蘆脆、争ひ進む齋粉瓊漿に和す、棘鬘瑤柱、顏色無し、聲を吞み氣を屏く、鯉と魴と、一呼牛飲何ぞ多しとするに足らん、雷に耳熱するのみならず、又腹を腐らす、從來長途他有らんや、口腹と身と劍鉞たり、君見ずや古訓洋洋々たり、延喜式、脰脯但陳俎豆の旁、匹似す尙書鹽梅を稱し、踈影と暗香と、以及ぼさざるに。

東叡山大慈院主名亮融、號裕如堂、楓紅未遍云、新霜染出幾株楓、又是斜陽襯得紅、天酒傳來猶未遍、半醒半醉塢西東、村莊尋菊云、村舍來看隱逸姿、陶家遺韻最堪奇、山僧應被主人笑、無復道風如晉時。

松葉蘭、始茂南島、性喜暖畏寒、形質玄麼、最難培養、上野覺成院主、乃曉棄駝之術、一經其手、凡枯槁者、勃然而作矣、故貯松葉蘭、亦至數百甌、安邑千樹棗、江陵千樹橘、不足多也、嘗有詩云、楚楚風姿三寸強、初從南島致、東方諦觀恰似青絲髮、常貯尤宜白磁盞、須向雛螟號、松栢或於蠻觸擬扶桑、近來小草貴於璧、始察人間遠志亡。

摩登伽之爲累久矣、阿難幾汗、況其他乎、我

柳橋詩斷卷之下

東叡山の大家院主名は亮融、裕如堂と號す、楓紅未だ遍からざるに云ふ、新霜染め出だす幾株の楓、又是斜陽襯し得て紅なり、天酒傳へ來て猶ほ未だ遍からず、半醒半醉塢の西東、村莊、菊を尋ぬるに云ふ、村舎に來り看る隱逸の姿、陶家の遺韻最も奇とするに堪へたり、山僧應に主人に笑はるべし、復た道風の晉時に如く無しと。

松葉蘭は、始め南島に産す、性、暖を喜み寒を畏る、形質玄麼、最も培養し難し、上野の覺成院主、乃ち棄駝の術を曉る、一たび其手を経ば、凡そ枯槁する者、勃然として作る、故に松葉蘭を貯ふ、亦數百甌に至る、安邑千樹の棗、江陵千樹の橘も、多とするに足らざるなり、嘗て詩有り云ふ、
「楚々たる風姿三寸強、初て南島從り東方に致す、諦に觀れば恰も青絲髮に似たり、常に貯ふ尤宜し白磁の盞、須く雛螟に向て松栢と號すべし、或は蠻觸に於て扶桑に擬す、近來小草壁よりも貴し、始て察す人間遠志の亡るを」と。

摩登伽の累を爲す久し、阿難幾んど汗されんとす、況や其

天台開祖有見於此乃以羊易牛枉尺直尋
 建規於不規之中設律於不律之間即鑾童
 之嬖所不敢忌矣京師之有宮川巷東都之
 有芳街咸是奢姣兒之所而延台徒之地譬
 猶士庶之有北里不康焉達人太觀一翻舊
 貫焉識不靈山會上相與拍手而歎其創制之
 妙乎嘗閱龍陽秘錄斷袖分桃目與之遇今
 舉其一云食前方丈笏兼蔬般若微醺歡有
 餘始信何郎非傅粉手巾拭面泣前魚貝原
 曰世俗相傳男寵之作在空海入唐之時非也
 道祖王與侍童相狎貝原曰日本紀則其來尙矣

石本龜齡五言長城而咏史多佳句今摘之
 朝朝云懸鏡戰功赫裁裙恭儉全雄才雖將將
 懿德恥賢賢一從良狗煮繼有牝鷄晨又醉
 美人云肯向紅妝把銀燭海棠睡熟益多情

他をや我が天台の開祖此に見る有り乃ち羊を以て牛
 に易へ尺を枉げ尋を直し規を不規の中に建て律を不
 律の間に設く即鑾童の嬖敢て忌まざる所京師の宮川
 巷有る東都の芳街有る咸なれば姣兒を畜ふの所にし
 て台徒を延くの地なり譬は猶士庶の北里平康有るが
 ごとし達人は大觀し舊貫を一翻す焉靈山會上相與
 に手を拍て而して其創制の妙を歎ぜざるを識らんや
 嘗て龍陽秘錄を閲せしに袖を斷ち桃を分ち目之遇
 ふ今其一を擧ぐ云ふ食前方丈笏と蔬と般若微醺歡
 有り始めて信ず何郎の粉を傳くるに非ざるを手巾面を
 拭て前魚に泣く貝原益軒曰く世俗相傳ふ男寵の作る空海
 傳る續日本紀に見ゆ則ち其來尙し

石本龜齡は五言の長城而して咏史に佳句多し今之を
 摘す朝朝云鏡を懸け戰功赫たり裙を裁ち恭儉全し雄才
 將に將たりと雖懿德賢を賢とするを恥づ一たび良狗
 の煮られて従り穉で牝雞の晨する有り又醉美人に云
 ふ肯て紅妝に向て銀燭を把らんや海棠睡熟して益

又千里鏡銘云、何遠之有、莫願於微、抑移此才學於職事、何職不協、何事不幹哉。

烏絲闌、謂之哇紙、方言也、名亦佳、小林一卷云、硯田哇紙力耕筆、卽是儂家貨殖傳、一卷卽高遠藩之侍醫、刀圭之暇、貨殖于硯田哇紙之間、予焉獲、不爲書牛券耶。

予嘗在片倉鶴陵坐、嗣子仲永垂髫嬉遊、一客問曰、陸游字務觀、據於何典、仲永應聲曰、列子云、務外游、不知務內觀、是也、一座大驚、識者咸有神童之目焉、惜哉、齒纒弱冠、患風痺、奄奄不瘥、所謂苗而不秀者矣。

黃娘卿送馮躋仲同錦衣家弟之、日域借師云、整頓飛鳥出、甬東稜稜劍氣出、雙虹半肩行李山河重、一紙羽書日月通、聲徹秦庭悲

多情、又千里鏡の銘に云ふ、何の遠ことか之れ有らん、微より顯るとは莫し、と抑も此の才學を職事に移まば、何の職か協はざらん、何の事か幹せざらんや。

烏絲闌、之を哇紙と謂ふ、方言なり、名亦佳、小林一卷云、硯田哇紙力耕の筆、卽ち是れ儂家の貨殖傳、二卷は卽ち高遠藩の侍醫、刀圭の暇、硯田哇紙の間に貨殖す、予焉ぞ爲に牛券を書せざるを獲んや。

予嘗て片倉鶴陵の坐に在り、嗣子仲永垂髫嬉遊す、一客問て曰て、陸游字は務觀、何の典に據るかと、仲永聲に應じて曰く、列子に云ふ、外游を務めて、内觀を務るを知らず、是なりと、一座大に驚く、識者咸な神童の目有り、惜いかな、齒纒に弱冠、風痺を患ひ、奄々として瘥えず、謂はゆる苗にして秀でざる者なり。

黃娘卿馮躋仲、錦衣家弟と同く、日域に之て師を借るを送るに云ふ、飛鳥を整頓して甬東を出で、稜々たる劍氣、雙虹を出だす、半肩の行李山河重く、一紙の羽書日月通す、聲は秦庭に徹して夜雨を聴み、煙は赤壁を鎖して天

夜雨、煙銷、赤壁、借天風、謾誇郭子聯、回紇、麟閣、今標、駕海功、二十年前、有人持此詩幅、來賣者、價亦廉、當時諸名家不曉、尤物、披閱、匆、唯評書法之娟媚耳、近時、明末清初之書、盛行世、明末清初之人物、莫不尙友、於是乎、卞氏之璧、始顯于世、人人追恨、而其幅不知、遂歸于何人矣、夫當朱明之末造、鄭成功糾合義衆、虎踞海島、且乞援于本邦、其呈長崎鎮臺之書、今猶傳世、可覆視也、然彼武夫也、理有或然者矣、至馮麟仲、黃宗羲之徒、一介之儒生、眇然懦夫、感憤不已、航海千里、俱抵于瓊浦、傲秦庭之哭、謀回紇之援、所謂仁者之勇、猶有出成功之上者、今讀其詩、想其人、猶令人破涕、黃娘卿所指斥、錦衣家弟者、即

一三二
 風を借る、謾に誇る郭子回紇を聯ぬるを、麟閣今標す、駕海の功、二十年前、人此の詩幅を持ち來て賣る者有り、價亦廉、當時諸名家、尤物たるを曉らず、披閱匆々、唯書法の娟媚を評するのみ、近時明末清初の書、盛に世に行はる、明末清初の人物、尙友せざる莫し、是に於てか卞氏の璧、始めて世に顯はれ、人々追恨す、而るに其幅遂に何人に歸せしかを知らず、夫れ朱明の末造に當り、鄭成功、義衆を糾合し、海島に虎踞す、且つ援を本邦に乞ふ、其長崎鎮臺に呈するの書、今猶ほ世に傳ふ、覆視す可きなり、然ども彼は武夫なり、理或は然るもの有らん、馮麟仲、黃宗羲の徒に至ては、一介の儒生、眇然たる懦夫なれども、感憤已まず、航海千里、俱に瓊浦に抵り、秦庭の哭に傲ひ、回紇の援を謀る、謂はゆる仁者の勇、實成功の上に出る者有り、今其詩を讀み、其人を想ふも、猶ほ人をして破涕せしむ、黃娘卿の指斥する所の、錦衣家弟の者とは、即ち黃宗羲なりと云ふ、

黃宗羲云。

荆公云、紅梨無葉庇花身、後雙詩話樂天云、竹身三年老、薛濤云、水面魚身總帶花、王直方詩話曰、橄欖以鹽擦木身、明張元禎與張繡書云、今黃河以北、多存江流、舊身但上下湮沒、浩然齋雅談、唯舉詩成親傍竹身題之句、偶隨所見以補一二已。

東坡云、煥糟鄙但叔孫通、煥糟二字、不曉其義、楊誠齋詩話云、煥糟卽塵糟、蓋糜爛之意、今人讀塵爲巷、讀糟子甘切。

雲山老人宮澤氏夜雪云、白戰酣時天未明、風刀冰刃擁詩城、筆鋒難敵素軍勇、又向青州借援兵。

東坡云、白戰不許持寸鐵、按白戰之白、卽白

荆公云ふ、紅梨葉の花身を庇ふ無しと、後雙詩話樂天云ふ、竹身三年老と、薛濤云ふ、水面魚身總て花を帶ぶと、王直方詩話に曰く、橄欖鹽を以て木身に擦す、明張元禎、張繡に與ふる書に云ふ、今黃河以北、多く江流を存す、舊身但た上下湮沒すと、浩然齋雅談に唯詩成て親ら竹身に傍て題するの句を擧ぐ、偶々見る所に隨ひ以て一二を補ふのみ。

東坡云ふ、煥糟鄙但の叔孫通と、煥糟二字、其義を曉らず、楊誠齋詩話に云ふ、煥糟は卽ち塵糟蓋、糜爛の意、今人塵を讀み巷と爲し、糟を子甘切と讀む。

雲山老人宮澤氏夜雪に云ふ、白戰酣時天未だ明けず、風刀冰刃詩城を擁す、筆鋒敵し難し、素軍の勇、又青州に向て援兵を借ると。

東坡云ふ、白戰、寸鐵を持つを許さずと、按ずるに白戰の

取、浩然齋雅談、哀廟工歌、白喫、水滸、傳、白著、通鑑唐、肅宗紀、白望、晉、徐暉、白頭遊、白身、子自身歸、之白、同義矣、咏雪較才、

一語不及體物、不是白戰乎、或曰、若夫咏花、賦霞、亦禁體物、謂之赤戰、亦可也、赤脚、赤手、赤貧、赤地、赤族之義、亦可以見也。

舊友東條琴臺、學益殖、著書益富、名亦益振、所著續先哲叢談、世稱其精確焉、續唐宋聯珠詩格、亦詩家之真珠船也、文章大半爲丙丁兒所奪、唯錄口誦之作而已、咏史云、玉帛徵賢下紫宸、至尊撫背意相親、誰道客星侵帝座、想應太史誤時人、凜然偉略一時雄、嘗膺坐薪計、不窮活路已知屈、伸理何妨貨殖、有朱公。

高駢、山亭夏日云、綠樹陰濃夏日長、樓臺倒

白は、即ち白取、浩然齋雅談、哀廟工歌、白喫、水滸、傳、白著、通鑑唐、肅宗紀、白望、晉、徐暉、白頭遊、白身、子自身歸、の白と、義を同くす、雪を咏じ才を較べ、一語も物を體するに及ばず、是白戰ならずや、或ひと曰く、若し夫れ花を咏じ霞を賦す、亦體物を禁ず、之を赤戰と謂ふも亦可なり、赤脚、赤手、赤貧、赤地、赤族の義も亦以て見るべし。

舊友東條琴臺、學益殖し、著書益富み、名も亦益振ふ、著す所の續先哲叢談、世稱其精確を稱す、續唐宋聯珠詩格も亦詩家の真珠船なり、文章は大半丙丁兒に奪はる、唯、口誦の作を録するのみ、史を咏じて云ふ、玉帛賢を徵し、紫宸より下り、至尊背を撫し、意相親む、誰か道ふ客星帝座を侵すと、想ふに應に太史の時人を誤るなるべし、凜然たる偉畧一時の雄、膺を管め薪に坐し、計窮らず、活路已に知る屈伸の理、何ぞ妨げん貨殖に朱公有るを。

高駢、山亭夏日に云ふ、綠樹陰濃かにして、夏日長く、樓臺

影入池塘、水精簾動、微風起、一架薔薇滿院、香、謝疊山注之云、水精簾動、乃微風吹、池水、其波紋如、水精簾也、胡次焱云、簾動香滿、以有微風也、無微風、則簾不動、香不滿也、體用兼該、以是觀之、水精簾蓋爲兩說焉、且簾波二字、襲用已久矣、則疊山之言、亦不可廢也、今之世、陶秀善詩者、景鸞素玉、繡文、舜花、秀子之徒、僅僅數人耳、素玉、修理別業云、換卻園林舊樣姿、程工日夜鑿、清池、薔薇一架、新移植、要伴樓臺倒、影時、素玉、名萬、字天香、森川氏之室也、

昔人讀源氏物語云、豎僞眼如豆、一斑不得窺、夫源語與、僞何涉、辭失體要、而自甘于卑屈、其人真豎僞矣、清水祐甫題源氏竹川卷、

柳橋時斷卷之下

影を倒にして池塘に入る、水精簾動いて微風起る、一架の薔薇滿院香し、謝疊山之に注して云ふ、水精簾動は、乃ち微風池水を吹き、其波紋水精簾の如きなりと、胡次焱云ふ、簾動き香滿るは、微風有るを以てなり、微風無れば、則簾動かず、香滿たざるなり、體用兼該す、是を以て之を觀れば、水精簾は薔、兩説を爲す、且つ簾波二字は、襲用已に久し、則ち疊山の言、亦發す可らざるなり、

今の世、陶秀の詩を善する者は、景鸞素玉、繡文、舜花、秀子の徒、僅々數人のみ、素玉別業を修埋して云ふ、園林舊樣の姿を換卻して、程工日夜清池を鑿つ、薔薇一架、新に移植し、樓臺影を倒にするの時に伴はんと要す、素玉名は萬、字は天香、森川氏の室なり、

昔人源氏物語を讀むに云ふ、豎僞眼、豆の如く、一斑窺ふを得ず、と夫れ源語は僞と何ぞ涉らん、辭體要を失ひ、而して自ら卑屈に甘んず、其人真に豎僞なり、清水祐甫、源氏竹川卷に題して云、錯て人をして玉の織織を窺はし

云、錯致入闕、玉纖纖相對爭、絮隔繡簾、一局
 麻輸賭春色、落花如雨撲棋奩、祐甫嗜國歌、
 且通曉源語、宜措詞之的當也。

子妹嫁福田氏者、名菅、號白鳳、嘗歎曰、一部
 西廂記破壞世間許多好女子、恨不付祖龍
 一火也、韻語亦頗露其意、云、碧玉十三四、教
 裁衣與裳、洞房花月夕、必莫玩西廂。

全唐詩載沈頌送金文學還日本詩、所謂金
 文學無所攷、或云、續日本記寶龜八年、在唐
 大使藤原清河、學生朝衡、付書新羅人金初
 正、以遞達焉、唐人誤以初正爲本邦人耶。

酉陽雜俎云、野狐名紫、夜擊尾出火、將爲怪、
 必戴獨轆、拜北斗、不墜、則化爲人矣、高橋倉
 山觀狐火云、小於漁火、大於螢、光焰無芒、看

む、相對して争ひ撃して繡簾を隔つ、一局麻輸賭春色を賭
 す、落花雨の如く棋奩を撲つ、祐甫國歌を嗜み、且つ源語
 に通曉す、宜なり詞を措くの的當なるや。

子の妹福田氏に嫁する者、名は菅、白鳳と號す、嘗て歎じ
 て曰く、一部の西廂記、世間許多の好女子を破壊す、恨む
 らくは祖龍の一火に付せざることを、と韻語も亦頗る其
 意を露す、云ふ、碧玉十三四、衣と裳とを裁するを教ふ、洞
 房花月の夕、必西廂を玩ぶ莫れ。

全唐詩に載す、沈頌の金文學が日本に還るを送る詩の、
 謂はゆる金文學は攷ふる所無し、或は云ふ、續日本紀寶
 龜八年、在唐の大使藤原清河、學生朝衡、書を新羅の人金
 初正に付して、以て遞達すと、唐人誤て初正を以て本邦
 の人と爲すか。

酉陽雜俎に云、野狐名は紫、夜、尾を撃ちて火を出だす、將
 に怪を爲さんとすれば、必獨轆を戴き北斗を拜す、墜ち
 ざれば則ち化して人と爲ると、高橋倉山、狐火を觀るに
 云、漁火より小く、螢より大に、光焰無く、看更に青し、點

更青、點點不知何處去、林風野雨夜冥冥。

當世有一酒令、命曰狐拳、乃建三件目焉、一爲狐、一爲里正、一爲鳥銃、三者成手勢像之、初甲乙對坐、輒拍掌三下、是爲引首、繼以手勢、蓋里正可敬、然遇狐、遂所疊、狐有神通、安敵鳥銃哉、鳥銃利器、又奈里正何、三者交錯、如環無端、一勝一負、輒浮太白、聲妓日夜以是爲命、自然慣習、赴赴之士、每戰見擒、即精丘之陷穽、酒池之羅網、安知非凶身敗家之因哉、近人咏之云、里正兼狐兼鳥銃、孰優孰劣、決雌雄、酒船常額踰千萬、吸盡佳人一笑中。

太白即巨舟也、抱朴子云、溝澮之流、不能運太白之船、是也、又巨杯也、古樂府云、將進酒

柳橋時話卷之下

知らず何の處にか去る、林風野雨夜冥々たりと。

當世一酒令有り、命じて狐拳と曰ふ、乃ち三件の目を種つ、一は狐と爲し、一は里正と爲し、一は鳥銃と爲す、三者成な手勢之を像とる、初め甲乙對坐す、輒ち掌を拍つ三下、是を引首と爲す、繼に手勢を以てす、蓋、里正は敬ぶ可し、然ども狐に遇ば遂に疊さる、狐、神通有りとも、安ぞ鳥銃に敵せんや、鳥銃の利器も、又里正を奈何にせん、三者交錯して、環の端無きが如く、一勝一負、輒ち太白を浮ぶ、聲妓日夜是を以て命と爲す、自然に慣習し、赴々の士、戰ふ毎に擒にせらる、即ち精丘の陷穽、酒池の羅網、安ぞ凶身敗家の因に非ることを知らんや、近人之を咏じて云ふ、里正と狐と鳥銃と、孰れか優り孰れか劣ると雌雄を決す、酒船常額千萬を踰ゆ、吸ひ盡す佳人一笑の中と。

太白は即ち巨舟なり、抱朴子に云ふ、溝澮の流、太白の舟を運ら能はずと、是なり、又巨杯なり、古樂府に云ふ、將に

乘、太白是也。杯形擬舟，是以同名矣。自此而後，統船杜牧、統船一、金船張翥、醉把、銀船陸、夜槽壓酒白玉船、白玉船陸遊、手把之稱，紛紛而作矣。

劉禹錫詩云、罰籌長豎、纒、統盡揉如、初、滋、可證也。

莊周云、置杯膠焉、水淺舟大也、可見杯之爲舟亦久矣、以是考之、高僧傳所載、杯渡、即泛舟渡河、何足以怪、達磨乘蘆葉、不是詩所謂一葦杭之乎、大凡浮屠之好幻、與畫匠之創奇、併爲無稽之根本矣。

本藩儒員、高橋靜齋、名照、字君雍、本會津人、中年解褐、本藩、春秋若干、卒于二十年之前矣、詩染享保、然其佳處、有自不可掩者、茲上

酒を進めんとして太白に乗ずと、是れなり、杯形、舟に擬す、是を以て名を同うす、此れよりして後、統船杜牧、統船一、金船張翥、醉把、銀船陸、夜槽壓酒白玉船、白玉船陸遊、手把之稱、紛々として作れり。

劉禹錫の詩に云ふ、罰籌長く纒を豎て、統盡揉初の如しと、滋、證すべし。

莊周云ふ、杯を置けば膠す、水淺く舟大なればなりと、見る可し杯の舟たるも亦久し、是を以て之を考ふるに、高僧傳に載する所の、杯渡は、即ち舟を泛べ、河を渡るなり、何ぞ以て怪むに足らんや、達磨、蘆葉に乗る、是れ詩に謂はゆる一葦之に、統するにあらずキ、大凡そ浮屠の好幻と、畫匠の創奇と、併せて無稽の根本と爲る。

本藩儒員、高橋靜齋、名は照、字は君雍、本と會津の人、中年知を本藩に解けり、春秋若干にして、二十年の前に卒せり、詩は享保に染む、然ども其佳處は、自ら掩ふ可らざる者有り、上田伯高が會津に還るを送るに云ふ、江東春老

田伯高還會津云、江東春老柳、舊穠富貴還
 家舞兩驂、可羨一鳥飛向、北誰憐孤劍獨留
 南雲蒸瀧澤、籠深樹、雪霽盤梯起夕嵐、三十
 年前人尙在、爲言垂白臥餘酣、云、答、齊禮卿
 推、大老、何勞門下領、三體、贈、爽、鳩、氏、云、
 書、披、藥、裏、春、無、恙、孤、劍、寒、衣、裏、有、華、

一名家序於金詩選曰、勿吉古肅慎地、又號
 靺鞨、考之舊史、徵之古碑、其地在我東北海
 外、與蝦夷接、其人或來、或叛、或授以官爵、然
 此時未聞有文字也、蓋靺鞨後分爲二部、焉
 一爲渤海、當我中葉、貢職惟謹、其使裴氏之
 徒、以時來獻禁靺樂、天朝詞臣、與之唱和、以
 寵賜之矣、一爲金、云云、按此說誤甚、續日本
 紀神龜四年云、渤海郡舊高麗國也、淡海朝廷七
 年冬十月、唐將李勣伐滅、其後久絕矣、至是

御橋詩話卷之下

いて柳、穠々、富貴家に還り、兩驂舞ふ、羨む可し、一鳥飛ん
 で北に向ふ、誰か憐まん、孤劍獨り南に留るを、雲は瀧
 澤に蒸して深樹を籠め、雪は盤梯に霽れて夕嵐を起さ
 ん、三十年前人尙在り、爲に言へ白を垂れて餘酣に臥
 すと、又齊禮卿に答るに云ふ、本は海濱大老を推す、何ぞ勞せ
 る、ん門下三體を領するを、爽鳩氏に贈るに云ふ、書披藥裏
 春恙無し、孤劍寒衣、
 韓大華有り」と。

一名家金詩選に序して曰く、勿吉は古の肅慎の地、又靺鞨
 と號す、之を舊史に考へ、之を古碑に徵するに、其地、我東
 北の海外に在り、蝦夷と接す、其人或は來り、或は叛く、或
 は授くるに官爵を以てす、然ども此時未だ文字あるを聞
 かず、蓋靺鞨の後、分れて二部と爲り、一は渤海と爲す、我
 が中葉に當つて、貢職惟れ謹めり、其使裴氏の徒、時を以
 て來りて禁靺の樂を獻せり、天朝の詞臣、之れと唱和し以
 て之に寵賜せり、一は金と爲す、云々、按に、此の説誤り甚
 し、續日本紀神龜四年云ふ、渤海郡は舊の高麗國なり、淡海朝
 廷七年冬十月、唐將李勣伐ち滅す、其後久しく絶ゆ、是に
 至て渤海郡王、寧遠將軍高仁義等二十四人を遣し朝貢
 す、云々、又渤海王に勅書を賜ひて云ふ、天皇謹みて高麗

渤海郡王、遣寧遠將軍高仁義等二十四人朝貢云云、又賜渤海王勅書云、天皇謹問高麗王云云、以是觀之、渤海即高麗、未始與靺鞨關涉、其使臣裴氏之徒、亦高麗人、宜文藻之美、不因于專對也。

佐藤榮元號竹坡、年十七、詩才泉涌、今錄梁星巖加朱圈者、夏山云、洗來山色滑如油、水墨淋漓滴欲流、香盡博山雲斷絕、夕陽送影透籬鉤。

六月晦日修禊事、其來尙矣、其法以竹片爲空籠、其中可容人、修禊之人、口唱咒語、鞠躬而出、入籠中、凡三匝焉、不曉其故、或詢諸博識之士、亦莫有知者、竊謂是本邦之習俗耳、一日偶讀全唐詩云、中宗春幸梨春園、竝涓

王に問ふ云々と、是を以て之を觀れば、渤海は即ち高麗、未だ始より靺鞨と關涉せず、其使臣裴氏の徒も亦高麗の人、宜なり、文藻の美專對に因まらざるなり。

佐藤榮元、竹坡と號す、年十七、詩才泉涌、今、梁星巖、朱圈を加ふる者を錄す、夏山に云ふ、洗ひ來りて山色滑にして油の如し、水墨淋漓滴りて流れんと歎す、香盡きて博山雲斷絶し、夕陽影を送り籬鉤に透る。

六月晦日修禊の事、其來尙し、其法竹片を以て空籠を爲り、其中に人を容る可し、修禊の人、口に咒語を唱へ、鞠躬して籠中に出入し、凡そ三匝す、其故を曉らず、或る人、諸を博識の士に詢ふ、亦知る者有る莫し、竊に謂ふ、是れ本邦の習俗のみと、一日偶、全唐詩を讀みしに云ふ、中宗春、梨春園に幸し、涓水に竝ひて、祓除す、則ち細柳園を賜ひ、惡を辟けしむと、予手を拍て喜びて曰く、謂はゆる竹

水祓除、則賜細柳圈、辟惡、予拍手而喜曰、所謂竹籬、亦細柳圈之遺法也、蓋中夏古法、泯然消滅、而咸存乎百代一王之國、不獨禊事之瑣瑣而已、嘗觀王室古圖、庭上設兩肺石焉、周禮肺石、彼土學者唯知於文字之間耳、本邦則巍然現存、吾儕小人猶得按圖以考古制、不亦天之寵靈乎、此種事不暇枚舉、予嘗於蓬萊徵古錄中、即收其大半焉、六月晦日禊事、始行于天武帝之時、金火相剋、所以祓除焉、且櫻陰腐談、○所咒國歌二首、靈故事根元記。

木偶人謂之雛、初不解其義、既而悟曰、是芻靈之芻、誤添佳耳、文昌雜錄云、唐歲時節物、三月三日、則有饌人矣、今所謂雛、即饌人之遺制、而其義取芻靈、莫有疑焉、鄭文注、禮云、芻靈、束茅爲人、馬、謂之靈、者、神之類也。

柳橋時話卷之下

籬亦細柳圈の遺法なり、蓋中夏の古法は、泯然消滅し、而して咸な百代一王之國に存す、獨禊事の瑣々のみならず、嘗て王室古圖を觀しに、庭上に兩肺石を設く、周禮の肺石は、彼土の學者も唯、文字の間に知るのみ、本邦は則ち巍然として現存す、吾儕小人猶圖を按じ以て古制を考ふるを得たり、亦天の寵靈ならずや、此の種の事故舉に暇あらず、予嘗て蓬萊徵古錄中に於て、即ち其大半を收めたり、六月晦日禊事、始て天武帝の時に、行はる、金火相剋、故於根元記に、○所以なり、櫻陰腐談に見ゆ、○咒する所の國歌二首、故事載す。

木偶人之を雛と謂ふ、初め其義を解せず、既にして悟りて曰く、是れ芻靈の芻、誤て佳を添ふるのみと、文昌雜錄に云ふ、唐の歲時節物、三月三日、則ち饌人有り、今謂ふ所の雛は、即ち饌人の遺制、而して其義芻靈に取る、疑ひ有る莫し、鄭玄、禮に注して云ふ、芻靈、茅を束ねて人馬と爲す、之を靈と謂ふ者は、神之類なり。

山田安朴號小霞其人白皙眉頭有蹙文一貴人嘲之曰假是人之面以行弔喪之禮可也予曰假面弔喪見後漢禰衡傳即嘲荀文若之語耳然則足下德容與文若相似歟且文若不獨爲曹魏之忠臣其心亦忠于漢東坡謂爲聖人之徒足下與之爲伍榮亦甚矣一日示其遺意之作云隸法萎靡久失師程家遺法沒人知自嗤一事似文若臨摹平生嗜漢碑所著三碑通論史晨碑 敕曹全一卷漢隸逢原五卷臨池家莫不嘆服也

杜詩命題如遺悶遺憂遺憤遺心遺意遺興之類不一而足矣注家以消遣解之非也何則悶也憤也憂也謂之消遣而可矣至於心也意也興也安得而消遣哉按遺猶言達焉

山田安朴小霞と號す其人白皙眉頭に蹙文有り一貴人之を嘲りて曰是人の面を假り以て弔喪の禮を行ふて可なりと予曰く面を假り喪を弔するは後漢禰衡傳に見ゆ即ち荀文若を嘲るの語のみ然ば則ち足下德容文若と相ひ似たるか且つ文若獨り曹魏の忠臣たるのみならず其心も亦漢に忠なり東坡謂ふ聖人の徒たりと足下之れと伍を爲す榮も亦甚と一日其遺意の作を示せしに云ふ隸法萎靡久く師を失ふ程家の遺法人の知る淺し自ら嗤ふ一事文若に似たるを臨摹平生漢碑を嗜む著す所三碑通論史晨碑 敕曹全一卷漢隸逢原五卷臨池家嘆服せざる莫し

杜詩の命題、悶を遣る、憂を遣る、憤を遣る、心を遣る、意を遣る、興を遣るの類の如き一にして足らず、注家消遣を以て之を解く、非なり、何となれば則ち悶也、憤也、憂也、之を消遣と謂ふて可なり、心也、意也、興也に至ては、安を得て消遣せんや、按ずるに遣は猶は達と言ふがごとし、謂はゆる心を遣し、興を遣するは、即ち心を達し、興を達す

所謂遺心、遺興、卽達心、達興也。衛玠云、非理相干、可以理遣、此是遺字。

角南了菴、健筆也、多多益辨、惜哉年廿四五、化爲異物、噫、筆札之小技、天猶吝於薄福之人、耶、咏史云、鑿頭鼠目持朝柄、飯袋酒囊筆簿書。

荒井堯民、今之青烏子也、所著龍背發秘、可見矣、春塘云、鷓鴣閑浴落花水、胡蝶低飛芳草風。

高階信字子義、受易於海保漁村、學字於卷菱湖、其人品可知也、漁村爲予誦、其一聯云、窓外吟風竹、門前浴雨山、佳句也。

福田和號恕菴、才氣睥然、發眉宇間、詩亦超越、墨水一聯云、歸鳥背斜日、落花帶晚鐘、此

柳橋詩話卷之下

るなり、衛玠云、非理相ひ干さは、理を以て遣す可しと、此れ是の遣の字。

角南了菴は健筆なり、多々益辨す、惜いかな年廿四五、化して異物と爲れり、噫、筆札の小技、天猶は薄福の人に吝するか、咏史に云ふ、鑿頭鼠目朝柄を持し、飯袋酒囊筆簿書を掌ると。

荒井堯民は今の青烏子なり、著はす所の龍背秘以て見る可し、春塘に云ふ、鷓鴣閑に浴す落花の水、胡蝶低く飛ぶ芳草の風と。

高階信字は子義、易を海保漁村に受け、字を卷菱湖に學ぶ、其人知る可し、漁村予が爲めに其一聯を誦す、云ふ、窓外風に吟する竹、門前雨に浴する山と、佳句なり。

福田和號恕菴と號す、才氣睥然、眉宇の間に發し、詩も亦超越なり、墨水の一聯に云ふ、歸鳥斜日を背にし、落花晚鐘を帶ぶと、此れ是の帶の字、少陵の「春星草堂を帶ぶ」より

是帶字、自少陵春星帶草堂得來。

蘭香尼詩才超妙、已在笄年、况近時卸鉛華之粧、而脫俗超塵乎、春日云、坐睡醒來日脚暈、此中幽趣有誰知、一簾花影忽搖動、枝上亦禽移樹時、哭弟云、有才無壽是前因、遺墨如新更愴神、去載江樓相遇日、豈思汝作遠行人、尼始嫁古筆氏、彼家所傳賞鑑之法、咸極其蘊底、是以古人筆札、一目不逃妍媸、尼失意所天、以入佛界、一衣一鉢、隨緣度日、而至處參徒群集者何也、蓋以布施其賞鑑也、松本君號虎山、予少年徵逐之盟主也、今乃死灰已燃、丹爐候火之時也、其入朝之時、轎者四人、兩士挾轎以馳、持鎗者、肩篋者、捧履者、頗意氣從、其後焉、二十年前俱遊墨水、君

來る。

得蘭香尼詩才超妙、已在笄年に在り、況んや近時鉛華の粧を卸し、而して俗を脱し塵を超えるをや、春日に云ふ、坐睡醒め來れば日脚暈し、此中の幽趣誰れ有てか知らん、一簾の花影忽ち搖動す、枝上の春禽樹に移る時、弟を哭するに云、才有り壽無し是れ前因遺墨新の如く更に神を愴ましむ、去載江樓州ひ遇ひの日、豈思はんや汝か遠行の人と作んとは、尼始め古筆氏に嫁す、彼の家傳ふ所の賞鑑の法、咸な其蘊底を極む、是を以て古人の筆札、一目妍媸を逃さず、尼意を所天に失ひ、以て佛界に入り、一衣一鉢、緣に隨ひ日を度り、而して至る處參徒群集する者は何ぞや、蓋其賞鑑を布施するを以てなり。

松本村、虎山と號す、予少年徵逐の盟主なり、今乃ち死灰已に燃え、丹爐火を候するの時なり、其朝に入るの時、轎者四人、兩士、轎を挟み以て馳す、鎗を持つ者、篋を肩ふ者、履を捧ぐる者、頗る意氣其後に從ふ、二十年前俱に墨水に遊び、君句を得たり、云、幽花多くは水に俯し、古寺半は

得句云、幽花多俯水、古寺半藏松、是際已卜、
日後之榮達矣。

岐伯作鐘歌、見古今注、周亮工曰、岐伯醫外
能詩、古聖何所不該、惜哉、其詞不傳也。

姻家佐藤氏、藏多紀桂山先生詩扇久矣、筆
法古朴、可仰、可敬、其詩果先生所賦耶、或偶
然弄筆、而錄古人之作乎、詞云、綠葉紅英遍、
仙經白討論、偶移巖畔菊、鋤斷白雲根。

邦俗所謂頼母子、一名無盡、清人謂之七賢
會、見徐時作閑居偶錄、予交友有創此會者、
小西古蘭戲咏曰、想當太史奏聞急、今夜江
樓聚德星、讀者莫不捧腹。

薩州儒官山田君豹號月州、嘗錄其所業、以
寄視清人王夢樓、令下雌黃、卷中朱批殆遍、

松に藏る、是際已に日後の榮達を卜せり。

岐伯鐘歌を作る、古今注に見ゆ、周亮工曰く、岐伯は醫の
外に詩を能くす、古聖の該ざる所あらん、惜いかな、其
詞傳はらざるなり。

姻家佐藤氏、多紀桂山先生の詩扇を藏する久し、筆法古
朴、仰ぐ可く、敬すべし、其詩は果して先生の賦する所か、
或は偶然筆を弄して、而して古人の作を録するか、詞に
云ふ、綠葉紅英遍く、仙經自ら討論す、偶、巖畔の菊を移
し、鋤き断す白雲の根と。

邦俗謂ふ所の頼母子たのこし、一名無盡、清人之を七賢會と謂ふ
徐時作の閑居偶錄に見ゆ、予の交友に此會を創めし者有
り、小西古蘭、戲に咏じて曰く、想ふ當に太史奏聞の急な
るべし、今夜江樓に德星聚ると、讀者捧腹せざるは莫は
し。

薩州の儒官、山田君豹、月州と號す、嘗て其所業を録し、以
て清人王夢樓に寄せ視し、雌黃を下さしむ、卷中、朱批殆
んど遍し、今其二首を抄す、春宮怨に云ふ、日暖にして長

今抄其二首、春宮怨云、日暖長門玉漏稀、粧成更懶著春衣、一雙胡蝶無人管、自向百花深處飛、步樓評云、香節通唐、金爐風鼻篆、烟斜芳草春、深聲路賒、終日西宮人不見、還欄數盡御溝花、評云、心中亦如此、如此、朱、暑其首云、諸作取材漢魏、脫骨三唐、氣體清宮、神韻凝水、駸駸乎去古不遠矣、論詩家云、詩不廢摹擬、杜於何遜、李於陰鏗、有先我而行之者、君殆此秘者歟、若夫言微旨遠、語淺情深、朱絃疏越之音、清廟明堂之奏、則存乎閉戶者之多、歲月耳、江楓單句、亦足以稱海水之奇也、京江王文治評、

卷中、有送靜齋先生歸廬構七律、按靜齋河口市、出於鳩巢之門、乃爲河越文學、月州與之有師資之契、云、○夢樓工書、見湖海詩傳、又善詩、袁子才詩話、

吳子寧一日袖詩來、告曰、是雲山之真面目

門玉漏稀なり、粧ひ成るも更に春衣を著くるに懶し一雙の胡蝶人の管する無し、自ら百花深き處に向つて飛ぶ、夢樓評に云、金爐風鼻篆、烟斜、芳草春深くして聲路賒なり、終日西宮人見えず、欄に憑て數へ盡す御溝の、評に云、心中の事、朱暑して云ふ、諸作、材を漢魏に此の如し、此の如し、其首に朱暑して云ふ、諸作、材を漢魏に取、骨を三唐に脱し、氣體清宮、神韻凝水、駸々乎として古を去る遠からず、論詩家云、詩は摹擬を廢せず、杜の何遜に於る、李の陰鏗に於る、我に先ちて之を行ふ者有り、君は殆ど此秘なる者か、若し夫れ曾は微に旨は遠く、語は淺く情は深し、朱絃疏越の音、清廟明堂の奏、則ち閉戶者の歲月に多きを存するのみ、江楓の單句も、亦以て海外の奇と稱する足る、京江の王文治評す、卷中に、靜齋先を送る七律有り、按に、靜齋は河口市、鳩巢の門に出づ、即ち河越の文學と爲る、日州之れと師資の契有り、と云ふ、○夢樓書に工なりと、湖海詩傳に見ゆ、又詩を善くす、袁子才詩話に載す。

吳子寧、一日詩を袖にし來り、告て曰く、是れ雲山の真面

也呈秋樹成島少公傳家儒業號精醇不枉
 移居來卜鄰臺閣文章新進士江湖風月舊
 詩人龍門通謁會無路鷗社訂盟今有因正
 是鳥飛花落日愧將白髮對青春題金澤酒
 樓云勝區眞箇冠關東兩日烟波晴日風隔
 水蘆花秋雪白漫山楓葉夕陽紅抽身人影
 衣香底寄跡鷗天鷺國中莫怪老夫拚爛醉
 盛遊難得此回同時梁星巖守雲山名雉字
 神遊雲山之外又有桂花仙史塊然道人半
 醉翁之別號所謂橫看成嶺縱成峯莫怪其
 稱謂之多也

石川章字君達住居城西麴坊會託人寄示
 所業今舉其一朝日將軍云會看北陸掛朝
 曦忽被東風吹白旗誰道烏江雁不逝將軍

目なり秋樹成島少公に呈せりと、家に傳はる舊業精醇
 と號す、枉げず移居來て鄰を卜り、臺閣の文章新進士、江
 湖の風月舊詩人、龍門謁を通ずる會で路無く鷗社盟を訂
 す、今因有り、正に是れ鳥飛び花落る日、愧つ白髮を將て
 青春に對すと、金澤酒樓に題して云ふ、勝區眞箇に關東
 に冠たり、兩日は烟波晴日は風水を隔て蘆花秋雪白、
 漫山の楓葉夕陽紅なり、身を抽ず人影衣香の底、跡を沿
 ず鷗天鷺國の中、怪む莫れ老夫の爛醉を拚すを盛遊得
 難し此の回の同じきを、時梁星巖守雲山名は雉、字は神
 遊、雲山の外、又桂花仙史、塊然道人、半醉翁の別號有り、謂
 はゆる、横に看ば嶺を成し、縱は峯を成す、怪む莫れ其稱
 謂の多きを。

石川章字は君達、城西麴坊に住居す、會て人に託し所業
 を寄せ示す、今其一を舉ぐ、朝日將軍に云ふ、會て看る北
 陸に朝曦を掛くるを、忽ち東風に白旗を吹かる、誰か道
 ふ烏江雁逝かずと、將軍背て虞姬を戀はず一稱以て樂
 知す可し

不肯戀虞姬、一詞、
以

備中笠置人野本萬春始親衣鉢子成今爲
中津文學讀其詩者不問而知衣鉢之所傳
也秋江云漲落初嘶雁寒輕未醉楓斜陽一
疋練幾點畫漁翁

姫路人角田義方題靜姫歌舞圖源幕府召
靜姫於鎌

倉、按問、且
令、遊、歌、舞。云飛蓬忍見柳營春不爲將軍開

一響歌曲安知非諷諫誰憐芳野雪中人亦
可喜也。

予嘗觀前九年後三年六波羅行幸結城合
戰蒙古退治等諸畫卷不唯有倚軾寓目之
想乃古今制度之沿革亦略可因是以考究
焉宜考證家之拳拳乎此也津藩文學鹽田
隨齋詩名赫赫予聞有朝鮮征伐圖七古竊

備中笠置の人野本萬春始め頼子成に親炙す今中津の
文學たり其詩を讀む者は問はずして衣鉢の傳はる所
を知らん秋江に云ふ漲は落つ初嘶の雁寒は輕し未だ
醉はざるの楓斜陽一疋の練幾點か漁翁を畫くと。

姫路の人角田義方靜姫歌舞圖に題して源幕府、靜姫を鎌
倉に召し、按問
し、且つ歌舞
を進めしむ。云ふ飛蓬見るに忍びんや柳營の春將軍の
爲に一響を聞かず歌曲安んぞ知らん諷諫に非るを誰
か憐れむ芳野雪中の人亦喜ぶ可し。

予嘗て前九年後三年六波羅行幸結城合戰蒙古退治等
の諸畫卷を觀る唯に軾に倚り目を寓するの想有るのみ
ならず乃ち古今制度の沿革亦略ぼ是に因て以て考究
す可し宜なり考證家の此に拳々たることを津藩の文
學鹽田隨齋詩名赫赫予聞く朝鮮征伐圖七古有りと竊
に意ふ此圖も亦近代の名手に出づ況んや隨齋排弄の才
を逞し而して描寫神に入るをや頃ろ一箇の沈推敬を

意此圖亦出於近代之名手、況隨齋逞排某之才、而描寫入神乎、頃遺一箇沈惟敬、懇求再三、然惟敬遂未反命者何哉、豈清正行長等猶未之許耶。

横田延壽字萬年、號樂只堂、予曰、君刀圭役役、不遑暇食、何樂只之有哉、及讀其詩、爽然自失、偶成云、園林長夏草萋萋、硯北不知日向、西、香、破蒲葵、非我事、藥名手把小牌題。

周之冕花鳥一幅、亦係二句、云、花似楊妃睡未醒、鳥如明帝皆難捨、予改曰、花如妃子醉增娟、鳥似君王看不足、蓋取樂天終日君王看不足之句、爾、下田牧子笑曰、其佳否、姑不論也、皆難捨三字、描禽鳥擬視之狀、不亦妙乎、君真不曉畫耳、牧子名謙、號地山、姫路人、

遣り、懇求再三せしむ、然れども惟敬遂に反命せざるは何ぞや、豈んど清正行長等、猶未だ之を許さざるか。

横田延壽、字は萬年、樂只堂と號す、予曰く、君は刀圭に役々として、暇食に遑あらず、何の樂みか、之れ有らんやと、此詩を讀むに及び、爽然として自失す、偶成に云ふ、園林長夏草萋々、硯北知らず、日の西に向ふを蒲葵に書破するは我事に非ず、藥名手から小牌を把て題すと。

周之冕の花鳥一幅、亦二句を係く、云ふ、花は楊妃の睡りて未だ醒めざるに似、鳥は明帝の皆捨て難きが如しと、予改めて曰く、花は妃子の醉ふて娟と増すが如く、鳥は君王の看て足らざるに似たりと、蓋、樂天、終日君王看れども足らずの句に取るのみ、下田牧子笑て曰く、其佳否は姑く論ぜず、皆捨て難きの三字、禽鳥擬視の狀を描す、亦妙ならずや、君は眞に畫を曉らざるのみと、牧子名は謙、地山と號す、姫路の人、畫を浦上春琴に學び、而して其

學畫於浦上春琴而入其室者也。

後閑霞厓精丹青之學予嘗問曰宋人畫幅傳本邦僅僅耳獨牧溪頗多何哉曰禪刹之遍天下亦久矣王侯士庶喜參禪亦非一日矣況畫北條氏之時建五大刹於鎌倉以延海外衲子於是一棒一喝之徒來者如雲而人人袱包中莫不實此畫來蓋以道侶之筆蹟易獲於咄嗟也其所以致多何足以怪焉又問曰閱書畫譜牧溪頗有貶議何也曰否否查初白人海記載內府收藏書畫其尤妙者三十五種其中有宋僧牧溪果蔬鳥雀圖觀是則其爲瑛壁亦可知足下必莫爲畫譜所誤也

畫譜引書史會要曰法常號牧溪畫祖虎猿鶴蘆雁山水人物皆隨筆

畫譜引書史會要曰法常號牧溪畫祖虎猿鶴蘆雁山水人物皆隨筆

室に入る者なり。

後閑霞厓丹青の學に精し予嘗て問て曰く宋人畫幅本邦に傳はる僅々のみ獨牧溪頗る多きは何ぞやと曰く禪刹の天下に遍きも亦久し王侯士庶喜で禪に參ず亦一日に非ず況んや北條氏の時當り五大刹を鎌倉に建て以て海外の衲子を延く是に於て一棒一喝の徒來る者畫の如く而して人々の袱包中に此畫を齎し來らざる莫し蓋道侶の筆蹟咄嗟に獲易きを以てなり其多を致す所以何ぞ以て怪むに足らん又問て曰書畫譜を閱するに牧溪は頗る貶議有るは何ぞや曰否々查初白人海記に內府收藏の書畫其尤妙なる者三十五種を觀す其中に宋僧牧溪の果蔬鳥雀の圖有り是を觀て則ち其瑛壁たる亦知る可し足下必書畫譜に誤らるゝ莫れ

畫譜に書史會要を引て曰く法常は牧溪と號す龍虎猿鶴蘆雁山水人物を畫く皆筆に隨ひ墨を點して成る意思簡當如飾を費さず但々隨筆として古法無し誠に樂玩に非ず

平田宗愷先生夏日云、簷陰三尺人爭路、廡下
 下、麴廻犬振、蠅居然釘鉸打油之流矣、布川
 弦五乃出其門、而詞藻清新、不與師相類、弟
 子未必不勝師、予有取于韓子之言焉、秋夜
 遊瀧川云、萬重楓葉籠鐘閣、一帶溪流繞竹
 根、半夜山僧如有待、冷烟寒月未關門、又摘
 其句、宿金輪寺、木魚聲斷風吹葉、山犬眠濃
 月度牆、冬日偶成云、斜日半簾僧曝背、寒梅
 一樹客敲門。

松下窩字仙鶴號碧海、近者寓居于小松川
 村五分一一名之僧舍、因號半佛菴、性孤介、不
 樂世事、年紀強仕、而決然已賦、遂初焉、初從
 它山遊、後參星巖、二家咸曰、詩與禪莫有二
 致、唯曉乾屎橛耳、遂屹屹研討有年矣、則知

平田宗愷先生の夏日に云ふ、簷陰三尺人路を争ひ、廡下
 麴廻犬を振ふと、居然たる釘鉸打油の流布川弦五乃
 ち其門に出づ、而して詞藻清新、師と相ひ類せず、弟子未
 だ必しも師に勝らずんばあらず、予、韓子の言に取る有
 り、秋夜瀧川に遊ふに云ふ、萬重の楓葉鐘閣を籠め、一帯
 の溪流竹根を繞る、半夜山僧待つ有るが如く、冷烟寒月
 未だ門を關さずと、又其句を摘せば、金輪寺に宿するに、
 「木魚聲断えて風葉を吹き、山犬眠濃かにして月、牆を度
 る」と、冬日偶成に云ふ、斜日半簾僧背を曝し、寒梅一樹
 客、門を敲く。

松下窩、字は仙鶴、碧海と號す、近ごろ小松川村五分一一名
 の僧舍に寓居す、因て半佛菴と號す、性孤介、世事を樂ま
 ず、年紀強仕、而も、決然、已に遂初を賦す、初め它山に従ひ
 遊び、後星巖に參す、二家咸な曰、詩と禪と二致有る莫し、
 唯乾屎橛を曉るのみ、遂に屹々として研討年有り、
 ち知る漆桶を打破するの日、殆んど遠きに在らざるを、
 昨夜に云ふ、梅花梢上月輪高く、一椀の清茶濁塵に換ふ、

打破漆桶之日、殆不在遠矣。春夜云梅花梢上月輪高、一碗清茶換濁醪、山鬼從來佳友也、湘簾半捲讀風騷。

唐人用也字格頗多矣、蔡蒙齋不收之何也、

歐陽脩樂津店云、嬋娟有麗玉如也、美笑當

予繫予馬、羅韓碧簾豈相容、行到山頭憶山

下、劉商開濟上人云、玉英期共采、雲嶺獨先

過、應得靈芝也、詩情一倍多、此其一斑爾。

清川靄墩遊池上本門寺云、翠嵐深處認朱

萼、五百年來大化城、果識一天歸、妙法滿山

松柏自梵聲、韓文公有言、餘事作詩人、豈靄

墩之謂歟、其洞垣之妙、固不俟贊矣、靄墩名

玄道。

三木純甫松下考槃云、松杉鬱鬱綠成幃、日

山鬼從來佳友也、湘簾半ば捲いて風騷を讀むと。

唐人也の字を用ふる格頗る多し、蔡蒙齋之を收めざるは

何ぞや、歐陽脩樂津店云ふ、嬋娟麗有り玉の如き也、美笑

予に當り予の馬を繫ぐ、羅韓碧簾豈相ひ容れんや、行て

山頭に到り山下を憶ふ、劉商開濟上人采を採り寄せ云ふ、玉

英共采を期す、雲嶺獨り先づ過ぐ、應に靈芝を得べき也、

詩情一倍多し、其此れの一斑のみ。

清川靄墩、池上本門寺に遊ぶに云ふ、翠嵐深き處に朱萼

を認む、五百年來の大化城、果して識一天妙法に歸す、

滿山の松柏自ら梵聲と、韓文公言へる有り、餘事詩人と

作ると豈んど靄墩の謂ひか、其洞垣の妙、固より贊を俟

たず、靄墩名は玄道。

三木純甫が松下考槃に云ふ、松杉鬱々として綠幃を成

午青苔露未晞、時情清風煮茶鼎、臥看孤袖
白雲飛、純甫今親炙羈墩、然一瓣香當爲倉
山炷也。

杜甫遊龍門奉先寺云、天闕象緯逼、雲臥衣
雲冷、西清詩話載、荆公曰、天闕當作天閣、對
雲臥爲親切、云云、按此說甚整、果作天閣、其
義亦晦矣、李白口號贈盧徵君鴻云、雲臥留
舟壑、天書降紫泥、其對屬與杜同例、荆公亦
將改天書邪。

綾瀨在墨水、上流風景佳絕、然其名未甚顯、
自綾瀨先生出焉、天下之人咸罔不拭目觀
之、又罔不刺舟而延緣於湍渚、葦荻之間、可
見古今之勝槩、未始不與名人達士相須焉、
中村周敬有詩云、父子名儒所少聞、鸞鳩嘲

し、日午青苔露未だ晞かず、時に清風を情て茶鼎を煮る、
臥して看る孤袖白雲の飛ぶを、純甫は今羈墩に親炙す、
然れども一瓣香當に倉山の爲めに炷すべし。

杜甫龍門奉先寺に遊びて云ふ、天闕象緯逼り、雲臥衣裳
冷なりと、西清詩話に載す、荆公曰く、天闕は當に天閣に
作るべし、雲臥に對して親切たり、云云、按するに此の説
甚だ整す、果して天閣に作ば、其義亦晦し、李白口號盧徵
君鴻に贈るに云ふ、雲臥、舟壑に留り、天書紫泥に降す
と、其對屬、杜と同例、荆公亦將に天書を改めんとするか。

綾瀨は墨水の上流に在りて、風景佳絶なり、然れども其
名未だ甚だ顯れず、綾瀨先生出で、より、天下の人、咸な
目を拭ひて之を觀ざる罔し、又舟を刺して湍渚葦荻の
間に延緣せざるは罔し、見る可し、古今の勝槩、未だ始より
名人達士と相ひ須たずんばあらざるを、中村周敬詩有り
云ふ、父子名儒聞くこと少き所、鸞鳩嘲笑向は紛々、犬鵬
の水壑三千里、刺し見る垂天綾瀨の雲、周敬、鸞翁の門に

笑尙紛紛、大鵬水擊三千里、剩見垂天綾瀨
雲、周敬遊鵬翁之門有年矣、其人諧謔、每醉
後耳熱、拂衣起舞、噫人琴共亡矣。

杜甫咏竹云、風吹細細香、張籍云、竹香新雨
後、李白云、瑤臺雪花數十里、片片吹落春風
香、元稹云、雨香雲淡覺微和、盧相云、雲氣香
流水、以上香字、咸胚胎于月令、水泉必香之
一句矣、高誘注淮南子時期訓引曰、香無穢
惡之氣、以是推之、無適而不合也。

萬世先生咏楠公云、百方仰攻雲梯巧、三策
時播蟻附兵、又檀浦懷古云、六軍風亂群山
樹、萬馬秋騶大海波、予每誦二聯、仰止感愴
不能已止、蓋予幼時、握衣門下、童子何知、祇
記大雅之萬一耳、他日復興賢嗣相謀、完璧

遊ぶ年有り、其人諧謔、醉後耳熱する毎に、衣を拂ひ起て
舞へり、噫人琴共に亡びたり。

杜甫竹を詠じて云ふ、風吹て細々香しと、張籍云ふ、竹
は香し新雨の後と、李白云ふ、瑤臺の雪花數十里、片々吹
落して春風香しと、元稹云、雨香しく雲淡く微和を覺ゆ
と、盧相云、雲氣流水に香しと、以上香の字、咸な月令の
水泉必香しの一句に胚胎す、高誘、淮南子に注して時期
月令の文曰く、香は穢惡の氣無しと、是を以て之を推せば、
適くとして合はざる無はし。

萬世先生楠公を詠じて云ふ、百方仰ぎ攻む雲梯の巧、三
策時に播く蟻附の兵と、又檀浦懷古に云ふ、六軍風に亂
る群山の樹、萬馬秋に騶る大海の波と、予二聯を誦する
毎に仰止感愴、已み止む能はず、蓋予幼時、衣を門下に
握く、童子何ぞ知らん、祇に大雅の萬一を記するのみ、他
日復た賢嗣と相ひ謀り、完璧を謹掲せん、正に是れ商を
引き羽を刻むの日なり、先生姓は荻原始め藤邸と號し、

謹揭焉。正是引商刻羽之日也。先生姓萩原、始號藤邱、後改萬世、門徒之盛、近世少其儔矣。

唐人煖子之制、可見于今者、奥州多賀城碑是已。元稹詩云、開遠門前萬里煖、自注云、平時開遠門外立煖、云、去安西九千九百里、以示戎、云云。按古者奧羽地方、背畔不常、征討無虛歲、是以設鎮守大府焉、且建煖子于此、元稹所謂示戎之意已。

菅公餞別奥州刺史云、程里一千五百里、即與多賀碑相符矣。又陪源亞相第餞安鎮西藤陸州云、相送別西又別東、二千五百里程中、則知自鎮西至多賀柵、以二千五百里爲定制矣。

後萬世と改む門徒の盛なる、近世其儔少れなり。

唐人煖子の制、今に見る可き者は、奥州多賀城の碑是れのみ、元稹の詩に云ふ、開遠門前萬里の煖と、自注に云ふ、平時開遠門外に煖を立つ、云ふ、安西を去る九千九百里、以て戎に示す、云云、按ずるに古、奧羽地方、背畔常ならず、征討虛歲無し、是を以て鎮守大府を設け、且つ煖子を此に建つ、元稹の謂はゆる示戎の意のみ。

菅公奥州刺史に餞別して云ふ、程里一千五百里と、即ち多賀碑と相ひ符す、又源亞相の第に陪し、安鎮西藤陸州を餞するに云ふ、相ひ送りて西に別れ又東に別る、二千五百里程の中」と、則ち知る鎮西より多賀柵に至る、二千五百里を以て定制と爲せり。

予嘗於鉅公家睹龍頭一口、銅色蒼然、殆數百年物也、賞鑑家道以是安頓杖頭、古人所謂龍頭杖也、韓退之赤藤杖云、人懷冰雪生秋思、倚壁蛟龍護畫眠、山谷竹杖贊、浩翁畫眠、蒼龍掛壁、咸指此物云、讀者以謂唯用費長房故事已、寧知有現成之龍頭乎哉、

高階竹西始師事木村東門先生、東門之學、率以躬行爲先、是以門下諸子、耳染目濡、靡有玷行、宜矣、竹西之爲君子人也、卷菱湖先生嘗云、在厥倉素封之流、臨池之娟、如竹西者、殆希、其儔予亦所以屢摘其句、而不辭操觚之屢也、秋夜云、雨休虛枕溪流響、風動疎簾月影篩、郊行云、虹橋攀上蒼神廟、螺舍環行羅漢宮、近郊踏青之人、大抵受用此二句、

予嘗て鉅公の家にて、龍頭一口を睹る、銅色蒼然、殆んと數百年の物なり、賞鑑家道ふ是を以て、杖頭を安頓すと、古人の謂はゆる龍頭杖なり、韓退之、赤藤杖に云ふ、懷に入る冰雪秋思を生じ、壁に倚る蛟龍畫眠を護ると、山谷竹杖の贊に、浩翁畫眠り、蒼龍壁に掛ると、咸た此物を指して云ふなり、讀者以謂へらく、唯費長房の故事を用ふるのみと、寧ぞ現成の龍頭あることを知らんや、

高階竹西始、木村東門先生に師事す、東門の學、率む躬行を以て先と爲す、是を以て門下の諸子は、耳染まり目濡ひ、玷行有る靡し、宜なり、竹西の君子入たるや、卷菱湖先生嘗て云ふ、厥倉素封の流に在りて、臨池の娟なる、竹西の如き者は、殆んど其の儔希なり、予も亦屢、其句を摘み、而して操觚の屢なるを辭せざる所以なり、秋夜に云ふ、雨休んで虚枕に溪流響き、風動きて疎簾月影篩ふと、郊行に云ふ、虹橋攀ち上る蒼神廟、螺舍環行す羅漢宮と、近郊踏青の人、大抵此の二句を受用す、

神機時話卷之下

柳橋詩話卷之下
終

日本詩話叢書

一五八